

宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ

永久に未完成の哲学ノート 第二部

高原利生

はじめに

本書「宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ」は、論理学と世界観を内容とする哲学と、生き方についてのノート「永久に未完成の哲学ノート」第二部である。

本書の履歴：もとは、大学名誉教授中川徹先生「TRIZ ホームページ」2018年10月高原利生論文集(4)2018年10月掲載の「未完成の哲学ノート（2018年）― 矛盾モデルと根源的網羅思考による人類の生き方の基本原理についてのノート」である。

これをもとに書き直した同名の本を出版：2019年3月25日初版、同4月22日二版、同8月20日三版、同9月9日四版。本版から題名変更し二冊に分けた。

目次

はじめに	p.3
宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ 永久に未完成の哲学ノート 第二部	
前書き	p.5
概要 第二部	p.7
5. 世界観と対象化と一体化、自由と愛の統一による生き方 続き	p.11
5.5 実現の課題	p.11
5.6 実現の課題の検討	p.12
6. 人類の統一理論	p.25
7. 宇宙論理学	p.32
8. ポスト資本主義の準備	p.38
8.1 ポスト資本主義のニーズとシーズ	p.38
8.2 世界観、常識と支配層	p.44
8.3 政治のインフラストラクチャー	p.52
8.4 情報のインフラストラクチャー1：マスメディア	p.67
8.5 情報のインフラストラクチャー2：人工知能	p.71
8.6 教育のインフラストラクチャー	p.80
後書き	p.85
文献	p.86
概要 第一部	p.89
おわりに	p.100

以下、別冊の第一部

はじめに

大阪学院大学 中川徹 名誉教授による解説

論理学、世界観、生き方へ 永久に未完成の哲学ノート 第一部

前書き

概要 第一部

1. 事実、価値と論理

- 1.1 思考が生まれる歴史と論理
- 1.2 基本概念：事実、オブジェクト、粒度、網羅
- 1.3 思考の機能
- 1.4 価値の全体

2. 根源的網羅思考 その1 生成と内部構造

3. 矛盾モデル（運動モデル）

- 3.1 矛盾とは何か：差異解消矛盾と両立矛盾
- 3.2 矛盾の構造の発展 1：両立矛盾内の発展
- 3.3 矛盾の構造の発展 2：両立矛盾から一体型矛盾へ
- 3.4 小さな問題の認識と変更
- 3.5 大きな問題の認識と変更
- 3.6 矛盾の運動領域、矛盾の原動力
- 3.7 矛盾の種類（まとめ）

4. 根源的網羅思考 その2 内容、その3 方法

- 4.1 生きることの全体
- 4.2 根源的網羅思考とは？ その2 内容：全体、本質への指向
- 4.3 根源的網羅思考とは？ その3 方法：粒度決定と推論
- 4.4 根源的網羅思考の原理と使い方のまとめ

5. 世界観と対象化と一体化、自由と愛の統一による生き方

- 5.1 弁証法論理と歴史
- 5.2 物々交換の開始以前
- 5.3 物々交換の開始とその後
- 5.4 対象化と一体化の矛盾

後書き

謝辞

文献

概要 第二部

高原利生論文集(4) 解題 抜粋

宇宙論理学とポスト資本主義の準備へ

永久に未完成の哲学ノート第二部

前書き

本稿はノートである。第一部では、1. 根源的網羅思考、矛盾モデルによる論理学、2. あるべき世界観（対象化と一体化の矛盾の歴史）、3. これによる生き方を述べた。

この第二部では、第一部についての課題検討、応用として人類の統一理論、宇宙論理学とポスト資本主義の準備を述べる。

「概要」に内容のあらましを示した。「はじめに」に書いた初版との違いは、次の二点である。

1) ほぼ毎日、間違いが見つかり新しい発見もあり、多くを考え直し関連する箇所の修正をした。特に、事実、矛盾の歴史などは大きく直した。

2) 重複が多かったところを整理した。B5 版では約 40 ページ短くなった。本版は小型の A5 版にしている。

・感情、感性は、論理以上に生き方にとって重要だが、本稿は論理だけを扱う。

・提起している根源的網羅思考により、考えている事項の全体の中の位置が分かるように粒度、網羅の結果を書きながら記述をしているので煩わしい。

自分の常識になっておらず身に付いていない粒度、網羅の内容と論理を書こうとするとごちない悪文になる。中身のない美文よりはいいと思っている。

・思考の経過、分かりかけていることは何か、分かっていることは何かをなるべく書くようにした。分かった内容だけを閉じた形にして書くとするが、将来への展開の途中であり、未完であることも示そうとした。

・定説、常識は、全て近似で仮説であり、常に見直しを行うべきものである。書いている内容も、近似で仮説であり常識と異なるところが多く理解されにくい。

・全てが関係していて同時に決まる内容が多いので、直線的に記述が進まない。そのため、後で述べる内容を前提にしている内容を書く場合、構成に苦勞する。

以上から、本稿は、おそらく読みにくい。自分でも読むのに苦労し、読むたびに、「全体の推論が成立する粒度」が不十分なところがいくつも見つかる。読みにくい、分かりにくいところは、推論と粒度が合っていないか、より展開の必要なところである。読みにくい、間違っていることを直していただくことを望んでいる。

それに、自分で考え納得したことだけが身に付き、理論と応用を発展させることができる。これは、読みにくくても読んでいただくための弁解である。

述べた理屈は、今あるものをこう変えた方が良い、共有した方が良いと思っているものである。応用は各自が展開されると良い。理屈と応用は同時にできた。自分にはどちらも同じように大事な意味を持っている。

・書いている内容は、常識と異なっているものが多い。

現在、多様であいまいな意味で使われている用語を、意味を限定して使っていることがある。限定と言っても、用語を「今までの意味を含み、今までの意味の拡張になっているようにする」と「推論と合う」ことを両立するような一般化である。少し苦労した。存在、オブジェクト、粒度、網羅、矛盾、自由、愛、機能、構造、価値、技術、制度などである。おそらく最も常識と異なるのは**事実**、**存在**、**粒度**、**愛**、**制度**であろう。これらによって、今までのいつまで経っても終わらない混話が解消されて問題がはっきりし前に進むことができた。現に論理学、世界観（を合わせた「哲学」）が作れた。例えば、ものと同様、観念のやや固定的状態も**存在**と扱い、その変更を起こす運動が思考である。今扱うオブジェクトを**事実**から**粒度**で抽象化して引き出す。検討して得た結果の**粒度**の具体化を行い現実を変える。

自分の使っている意味と異なる用語が多いと読みにくい。この点をお詫び申し上げる。

2019年9月以降、気づいた年月を付記していることがある。

[引用文献名はかっこ内に、文献は最後に示す] 下線は文章上の強調か課題を示す。章以下の項の振り方は、1 1.1 1) 11) 文字下げの1. 11. が基本である。

概要 第二部

本書は「論理学、世界観、生き方へ 永久に未完成の哲学ノート第一部」の続きである。はじめに、第一部で提案した世界観、生き方の課題を述べる。

第一部の応用として、人類の統一理論と、宇宙比較論理学、宇宙論理学の前提を述べ、ある星の例を書き、次に、ポスト資本主義の準備を述べる。

1 ポスト資本主義のニーズとシーズ

1) 背景

資本主義は、250 年前当時の左派の目的を、実質、実現してしまった。資本主義が形式的に全員参加社会を作った。ポスト資本主義は全員で作らないといけない。本来なら非支配層は、新しい価値の実現を目指すべきなのにできていない。支配層も現実や価値、未来への展望をとらえていない。

世界的に 1. 資本主義の利益中心主義と非合法(的)金儲け、2. 事実認識ができず未来像を作れず、自国や覇権を不法に守る支配層、特に(英米、中露、北朝鮮を含む)全ての国の謀報界、3. 大衆受けする小さな価値だけを言い張るリベラル・左派の偽善の三つが障害になっている。

お金を価値とする資本主義の問題の解は、お金だけが価値でないポスト資本主義に進むことである。

新しい生き方を作ることとポスト資本主義という制度を作ることという二つは、同時に解決するしかない課題である。つまり、新しい生き方を作ろうとしない人にポスト資本主義は作れない。

2) ニーズ

全体と本質を求める指向を持ち、新しい価値と生き方、ポスト資本主義を検討することが課題である。資本主義下で対象化がもたらした課題も大きくなってきている。三つの課題がある。個人や組織の復讐をなくし、自己と自国を相対化し、お金に代わるまたは含む新しい価値を作る課題である。

3) シーズ

今あるシーズと、できつつあるシーズがある。今あるシーズの一つは、資本主義下での対象化がもたらした可能性である。このシーズを生かし切ると、地球規模の被害をもたらす小惑星の衝突や太陽嵐等に対処できるかもしれない。後のシーズは、新エネルギー、AI である。

2 世界観、常識と支配層

常識、世界観、価値観は、今まで主に支配層が作ってきた。支配層は実体が明示されない曖昧な複合体である。普通「民主主義国」では、政権（野党も政権与党を補完或いは邪魔をし支配層の一翼を担う）、行政機関、経済界、（日本以外では軍、諜報界）、教育界、マスメディアからなる要素が作る。
一党独裁国の自由の問題は、作られた常識、欧米露等の「民主主義国」の形だけ民主主義による決定や、諜報界の非合法行為の問題と等価で、どちらも変更が必要である。

3 政治のインフラストラクチャー

価値の系列；種の存続、個体の生、生の属性が課題の重要性を決める。

1) 第一の重要課題、種の存続：災害から命、エネルギーを守る

食料、エネルギー、環境、物理的インフラストラクチャーを確保し地球と人類を破壊から救うことがポスト資本主義以前の第一の重要課題である。

1. 課題

五百年に一度ほどの確率（五百年後ではない。5年後かも10年後かもしれない）で、巨大隕石衝突、太陽嵐、巨大カルデラ噴火などが起こる。それ自体、大量死をもたらす大災害であり、人類、国単位の消滅などをもちうるかもしれない事態が、小さくない確率で起こり得る。全世界の課題は、これに対し人と設備を守ること、エネルギーと食糧確保である。

2. 対策

・命とエネルギー

情報と違い、ものとエネルギーはローカルに生産、消費できるのが良い。情報や設計についての「グローバル化」はあっても良い。

エネルギーについての根本的解決策は、分散され、（電磁遮蔽された）安全な原子力（おそらく核融合）発電のできるだけローカルな実現だろう。理想的には装置毎に原子力エネルギー発生を行う。

・リサイクル

廃棄物がゼロにならない場合、生産物の「量」は増大せず、人の「価値」は増大し続けるようにする。

・土木建築の基幹産業化

一戸建て住宅についても高層住宅についても修理しながら増改築続け、今の数十年程度の耐用年数を千年程度に代え、部分ごとに増改造可能な構造を内蔵し、長期にわたって「価値」を増し続けることの可能な構造にする。

今後、AIの支援の下で土地建物の強靱化と高価値化に向けて発展し続ける構造を作るように姿を変えた土木・建築が基幹産業になり、労働と各人の教育とが一体になった全産業により価値は増え続けるようにする。

2) 第二の重要課題、個の生：全世界の政治経済課題

マスメディア、支配層を構成する政治家、軍部、諜報界の一人一人に、1. より大きな全体、より大きな価値、より正しい真実を求め続ける全体志向、2. 自分、自国を対象化、相対化することを求めたい。

1. 今、ポスト資本主義のためにも、第二の重要課題は[TS]に言う米欧資本主義内の覇権主義を終えることである。

2. 各国等の価値、利害は対立しているので、それを超える一段上の価値を目指すべきは自明である。外に目をそらせ自組織をまとめる手法の安直さは、今、明らかになっている。

「国」をなくすことにより、国間の秘密の必要はなくなり戦争（の可能性）も諜報界もなくなる。同時に、ものとエネルギーはできるかぎりローカルに完結するのが良い。「国」をなくした場合、貨幣発行、徴税を誰が行うか、要するにお金が生きている間の過渡期のお金の管理を誰がどう行うかが問題である。

3) 第三の重要課題、個の属性（自由と愛）

愛と自由という人の属性、価値に、お金という基準は不十分である。

労働と教育の一体化を図る。労働、生活を「合理的」目的と、対象や使う人などの価値を増す目的の二つの実現にしたい。

4 情報のインフラストラクチャー1：マスメディア

難しいが独立性自主性、客観的な価値判断、全体像を求める。マスメディアにも政党にも、高度な判断、総合的判断以前の責任がある。自分を対象化、客観化し、自分はどのような価値に基づいた報道を目指しているのか、どのように価値を見直し続ける努力をしているのか述べ報道するべきである。

5 情報のインフラストラクチャー2：人工知能

Society5.0の「膨大なビッグデータを人間の能力を超えたAIが解析」し見つける小さな価値はあってもよい。しかし、人が、新しい価値と自分自身の能力を追求しAIがそれを支援するという立場がゆらいではならない。

AIを2種の領域に分ける。

1. 顔認識のような新しい価値を生まない場合は、今後ともディープラーニングによっていい。2. 新しい価値を生む場合は本来の解析的手法を AI によって改良することが手段の主流になるのがよい。

6 教育のインフラストラクチャー

1) 全体

今の教育が、今の「国民」、政治、経済、マスメディアを作る。**哲学、論理と感性を増す生き方、認識でき発表でき世界を変える生き方**を身に付けさせることが必要である。

2) 初等中等教育

日本の今の特に初等中等教育は、抜本的改革を必要としている。教育の目的評価基準は、1. 全体の知力、感性の向上、2. 個人の能力を伸ばさせるだけ伸ばすという二つがある。この両立が必要である。教育に限らず全ての問題は、内容の改善が第一で条件の改善は二義的である。

小学校（と一部中学）の内容をいくつか述べるにとどめる。今は、必要な内容が不足し、かつ要らない内容が多い。今の内容を八割方入れ替える。

1. 感性、感情は、本稿では論じなかったが、論理以上に重要である。人は感情と論理で生きている。そして感情は、常に論理に勝つ。感性、感情をとおしてでないと、如何なる論理も物事も身に付かない。

特に、初期に、感動とその表現の方法を教え、それがコミュニケーションの始まりであることを教える。

3. 小学生のための「哲学（世界はどういうものか＝世界観、世界をどのように見ていくか変えていくか＝方法）」を教科書にまとめ学ぶ。

4. 論理1：抽象化、具体化の方法を、先生と生徒が、共に学ぶ。抽象化具体化を教えるのは難しい。その具体例を繰り返すしかない気がする。

俳句や短歌が良いかもしれない。横方向の論理、仮説設定、演繹、帰納と並んで、縦方向の論理、抽象化、具体化がある。

5. 論理2：仮説設定を、先生と生徒が共に学ぶ。演繹や帰納ではない。

6. 人の努力が制度を作ってきた。これからも皆で努力して作ることを教える。

7. 理科と社会（公民は別）を統合し、自然と人の文化の個々の物ごとの始まり、その感動、その後の運動と構造、それらを貫く論理を学ぶ。

個々の物ごとの始まりとは、宇宙、地球、時間、空間、生命、植物、動物、言葉、道具、火の利用、物々交換などの始まりである。

(第一部 5. 世界観と対象化と一体化、自由と愛の統一による 生き方 の続き)

5.5 実現の課題

得られたのは安らかな「幸せ」ではないかもしれない。なぜならこれは、**今の努力を永久に行い続けられないといけない生き方**であり、今の一瞬の、自分たちの自由と他の生命、他のものへの愛のための、文化・文明と心と行動の変革の永久の努力を行い続ける生き方である。今の一瞬が、世界の把握であり、過去の総括であり、祈りであり、思考であり、科学、芸術、技術、社会制度の変革行動であるような生き方である。それは良い。

次の課題がある。昔[THPJ/2015/01]の把握より複雑になった。以下、第一部の課題を、網羅でなく、整理できていない形で羅列するにとどめる。

1. 一体型矛盾は、項が時間とともにその内容も変わって行く。項である一体化も対象化も不十分である。一体化（愛、謙虚さ）という項自体の内容が不十分である。最近一体化だけでなく対象化も、自分以外の対象の対象化から自己対象化を含んだ対象化に進化しなければならぬことが分かった。

2. それぞれの完全な実現のために、この矛盾をできるだけ完全に運動させること。一体的努力を**全ての人が行う**なら問題の解決に寄与する。

この一体的努力は、本来、一体化（愛、謙虚さ）の結果として得られる困難な課題であり堂々巡りになる。

3. これに関連する悪い副作用、良い効果など他との相互関係の検討を行う必要がある。まとまらないがいくつか気になる問題を見ておきたい。

31. 「一体化の一体的努力を全ての人が行う」結果、できる社会は画一的な「善人」だけからなるつまらない社会かもしれない。

32. 気になることは、常識を変え、常なる努力を必要とする生き方を本質的に受け入れない何かがあるのではないかということである。

結果として、この生き方の努力をする人としらない人の二分の固定も起こるのではないか？

4. 対象化がもたらす多様化に対処する必要がある。

対象化の不足、謙虚さの必要性、努力を続けられない人をどうとらえるか、多様性の問題、これらは同じような問題らしい。

多様化とは、対象化と一体化、自由と謙虚な愛の矛盾の内容そのものである。これは、何を対象化するか何と一体化することから始まるだろう。しかし、生まれて以来の教育やマスメディアに作られた固定観念が邪魔をして、自分の対象化、一体化の内容はおそらく相対化、対象化しにくい。

これは多様化、特に個性の開花は難しいということだろう。

5. 一体化が対象化の拡大にも寄与する。これは、問題でなく、新たな認識であるが、これを解に利用する必要はあろう。これらの問題を今から悩んでも無駄かもしれない。しかし、今から悩むことは現在の問題をよく解決するかもしれない。

6. これら以前に、事実と価値の判断ができない。初歩的問題は大きい。

5.6 実現の課題の考察

この順に検討する。最後の項にまとめを示す。分からないことをそのまま書いているので、特に読みにくいと思う。ご容赦いただきたい。

1) 矛盾の項：一体化、愛、謙虚さと、対象化自体が不十分

一体化と対象化の二項に課題がある。

1. 一体化

一方向一体化により、集団としてまとまった安定した生き方と、神や大きな集団に対して自己を相対化、対象化することもでき、謙虚で努力し続ける生き方が得られた。この長所は残す必要がある。

一方向の謙虚さは態度として必要である。一体化には、多様な人の心が安んじて謙虚になり大きなものへ帰属し信じるという下からの一体化は前提としてある。神との双方向の関係があり得るのかよく分からない。あるのかもしれない。

弁証法的止揚によって、過去の思考を高めること、自分と相手の双方の意見を高めることが、思考、対話の目的である。実際には、全肯定で相手に同意して終わるか、全否定の非難をして終わることが多い。これには、相対化、対象化の不足と同時に、謙虚さという一体化の不足が大きい。ほとんど全ての問題と言って良い。相対化、対象化、謙虚さは、必ず同時に必要である。その前に各人の固定観念への無意識の執着があり「原因」になっている。入れ子になったこの構造を直すのは大変な課題である。日本に特有の課題として、周りと同じ化し過ぎ「空気を読む」み過ぎる傾向がある。

「相対化、対象化と同時に、謙虚さという一体化が必要である」「その前に固定観念の無意識の執着がある」のは、全ての人に当てはまる。

11. 一方向一体化により解決できるものの最大限は何か？実際に何が得られたか？一方向一体化で得られるものの最大のもは人の謙虚さである。一体化には、多様な人の心が安んじて謙虚になり大きなものへ帰属するという下からの一体化がある。今向き合っている全てのものに対する祈り、集中、一体化、愛かもしれない。

12. 一方向一体化によって得てはいけないうものはどういうものか？（済んでない）
13. 一方向一体化が実現してどういう欠陥が見えてきたか？（一部済んだ）

次は謙虚さと一体化について述べた[FIT2013]からの引用である。

粒度特定、方法を規定するものが態度である。

態度の極限は、徹底的に誠実であること、オブジェクトに対する対象的態度と一体的態度の極限である。一体的態度の極限が謙虚さ、対象的態度の極限が批判である。謙虚さと批判は、独立していながら、両方がそれぞれ相手を高めながらより高くなっていく一体型矛盾（両立矛盾の一種）を作る。

謙虚さと批判の一体型矛盾は、時間分離 [LB]により分離でき、前項が、とりあえずまず全面的にとる態度、後項が、その一瞬後相手と対象をより高い次元にするための全面的批判の態度である。

理想的には、その後、後項が前項に肯定的に反作用し、両項が良くなっていく好循環を作る。

謙虚であることは、本来の一体化の面から相手と対象に感謝する(相手と対象から自分に気持ちを「受け取る」)こと、相手と対象をほめ(相手と対象に自分の気持ちを「与える」)、ともに喜び合うこと、相手と対象の現在、現在をもたらしたもの、可能性の全体を理解することであり、相手、対象との同一性である。

副次的な対象化の面から自分を相対化することである。つまり、謙虚であることは、対象化の面から自分の既存の固定観念を相対化し、同時に他と高い次元での一体化をもたらすという構造がある。

この謙虚さは、高い認識をもたらして自分を高め、他集団の悪意的排除をする悪しき帰属を排除し、(私的)所有に代わる、まだ名前のない愛に似た対象に対する意識をもたらす機能を持つ。

相手、対象を高める批判は、本来の対象化の面から、対象との差異性の対象化処理の態度であるが、副次的に相手と対象を自分とともに向上させる一体化の面もあるという構造がある。

この批判は、変え与え教えることによって相手と対象を高めるといふ機能を持つ。感謝し、ほめ、謙虚である対象は、自分であり、相手であり、対象であり、これらを含んだ「事実」である。

努力が実れば、お互いに感謝し合い相手を褒め喜び合う。感謝し相手を褒めお互いに喜び合うことは、勇気と能力を要する実に難しいことである。

しかし、誰も、褒められることだけが、自分を良い方向に導いてくれる。自分を相対化しない固定観念は、謙虚さを妨げる。この態度は、謙虚さと批判性、対象化と一体化を、極限まで徹底して求める根源的網羅思考と、謙虚さと批判性、対象化と一体化を統一する弁証法であった。根源的網羅思考には、態度として、謙虚さと批判性の矛盾が特に適用される入れ子構造がある。

[態度を規定するもの]

態度、弁証法と根源的網羅思考を規定するものがあるだろうか？あるとすれば何だろうか？

1. 態度を直接規定するものは第一に、その最大のものが、価値とそれによる目的であることは明らかである。より良き価値のために相対化と追求を続けねばならない。この追求も根源的網羅思考による。第二に、謙虚さと批判性という矛盾を何が意識させるだろうか？これは実感できず今後の課題である。

態度、弁証法と根源的網羅思考を直接規定するものも、弁証法と根源的網羅思考という入れ子らしい。

2. 次に、態度を間接的に支援するものは何か？

網羅的でないが思いつくことが、二つある。一つは、弁証法では、全てが関係し合っているため、あることの達成には他の達成も必要になる。同時に、これはあることの達成が他の達成にも貢献することを示す。一事が万事、一時が万時、我がことの今が世界の今と今後につながる。この可能性の実感は、態度、姿勢、方法の内容を良くしていく原動力になるのではないか？

二つ目として、もし、生き方つまり態度、方法の複雑さに統一性があり、態度、方法内の各制約が合理的に充足されれば、態度、方法それぞれの改善が進み易く、人はその態度、方法を取り易いであろう。生き方、態度、方法の内部を規定する制約には、価値と事実についての生き方、態度、方法が「何」に依拠するか？「何」を対象とするか？「何」をどのようにより良く変え続けるのか？の三つがある。制約の一番目、謙虚に依拠すべきは、事実とその歴史である。謙虚であるためには、自分より大きいものを受け入れることが十分条件である。自分より大きいものを、歴史を含めた事実とすることができる。

制約の二番目。事実とは、対象的、批判的により良く変更していく対象であり、一体化の対象でもある。

制約の三番目について、弁証法、根源的網羅思考の論理は、事実の歴史の総括で得られた。歴史は論理と一致するという弁証法論理の一つの結論自体、事実の歴史から得られた教訓である。

以上から、この「何」を、歴史を含んだ事実とすると、方法と態度についての三つの制約が統一的に充足される。[FIT2013]

まだ、一体化、愛、謙虚さという項自体が不十分である。

一体化には、1. 自分の外のオブジェクトとの一体化、2. 自分の内の世界観－価値－態度－粒度特定－論理－行動の統一の二つがあるであろう。

この二つがあると、理想的な一瞬に没入できる生き方が実現し、実現の原動力になるのではないのか。

理想的な一瞬の生き方；個々の認識における謙虚さ、個々の行為における誠実さを前提とする。その上で、一瞬の生き方の理想は、自由と愛の統一、対象化と一体化の統一である。

こうして、個が、一瞬に一体化し没入し、同時に一瞬が、客観的に全歴史、全世界の問題解決が進みつつあるという参加の主観における実感が得られる。[THPJ2015/1,02]

謙虚さという一体化は、一方向一体化でいいか、双方向一体化が必要かは微妙である。これは重要で自然や神に対して謙虚であることの位置に関わる。とりあえず一方向一体化と双方向一体化の二つがあるとし、双方向一体化の内容は保留しておく。

謙虚さは、対象化から間接的に得られる——つまり、対象化が生産を増大させ、それによって、物々交換が起こり経済が発展し人が増えるため、人の心をまとめるための、神や自然への謙虚さを必要とする——が、もう一つの別の流れでも得られる。対象化は、自分という対象を相対化することによって起こる[FIT2013]。

そうなるとこのいわば直接の自己相対化と一方向一体化による謙虚さの、意味合いの違い、歴史順序と価値への寄与の度合いが重要になる。

両者は別の謙虚さかもしれない。整理できていない。

宗教の生んだ謙虚な態度は今も必要と思う。しかも、謙虚さは今まで宗教あるいは宗教的感情によってしか得られなかった。

一方向一体化から得られる謙虚さと求めなければならない双方向一体化の中身と双方向一体化の実現方法の二つがある。

理想的な双方向一体化で思い浮かぶのは 26 歳のマルクスが
経済学・哲学草稿で描いた 1. 意識のないもの（太陽と植物）
どうしが相互にお互いのプラスになる作用を行いあう双方向対
象化である。「太陽は植物の対象であり。植物には不可欠の、
植物の生命を保証する対象である。同様にまた植物は、太陽の
もつ生命をよびさます力の発現、太陽の対象的な本質力の発現
として、太陽の対象なのである」[EPM p.223]

これを意識のあるものにも拡張し、かつ意識のないものどう
しも擬人的にお互いのプラスになる作用をしあう一体化ととら
えることにする。こうして全ての人、ものの立場に立った双方
向一体化ができる。2019.12.02

一方、一方向一体化と言う時、思い浮かべるのは、2. 聖書「詩編」などの
表現の謙虚さと、3. 強制された悪しき政治的独裁者への服従、悪しき独裁者
の管理の容認という対極の二つである。

「愛」という価値は、この 1 だけでなく 2 も含む。3 は含まない。謙虚さ
は一方向一体化である。しかし 3 は排除しなければならない。一人一人が相
手や他オブジェクトの価値を高めるには、必死にその実現方法を考え実行す
る小さな神仏にならないといけないのではなかという状態から前に進まな
い。おそらく罪と罰を超える新しい原理が必要である。そのときに復讐がな
くなる。

2. 自己対象化、自組織、自国対象化

2018 年末に気づいた。今まで、一体化が、一方向から双方向に形を変えてい
くことだけに着目していたが、これと同時に対象化も、自分以外の対象の対
象化から、自己対象化を含んだ対象化に進化して行かなければならない。

本人は意識していなくても、客観的に傲慢になっていて思考、議論が深ま
っていないのが、一体化の困難さに劣らない問題である。

自己対象化ができないことは、自組織と自国対象化ができないことに繋が
る。どうしたら解決できるか？

2) 多くの人の努力が必要だが困難であること

矛盾の解の完全な実現のために、この矛盾を完全に運動させることが必要
である。制度と人の生き方の二つを同時に変革することは困難のように見え
るが、数千年の歴史において、不十分だが無意識に二つを同時にやってきた
[FIT2016]。意識して努力すれば狭期間で二つは実現可能だろう。おそらく全
員が同時に目的を持ち必死に意識的に没頭して努力することなしには実現で
きない。全員の努力は大きな課題である。

努力というのは、次の「諸個人の力」[DI p.132]である。

(マルクス、エンゲルスが理想とする共産主義という運動の)「従来のあらゆる運動と異なるところは、

それが従来のあらゆる生産関係と交通関係の基礎をくつがえし

あらゆる自然発生的前提をはじめて意識的に従来の人間たちの産物として取り扱い、それらの自然発生性を剥いで一体となった諸個人の力に屈せしめるところにある」

「ドイツイデオロギー」第一巻 I C [DI p.132]に、実現の力としての一体化ないし一体という言葉が3回出てくる。一体化によって没頭して皆が集中して取り組む一体化、一体となった諸個人の力が実現の原動力になることを表しているように読める。

これはマルクス、エンゲルスが理想としている共産主義という運動についての文からの引用を基にしているが、一般に理想について当てはまると考える。だが、マルクス、エンゲルスは実現の原動力としての「一体となった諸個人の力」に何の疑問も感じていない。彼らの検討も新しい社会をどう作るかについては不十分だった。それに、ここでは個人は一様に扱われている。

人類の客観的的原理が、対象化と一体化の統一、自由と愛の統一である。この客観的価値実現と私の主観的幸せの統一が求めるものである。

この統一が理想の生き方をするというのが私の主張である。全員の努力と普及が課題になる。

3) 画一的な善人だけのつまらない社会になる問題、努力しない人の問題

1. 画一的な善人だけのつまらない社会になる問題

「一体的努力を全ての人が行う」結果、できる社会は「善人」だけからなるつまらない社会かもしれない。実際には理屈どおりにとはならないから大丈夫と言ってはならないだろう。多様化の重視で一部は解決するが、単純な一方向一体化は、この多様性を排除してしまう。相手の排除という多様性否定(他を排除する帰属感)と多様な価値の軽視(所有していないものを大事に扱わない所有観)をもたらすからである。

一方向一体化がもたらしてきた欠点を排除するために、次の双方向一体化へ「発展」すればいいのか？多様化と統一すればいいのか？ここから二方向がある。

一つは、「彼らを非難してはいけぬ。非難自体、彼らを上から見ている。

彼らの生き方も別の生き方として尊重し、それで良いのかもしれない。しかしそれだけでよいのか？」と考える。

二つ目は、「あくまで努力する生き方が正しいので、そうしない人の立場に立って、何とか自発的に努力するようにさせるようにしなければならない、彼らを生むのは目指す価値が必ずしも完全に正しくないからではないか？だから目指す価値の正しさは常に見直さなければならない」と考える。どちらが正しいのか全く分からない。

後者の「目指す価値の正しさは常に見直さなければならない」気持ちを継続すればどちらも同じかもしれない。別の答えがあるのかもしれない。

これらが解決しないなら、今の常識が、対象化と一体化の統一に変わっただけになる。それでもそれは進歩だろうか。答えの見通しが無い。

2. 努力しない人の問題

提案している生き方は常識を変え常なる努力を必要とする。努力する人は全能力、全人格を発揮し、自分と他人、他オブジェクトを良くし続ける。そうしない人との差はどんどん広がる。

背景にあるのは階級対立などでなく、経験則で語られている少数が多数をリードして世界が回っているという普遍的な原理である。

わずかの支配層と非支配層 - 二割の努力する人とそれに従う人・周りに流される人という形式的な系列がある。この問題の扱い方はまだ不明のままである。2019.11.10

努力する人とそれに従う人・周りに流される人は、支配層と非支配層の中にも、それぞれ程度こそ違え存在する。困ったことにこの解決は課題である。今の所得の格差だけなら、不法に近い金融経済を規制し配分を外部から見直せば、取りあえず解決する。仮に階級対立が問題ならそれをなくすだけでよい。しかしこれは生き方によるもっと大きな差である。

かつ、このことは「悪い」と単純に言い切れない。全員の能力の全てを発揮しないかもしれないが、努力する人とそれに従う人の区分は、おそらく全体のエネルギーを少なく抑えることができるからである。

関連する事項を観る。1. 客観的な正しい事実と価値の判断が必要である。ある集団の各人の努力は、その集団のどういう価値の粒度（今後の時間の未来の、どういう属性）での未来像を提示し、そのための努力をすることである。この像は、時間、空間、属性により、集団の外とも集団内部でも、利害が異なる。この像に、客観的に正しいものが存在する。複雑で変化の速い今は、その正しい把握は困難である。2. 問題は「価値の大きなものが優先」という「原理・原則」をそのまま機械的に適用すると、より大きな正しい価値、「大義」のために「偽善・欺瞞」である手段を取ることもあり得る、実際に多い。これが良いのか？ということである。

ある判断が客観的な正しい事実と価値の判断か、偽善・欺瞞か見分けにくい。一般論だが今（昔もそうだったかもしれないが）政党、マスメディア、各国の諜報界は「国」の狭い利害にとらわれていて当てにならない。

本稿の生き方の検討は、偽善欺瞞の排除は前提にして述べている。偽善的欺瞞の生き方は、楽を求め努力しない生き方と重なる。共通に偽善・欺瞞の排除の検討にもなるかもしれない。

これを扱う原理がなく、6) 項の大きな課題でもある。

解かねばならないのは、

・「価値の大きなものの優先原理・原則」による「大義」のための」小悪手段、（[\[TS http://tanakanews.com/191126iraq.php\]](http://tanakanews.com/191126iraq.php)のような諜報界が正しいこともあるかもしれない）の考え方、対応策を出したうえで、

・宇宙にとって、全員の正しい生き方と知恵の結集を目指した方がいいのか、それとも全体としてある期間のエネルギーを最少にする判断、実行の方がいいのかについての、客観的な事実と価値の正しい判断をする問題である。この矛盾は難しい。 2019.12.07

第一部では、対象化と一体化の統一の実践の例として、労働と生活、思考と議論の二つしか挙げなかった。この二つを、次の各領域に合った形で伝えることが画期的革新のキーになる気がする。それをまだうまく言えてない。

- ・日常の態度、
- ・労働と生活、思考と議論、
- ・制度との関わり、
- ・レベルアップすべきマスメディアと政治、
- ・エホバの証人を含む「**（現世で）努力する人とならない人の問題**」、
- ・**わずかの支配層と多くの非支配層－ 二割の努力する人とそれに従う八割の人－ わずかの犯罪者と多くの法に従う人、**という形式的な系列がある。

周りに流される人とそうでない人という区分がこれに重なる。この問題の扱い方はまだ不明のままである。

この全ての人、小中学生から老人までの全ての人の心に届く、ただただ論理的で単純で正確な内容にしないといけないが、できていない。

これらが解決できないなら、第一部で述べた提案は、今の常識を、対象化と一体化の統一を目指し事実と価値の全体を求める運動に変えただけになる。それでもそれは進歩だろうか。答えの見通しが無い。

（これも本来、第一部に述べるべき内容かもしれない。または該当部分を含めて全て第二部で論ずるのがよいかも） 2019.11.09-14

人は経験と教育で常識を身につけている。半数は、目の前の意識的対処の必要な物事を判断し意識的に努力し方法を使える。

残りの半数は、1) 常識に過剰適応しているか、2) 自分の目の前の関心以外に興味がないか、3) 小さな善の偽善的欺瞞的生き方である狂信的宗教や「主義」の作られた固定観念により、この判断をせず、努力しない。

1) 常識への過剰適応、2) 自分の目の前以外への無関心による努力のなさは、重大で、初等中等教育の感性と論理の教育見直しを必要とする。第二部でも触れたが実現の見通しが無い。大人の対策も見通しが無い。

3) 「主義」の固定観念と狂信的宗教の小さな善の偽善的欺瞞的生き方の実態、弊害の共通の「原因」は、事実を見ないことと、特定の書かれたものの異常な重視で、両者はよく似ている。

さらに4) 今は意見を言うと、SNSで匿名の右派、リベラル、左派からの誹謗中傷を受ける。匿名の誹謗中傷は、フツウの小さな人のはけ口になっているらしい。フツウの子がやむを得ず生きていくためにいじめを起こしているのと同じ構造である。日本特有の空気を読めという意見も気になる。

これらは重なりもある。実態把握とそれぞれを改善していく必要がある。

対策の前提として、小中学校での教育の改革；

第一段階：義務教育で人の感性と論理の基本、今の日本史を止め歴史社会保障の仕組みを教え、親などがその理解を確認する必要がある。

第二段階：生理的に生を守る反応は基本的にできている前提で、各人が技術的制度的に生を守る内容、論理、は必須である。2019.09

さらに我田引水だが、第三段階：根源的網羅思考の内容把握によって生の属性向上を目指す。特に、全体の価値、事実を求める姿勢、状態が価値でなく過程が価値であるような価値観への転換などである。

第四段階：**対象化と一体化の統一の機能は、1. 労働、生活、2. 労働、生活の生き方と、制度の生成、運用、3. 1, 2の全てにおいて「努力する人とならない人」の問題に共通である。2019.11.09**

これが1)－4)の「社会心理」にも有効であるような気がする。2019.11.09

この全ての人、小中学生から老人までの全ての人の心に届く、ただただ論理的で正確な内容にしないといけない。しかしできていない。

実質、ほぼ半数の人が国民年金の掛け金を払わない（支払い率は年々向上し三分の二の人が支払っているが、払えなくて免除を申請している人も多い）。この人々と「努力できない、しない人」の重なりも重大で気になる。

今はここまでをクリアしている日本人が半数しかいない。やむを得ない理由で努力できない人はいるだろう。どうしたらいいか？

4) 多様化

[FIT2016]で一連の過程の各階層で、対象化と一体化の「一体型矛盾」が現実化されていることを示した。

これも結果的に、2. 複雑化、多様化のためだったと、後で、分かった。この検討の中で、多様化複雑化は直接、意識しない検討だった。

1. 何が多様性をもたらしたか

どこから多様性は生じたか？二つある。

前に論理的検討として**対象化が多様性をもたらす**ことを述べた。対象化は他のオブジェクトを複雑に多様にしていく。

個は産業革命を経て論理的に対象化、多様化が進み、個性が発展している。もう一つは、偶然の微細な差異による多様化である。

今の事実である現実には、論理によるのであれ、偶然の微細な差異によるのであれ、宇宙誕生以来の歴史の網羅的総括であり、細部にも意味があることにある。細部を活かして生きることができる。どのようにしたらそうできるかが分からない。2019.09.04,10.25

2. 多様性が何ををもたらしたかまた何ををもたらしたか、多様化の意味

多様性が何ををもたらしたか？もたらしているか？多様性は進化において人類を存続させた。その意味で多様性が種を存続させた。固体どうしの生き残りの闘いは環境変化に対応するために「強い」あるいは「賢い」個体を残す手段と考えられる。

生物進化において種が環境変化などに対応でき、生き残れたのは、1. 通常の両性生殖において親と異なった遺伝子の多様性が生まれ、変化する環境に長い時間をかけて対応できていける遺伝子が保存されていったこと、2. 突然変異によって生まれた遺伝子変化による生まれる多様性により、急な気候変動のような突発事件などに対応できたことによる。つまり、多様性が、種の存続に貢献した。

個人の多様化と他のオブジェクトの多様化が必要な双方向の一体化をもたらすか。

一方向一体化から双方向一体化への「発展」も多様性の展開と考えることもできる。この意味で多様性が双方向一体化を作る。両者の相互規定か？そうなら多様性と双方向一体化の両立矛盾になる。

さらに、うまく整理できない難しい問題がある。双方向の一体化は、相手が人の場合と、それ以外の生命、オブジェクトの場合がある。

後者、相手が人以外の生命、オブジェクトの場合は、多くの個が、ただ他の生命や他のオブジェクトと一体になり、それらの可能性を十分に伸ばし、

周りに害を与えないためにできる全てを行う。容易ではないが、それだけでいい。

相手が人の場合、相手の可能性を十分に伸ばすためにできる全てを行うことは、自分と相手と対等に多様な可能性を伸ばすことである。しかし、これは不可能に近く思える。一つの才能を見つけることさえできない。

また、多様性に気が付いていないだけで、多様性などという以前に、今は皆、全く違う人間なのではないか？個が確立したなら、その個は必ず多様である。つまり、個の確立と個の多様化は大きくは同義である。

今まで、確立した個は、十分な判断力を持ち、他と議論しなくても必要な判断はすべてできるということを前提に話を進めていた時もあったかもしれない。

歴史を検討していて、対象化と一体化の中の一体化のもとになる所有が六千年前、帰属が四千年前に始まり、多様化複雑化が後から出てくることが分かった。

ここでの論理の順番は逆である。弁解だがいずれも正しいのではない。

農業革命の時代に一体化が不十分だったのは、一体化の一方向性によるだけでなく、十分な対象化がなくそのために多くの多様な個が広がらなかったことにもよる。

そして、多様でなかったゆえに一体化が不十分に終わったようにも見える。一方向の一体化だけなら多様な個は要らない。一方向一体化は多様性を排除している。つまり、相手の排除という多様性否定（他を排除する帰属感）と多様な価値の軽視（所有していないものを、十分対象化できず大事に扱わない所有観）をもたらしている。

とすれば、何が双方向一体化を必要とさせるようになったかが重要である。

以上は、地球人の個に限定した自分と他人の話である。こういう論理と歴史を経ない宇宙人がいるであろう。

3. 多様性と単一性

多様性と単一性という一体型矛盾は、対象化と一体化の矛盾の一面の別表現か、対象化のもとでの矛盾である。どちらも対象化と一体化の矛盾の下位の矛盾である。

無秩序な多様化が進むとバラバラになるように見える。つまり、一見、多様性は単一性と相反する。この「物理的」矛盾をどう解くか？多様性と単一性の矛盾の例が多いことを別の場所で述べた。

31. 共有すべき同一価値があれば一体化に資する。共有すべき同一価値は、一見、多様性と相反する。

これについては、少なくとも人類という種の存続や個体の死より生が良いという価値などが共有、統一されてさえいれば、後は多様な個性が発揮されればよいと考え、分離して議論を進める。

単純に TRIZ の分離原理によって分離する。価値についてだけであるが、共有すべき同一価値と個の多様性を分離し共に重要な価値としたい。

32. 多様化が進むと単一的管理が必要になってくる。

多様性は、対象化から生まれ、かつ次のように、対象化と双方向一体化を統一した管理を必要とするようになる。管理が必要なのは、人の単なる多さ、個の多様性と生産物の多様性ゆえである。

地球は多様な環境を持つ星なので、この環境下で、対象化により多様な生産物が生まれたことを述べた。多様な生産物のための多様な労働が多様な個を産む基である。農耕においては、人の努力で耕作地を、したがって生産物を多くすることができ、それによって人口も増えていく。より多くの人口、より多様な生産物、より多様な個が、今のように複雑な制度、技術とその管理を必要にさせた。

対象化が進んでいき、生産が多様で複雑になると、分業の中の管理の問題が起こる。管理は、対象化による多様化がもたらす機能上の一体化である。多様なものと大量のものの管理が必要で可能になっていく。管理がうまくいくと全体の価値が増す。この管理は対象化と一体化を統一する必要がある。

33. 生産の多様性、個性の多様性がなくても、多くの感情と肉体を持つ人々をまとめていく管理という課題がある。

仮に、全く一樣な個体数が多くなるとどういった問題が発生するか？ 縄文時代三内丸山のような大きな集落でも人口は 300 人くらいだったらしい。この人数なら、全ての人はお互いに血縁共同体の仲間と認識できる。

血縁であろうがなかろうが、お互いの顔を知っていることは、ある種の一体化を作るのではないのか？ 血縁共同体から地縁共同体に移っていくと、全体を一体にまとめる何かが必要になる。それが法や宗教などの制度だった。

5) 対象の拡大のための一体化

一体化を双方向にする必要性が実感にならない。一体化を双方向にする利点、必要性があるとしたら、一体化の範囲を広げて全てのオブジェクトを対象化し続け、自分を対象化し続ける必要性である。

双方向一体化は、人間中心主義を克服し、他の生命も、地球のものもお互いを対等に扱うために必要である。

今後、全ての他生命、全地球、宇宙へ、価値を含んだオブジェクトを広げ続けなければならない。科学の進歩により知識を得たら、その知識の利用には責任が生じる。

これも大きな一体型矛盾を作る。より正しく広い科学的真理、求める価値を含むオブジェクトの認識の展開と、人の価値実現を含んだ全ての運動に対する責任との矛盾である。

これを、プラスの変化の連続になるようにしなければならない。

多くの人にとって、一体感は、今は残念なことに、とりあえず、地球に独特の、静的な帰属感、帰属意識（自分が何かに属している、包まれている意識）と、所有感、所有意識（何かが自分に属している意識）である。この所有感、所属意識に代わる新しい意識が必要である。

双方向一体化は、1. 相手が人の場合と、2. それ以外の生命の場合、3. それ以外のオブジェクトの場合がある。

6) 事実と価値の判断ができない

客観的な正しい事実と価値の判断ができない場合がある。例えば、「価値の大きなものが優先」という「原理・原則」をそのまま機械的に適用すると、より大きな正しい価値、「大義」のために「偽善・欺瞞」である手段を取ることがあり得る、実際にも多い。これを扱う大きな原理が、まだない。3) で触れた問題の一部である。

6. 人類の統一理論

1) 基礎：エネルギーの原理

人類の生存の基礎はエネルギーである[CGK2016]。生きることも、物理的にエネルギーを前提としている。エネルギーのありがたが今まで生き方と制度を規定していた。今まで人の生命を支えてきたのは太陽エネルギーである。人の食物は、植物はもちろん、それを食べて育った動物も、その全てのエネルギーは太陽エネルギーが姿を変えたものである。石炭、石油天然ガスも太陽エネルギーによって育った樹木の化石である。

人類には、おそらくエネルギー最少の原理がある。これは歴史と論理の一致が成り立つ長い時間粒度で成立する。人の個々の試行錯誤による行動はこれに反しエネルギーの無駄を生じてきた。今までは、事実と方法の知識のなさが人の努力を妨げてきた。これらは客観世界の対象の世界の原理である。

2) 統一理論

1. 事実、物理学と哲学

無か何かから、存在と関係（運動）が分離した。その後の世界の要素である存在と関係（運動）については、

11. 存在と関係、運動(エネルギー)が独立している場合がある。

12. 存在と運動が相互転換する場合がある。これに二つの形がある。

121. 存在と運動(エネルギーE)が転換する場合がある。

122. 機能的に、構造の要素の一つ、存在=ものか固定観念が、別の要素、関係（運動）と相互転換可能な場合がある。

13. 存在であり運動である場合がある。（第一部 2.2 節）

2. 矛盾モデル

当面、以上の内、121. 13.と推論の存在命題、属性命題を矛盾モデルから除外する（第一部 5.3 節 とりあえず存在命題、属性命題は形式論理に任せ、弁証法論理では関係命題だけを扱うことにした 2019.09.28.）。

何事も、始まりとその後の運動の歴史がある。矛盾モデルでの外部または内部の力を作る差異とエネルギーが始まりを含んだ運動を作る。**矛盾モデルを、どういう空間、時間粒度で作るかによって、この差異とエネルギーが、外部の力なのか内部の力なのかは変わる。これについて昔、無駄な「論争」が続いていた。[牧野弘義「弁証法的矛盾の論理構造」文理閣,1992.]**

客観世界の近似モデルは、客観世界自体にはなく、変化が起こった歴史的経過の認識モデルがあるだけである。客観世界は、エネルギーを別にするとその近似モデルは、「(ある粒度での) 差異が生じ運動が行われる。

外力の働かない自然において、個々の運動が、最少エネルギーで常にもどこでも行われるというのがエネルギー保存則である。(ダークマター、ダークエネルギーは扱わない)

我々の知る宇宙や太陽系や地球の生成の歴史は、差異により運動が起動されて起こった「結果」か、複数の物事の両立の「結果」の記述である。どういう粒度で見た「結果」か、は後から分かる。

後から分かった粒度が最初から分かっていたように記述は行われる。安定した状態になるとその時点の空間的關係についての構造の体系、小さな運動の領域の理論ができる。擬人的に機能と構造の矛盾ができる。機能を実現する構造がある。これは内容と形式の矛盾の一種である。

3. 準備

今後の課題として、客観的世界の論理と人の世界の論理の統合論理の探求がある。統一理論を作るのは簡単ではない。あらゆる空間・時間・属性粒度における統合的論理を必要とするからである。

要件には次の二つがある。

- ・ 歴史の発展を説明できること。
- ・ 現実を統合する理論であること。

例えば、神道、あるいはアニミズムの「万物に神が宿る」を説明できること。ある仏教宗派の「一枚の葉は宇宙である」を説明できること。もしこれらが成り立つとすればどのようにして形になるか？という工学的発想で考える。「一枚の葉は宇宙」は、少なくとも世界の統一性がありその中に個々のオブジェクトがあるという客観的認識である。「ウパニシャドの中の『葉っぱ1枚が枝から落ちる時、この宇宙は震える。宇宙が振動する。一枚の葉っぱは、全宇宙を震わせているのだ。』」[<https://seikou.me/769/>]は「一枚の葉は宇宙」という認識とは異なり、関係し合っている弁証法的世界観の一部を述べているだけの「美文」である。

「万物に神が宿る」が成り立つ条件は、「一枚の葉は宇宙」である客観的認識に加え、少なくとも、人のオブジェクトに対する態度と、認識、行動において、それぞれ、対象化、一体化の二つの努力が必要であること、完全な対象化、一体化の対象が「神」であるという入れ子の把握がある。この把握は、永遠に満足されることを求め続ける一体型矛盾成立の難しい認識である。難しい認識ではあるが、この認識だけが「正しい」認識である。もっと良い仮説では「神」が別のものに変わるかもしれない。

31. 全ての運動は、何かと何かの差異とエネルギーが起動する。その後のほとんどの歴史は、論理によって変化していく。如何なる哲学や如何なる個々の問題より、エネルギーに対する態度や仮説の方が、優位である。

長い人類の歴史も今までは最少エネルギー原理が働いていた。エネルギーを最少にするような制度を作り行動が行われてきた。経験則の仮説である [FIT2016]。

人類は、ほぼエネルギー最少で、種の存続と個の生を、進化で実現してきた。次の段階で、エネルギー最少で、個の属性の向上を文化・文明と生き方が実現する。これが、人の価値実現過程である。この事実と価値の変化の過程が人類の歴史である。エネルギー最少で、歴史と論理の一致が実現する。

今、科学の進歩により微細な差異は次第に認識でき制御できるようになっている。また、制御・操作の力、範囲は大きくなってきたので、人類の発展の歴史と論理を正しく知る必要も大きくなっている。エネルギー最少は、ヘーゲルの論理学のようにあたかも神の論理どおりに、物事が理想的に進んで行くと実現できるかもしれない。

この論理を、二項間の関係である矛盾モデルによる世界の単位近似と、抽象化と具体化の粒度管理、仮説設定による推論からなる根源的網羅思考からなる弁証法論理とするのが第一の近似仮説である。これにより次の事態が起こる。差異があると差異解消のため運動が論理的に起動される。

運動に、狭義の差異解消矛盾による運動と両立矛盾による運動がある。差異解消矛盾という普通の意味の運動が、質的变化を起こすことがある。これが次の事態である。

32. 大きな人類の歴史は、論理によって変化していく。また、外部または人が起こす偶然のように見える微細な差異が、その後の歴史に決定的な影響を与える。 Fractal 構造が、微細な差異を与えることによって全く違った形に成長するように。根源的網羅的に考えることに、現実のゼロベースでの再構築と現実をありのままゼロベースで認めこれからの変化の過程を重視するという考え方がある。この根拠は、**現実**は、**論理によるのであれ微細な差異によるのであれ、宇宙誕生以来の歴史の網羅的総括であり、細部にも意味がある**ことにある。20190904,1025

地球の物理的条件下で、個と種の維持ができる生命が生じ、知覚と反応という特性が効く。人のような知的生命には、さらに特性が効く。人に言語が誕生し精神、主観が生まれ、外界である宇宙、世界についての像を自分の中に持つことができるようになる。

他生命と異なり、道具の製作・利用をするようになり、外界に多様で大きな働きかけができるようになる。地球の物理的条件に依存した人の、宇宙を認識操作できる「範囲」が問題である。人は、宇宙を認識操作の可能性も得るかもしれない。

本稿では、文化・文明の歴史が、ここでの人類を特徴づけたとした。人の歴史が対象化を生み、さらに文化・文明において一体化を生んだ対象化が、人を画期的な存在にすると考えたからである。

偶然のように起きる微細な差異が、決定的な影響を実現する手段は、外部条件（例えば、間氷期と氷河期の繰り返しなど）を別にすれば、内部的には、一体型矛盾を実現する入れ子構造のような連続的変化を起こす構造にある。文化・文明には入れ子構造があった[FIT2016]。入れ子構造の文化・文明を起こした微細な差異、物々交換は、必要性と可能性の差異により人が偶然（的かつ必然的）に発見したものだった。

4. 検討とまとめ

人類の文化・文明登場後の近似モデルを振り返る。

41. 人類の統一理論を語り始めた少なくとも一人はマルクスである。マルクスは、1844年経済学・哲学草稿で、次のように述べた。「**宗教、家族、国家、法、道徳、科学、芸術、等々は生産の特殊な諸様式にすぎないのであって、生産の一般法則のもとに従う**」[EPM p.147]「宗教、家族、国家、法、道徳、科学、芸術、等々」とは、文化・文明である。ここで彼は、人類の文化の統一理論があること、それが「生産の一般法則」のもとに従うことを述べている。

マルクス、エンゲルスの「唯物史観」の扱う時間範囲は、本稿と一致する。つまり、主として文化・文明の発生以降の歴史を扱っている。しかし「唯物史観」は、文化・文明の発生以降に生じる人の支配－被支配関係などにしか着目しておらず、人類の統合理論としては不足が多い。

彼らが、人の支配－被支配関係に着目したのは、所有の把握を間違え、資本主義は、資本家が所有を独占する単純すぎるモデルの一般化のためである。もう資本家階級と労働者階級の支配－被支配関係はなくなっている。

マルクスは、資本論などで、1. 生産力と生産構造を機能と構造の矛盾としてとらえ剰余価値の構造を述べた。

2. 対象化行為である労働が人間の可能性を全面的に発達させ、そのことが新しい社会を作ること、対象化の可能性を明らかにした。

3. 経哲草稿で一体化の内容を明らかにした。

4. 惜しむべきことに1,2,3にもかかわらず、一体化の可能性をとらえきれず対象化と一体化の矛盾をとらえられなかった。

42. 論理学を作るとき、1. ゼロベースで単位から全体を合成する原理と、歴史から得られた 2. システムと運用の矛盾、の入れ子が原理の仮説として得られた。

システムと運動に分けるのは、文化・文明の誕生以降の**歴史と論理の一致**という人類の歴史の根本仮説だった。

歴史と論理の一致の根拠は、次の二つである。(2.4 節)

・宇宙、地球が生まれ、事実が変化、発展していく。人が生まれ、事実の変化の歴史から思考が生まれともに発展していく。

人工物については論理が事実を作り続ける歴史が続いていく。事実の**歴史的積み重ねの把握と歴史的変化の把握から、それぞれ帰納と演繹が生まれ論理ができていく**。事実変化と思考の発展の歴史から論理ができる。特に、歴史における事実の蓄積から帰納が、歴史における擬人的な「原因」と「結果」から演繹が生まれる。

・事実は、現実の目の前の存在、関係だけでなく、各人の観念世界の中の、事実の歴史、思考の歴史の記憶、論理を含んでいる。また逆に、各人の思考世界、論理は、その事実を含んでいる。

これが繰り返され、一つの客観的**歴史的**事実と人の観念、情報、特に**論理**は入れ子になり一体型矛盾を作るので、次第に似た内容になっていく。

論理と歴史が一致するような、空間時間、抽象化された属性があると言った方が良いのかもしれない。もしそうなら、論理と歴史が一致するような、空間時間、属性の粒度を見つけることは意味がある。

その例がエルゴード定理である。ある条件があると、時間平均と空間平均が一致するというエルゴード定理（個別エルゴード (G. D. Birkoff 1932) 平均エルゴード定理 (J. von Neumann 1932) ）が古くから知られている。これ自体、極めて抽象的な定理である。学生時代、この定理の証明が一ページに渡って書いてあったのを読んだきりである。

これらから、次のような推測ができる。エルゴード定理、歴史と論理の一致は、空間と時間の両方の属性に関する「法則」である。歴史（時間）と論理（空間と時間）の一致は、もっと一般化されたより客観的な時間、空間の定理に繋がるだろうか？

43. 今までの成果

自然科学、人文科学、社会科学では、構造に関する試みがある。

・マクロとミクロの物理学を統合する試み：相対性理論と量子論、粒であり同時に波であることの両立を模索する試みがあるらしい。

・数学の各領域、さらに数学と物理学を統合しようとする試みである Langlands Program がある。数学の**量の科学**である数論、**空間の科学**である幾何学、**運動の形式科学**である解析学の三つと**物理学**は、数学における**構造の科学**である代数で統一され得る。

・構造の立場から物理学各分野や人文科学各分野を統合しようとする試みは多い。直列、並列、階層、一方向または双方向の入れ子や Fractal 構造は、様々な分野の共通構造である。統一的構造があるのはよい。

44. TRIZの「9つの進化の法則」[TSK]は「歴史と論理」(お技術について導かれた。これを、制度に適用するように改良すること、Cavallucci [DC]やL. Ball [LB]を統合する理論の整理が課題である。自分でやる気力、時間がない。

45. 近代以降に限れば、田中宇(さかい)の国際政治批評も、近代国際政治が、自然史としての必然性を前提にしている。これも近代国際政治の統一理論である。[TS 田中宇の国際ニュース解説 会員版(田中宇プラス)]がある。左派、リベラルと異なり、一部は右派との類似点のある田中宇の説によると、資本主義の時代までは、支配層が、合理的に、世界を動かしてきた。[TS “資本主義の歴史を再考する”, <http://tanakanews.com/100504capitalism.php>] おそらく、これは、お金が唯一の価値である時代については正しい。

46. 今までの数千年の人類の歴史は、エネルギーの制約が強い、ため、エネルギー最少が人類の最大の課題だった。そのため「対象化と一体化・一体型矛盾、自由と愛の一体型矛盾」の定式化ができたともいえる。エネルギーの制約がなくなるかもしれない。それまでに「対象化と一体化・一体型矛盾、自由と愛の一体型矛盾」の解決の道筋を作っておきたい。[CGK2016] [FIT2017]

今までの人類の発明で大きなものの二つは、**原子爆弾と物々交換**である。

対象化の極致は原爆である。原爆の核分裂を高度に制御することによって発電ができるようになった。原爆なしに原子力発電はなかった。原子力によるエネルギー生成なしに人類に未来は無い。

一方、物々交換が対象化の反対概念である一体化の原型を作った。一体化の努力の持続が人類の未来を拓く。

中川徹先生の「自由と愛の矛盾は人類文化の主要矛盾である」という表現も人類の統一理論の要約的表現である。[NKGW2016] [NKGW2017]

中川徹先生の技術についての「TRIZのエッセンス」[NKGW2011]も一般化でき、そうすれば人生・人類の統合理論の要約になる。

47. アルフレッド・アドラーの「自己像、世界観、自己理想」からなるライフスタイルは、生き方に近い。ここでアドラーは、世界観を今の世界の現実像に限っている。

アドラーの言う自己の現実像と理想像があるように、客観の世界像に過去、現在の世界像、未来の理想世界像と続く流れがあり、その中に原理、法則を見つけれられる。

ユバレ・ノア・ハラルの「サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福」(河出書房新社2016, 原著2011) [YNH]とジャレド・ダイヤモンドは、一種の人類の統一理論の試みをしていると理解できる。

彼らは優れた学者で、書く中身は極めて有用である。

48. いわゆる「哲学」はどれも一種の「統合理論」だ。従来の「哲学」には聴くべき一面があるが解は書かれてない。しかも根本的欠陥がある。

1) 内容もさることながら、対象化、相対化が不足している。粒度の意識、つまり抽象化や具体化、自己を相対化対象化する意識のない人が多い。

ヘーゲルは、例外かもしれないがやや古くなった。対象化、相対化不足は、宗教の欠点と共通している。

2) 一般に全ての論述は、網羅された中から選ばれた粒度を明示しておらず、今までの思想や哲学、あるいは相手を批判する人も、相手の欠点をいくつか挙げ、自分の思想、哲学、あるいは自分の論はこういう長所があると言うだけで、その思想、哲学、自分の論の正しさの証明になっておらず、論理になっていないものが多い。

3) 「現代思想」や哲学には、世界観、価値観と、論理、方法、エネルギーに対する態度がなければならない。これらがない哲学、思想は、労働と生活の役には立たない。

本稿は、人類の過去、現在、未来像から導き出される客観的原理(法則)が、対象化と一体化の統一、自由と愛の統一であるかもしれないことを述べた。それが、客観的価値実現と私の主観的幸せの統一の内容である。矛盾モデルと根源的網羅思考は、これらの基礎であり他の思考、議論全般のための基礎で、それ自体統合理論を形成している。

客観世界は対象化の可能な世界で、擬人的に機能と構造だけで話ができた。人の世界では対象化だけでなくそれを超える「対象化と一体化」に広がる可能性が出てきた。多分、今後は、人が人類史の法則性から得た、対象化と一体化の統一を求める意識がどうなるかが今後を大きく変える。

長い目で見ると、おそらく多様化はより大きな粒度の対象化と一体化の統一を求め、その実現範囲でのエネルギー最少を求める努力かもしれない。

歴史と論理の一致は、エルゴード定理より広い、客観と主観の双方にまたがる法則である。節の最初に「人類の法則は、おそらくエネルギー最少が原理」と書いたが、結局、最少エネルギーの原理、法則があるのか不明になった。

7. 宇宙論理学

第一部の検討を一般化し歴史から導いた論理を、宇宙人の論理に広げる。宇宙論理学は、宇宙生成と運動の論理学ではなく、知的宇宙人の論理学である。正確には宇宙比較論理学かもしれない。宇宙生物学はあるが宇宙論理学はまだない。いつか必要になる宇宙の知的宇宙人の論理を検討しておく。

人と論理的相互コミュニケーションの可能な宇宙人に限定する。

宇宙人がどう知覚するか感じるかは難しい。感じ方を除いた考え方、論理は分かるかもしれない。その理解が宇宙の知的宇宙人に会った時人類の将来を決めるかもしれない。地球の「国」の対象化を容易にし「国」間の闘いなどは小さな問題と思わせてくれる効果もある。

次の仮定で検討する。

- ・事実とオブジェクトは存在と関係からなる [FIT2013 など]。宇宙人がいなくても宇宙、星はある。そこでも全ての事実は関係し合い運動している。

- ・形式論理は、宇宙に普遍的で共通とする。存在、関係を現実化するの**エネルギー**である。

- ・ 1. 地球の論理を成り立たせた具体的前提、2. 地球の具体的論理、→ 3. 宇宙人の論理の前提の網羅、4. あり得る宇宙人の論理の前提、5. 将来のあり得る宇宙人の論理の具体的例、という検討の系列がある。

1. 地球での具体的前提と2. 地球での具体的論理は、一部分かっている。これらを充実させながら、3. 宇宙人の論理の前提の網羅、4. 宇宙人の論理の前提、（5. 将来のあり得る宇宙人の論理の具体的例は今回まだ検討していない）を作ることが課題である。2. 地球での具体的論理については、矛盾も根源的網羅思考も、項の内容、知覚の内容に関わらず成立するものである。また、今まで、地球上の人類の農業革命後の歴史と論理の同一性を述べ、それに基づいて検討を行って来た。

- ・地球に多様性に富む自然に起因する独自の内容が、矛盾の発展に影響することが分かった。どのように独自であり、また宇宙に共通な論理は何かを明らかにしなければならない。これを、一般化し、論理と歴史が、他の知的宇宙生命ではどうなっているかを検討しなければならない。

1) 地球人の論理を成り立たせる外界と主体の前提

1. 地球の外界の前提 1 : 外界の属性と運動

地球、月、太陽の属性、運動、特に地球の重力、公転、自転の周期、温度、水や風の循環により、地球人や地球上の生命の属性、生産消費の時間、内容は、無意識に決められている。

2. 地球の外界の前提 2 : エネルギー

人間の歴史は、常にエネルギーが主導した。

エネルギーの現実的可能性が、人にその可能性を現実性に変える必要性の意識を生じさせ、必要性、可能性、現実性の矛盾ができた時が、今までの人間の歴史に大きく二度あった。農業革命と産業革命の時である。

人間のエネルギーとの関係を、エネルギー利用の粒度で見れば、四段階からなる。

- 1) 外部のエネルギーをエネルギー変換し利用、
- 2) 外部のエネルギーを蓄積した物質のエネルギーを変換し利用、
- 3) 特殊な物質、ウランなどをエネルギー変換し利用、
- 4) 普通の物質をエネルギー変換し利用する、という段階。

1)は普通の農業、太陽光発電、風力発電、2)は、化石燃料利用発電、3)4)が原子力発電に当たる。

地球の人類は、太陽エネルギーを蓄積した植物や動物が、人類誕生以前に既にあったため、太陽エネルギーのみの利用により農業栽培や人工的動物飼育が行え、食料を作る人類の第一の転換、農業革命を起こすことができた。

(最近、地球に、太陽エネルギーによらない生命がいることが知られるようになった。NASAなどで研究が進んでいる)

そして太陽エネルギーを蓄積した化石燃料が採掘できるわずかの期間に、人類の第二の転換、産業革命が起きた特殊な歴史を持つ。

今は、この矛盾に別の問題が生じている。太陽由来の化石燃料が枯渇しつつある。地球内部の地殻変動や小惑星衝突、太陽嵐などにより、太陽依存のエネルギーの広範囲長期の壊滅から脱する必要も分かってきた。

これらのため、あらゆる時間空間に普遍的で安全なエネルギーの必要が生じている。安全な普遍的エネルギーへの第三の意識的な転換をしなければならぬ。この課題と、エネルギーをどういう価値実現に使うのかを決めることの二つが課題になる。

3. 地球の主体の前提 1 : 生物的属性

人間の感覚器官の種類と数、知覚の範囲、行動器官の種類と数、行動の範囲、人間の大きさによって、オブジェクトの粒度(空間時間範囲、属性)が規定されている。**知覚、過去の記憶、コミュニケーションによる情報入手、蓄積されている情報の入手**と行動の間に「世界観－価値観－態度－感情－粒度－論理」がある。この内、感情は本稿では直接にはあまり扱わない。知覚、過去の記憶、コミュニケーションによる情報入手、蓄積されている情報の入手は、どれも、地球に独特な内容がある。

特に知覚、コミュニケーションの内容が地球の特別な状態を反映する。

この内、例として、コミュニケーションと知覚手段の関係を考えてみよう。遠隔コミュニケーションと近接コミュニケーションがある。

近接コミュニケーションは、送り手と受け手の間の媒介物がない。

・力学的または化学的作用による近接コミュニケーション；触覚、味覚、遠隔コミュニケーションに、送り手と受け手の間の媒介物に波として働く方法と粒として働く方法がある。

・媒体中を波（周波数）として進んで行く遠隔コミュニケーション；見る、聞く、

・媒体中を粒として進んで行く遠隔コミュニケーション；匂う。

4. 地球の主体の前提 2：文化・文明

地球の場合、多様な環境で別々な労働をする集団があり物々交換が成立し、その後個という意識ができた。今、集団が発展して高度な集団が重層的に存在している。

地球の、農耕という対象化の開始→人口増加→地球では生産物が増えれば増えた分は人口増加に使われたので、いつも生産物は不足傾向だった→物々交換の誕生→所有という一体化の原型の誕生、物々交換の成立が、帰属を必要とする大きな集団規模をもたらした→物々交換が生んだ等価原理による技術・科学による対象化の進展とその問題点の顕在化→（多くの人の認識にはなっていないが）一体化の必要性を活性化させ、対象化と一体化の統一の必要性を把握させて今に至っている。

2) 地球人の論理 [TS2010,12] [FIT2015] [THPJ2015/01,02,03]

地球に、形式論理学は普及している。根源的網羅思考と、粒度により決まった矛盾モデルを単位とする弁証法論理学ができています。弁証法論理学が新しい世界観も明らかにした。これらは、対象化が生まれ、農業革命後の機能と構造の矛盾から対象化と一体化の一体型矛盾を生んだ歴史を明らかにした。歴史と論理の一致も述べている。矛盾モデルと根源的網羅思考の論理学は、宇宙人にも適している。

3) 宇宙人の論理の前提の網羅

宇宙人の論理の前提を考える。これら前提が、粒度と論理の枠組みに作用する。論理も、この前提に逆作用する。以下は検討項目の羅列に留まる。

1. 外界の属性、エネルギーの前提

・星と運動の属性（大きさ、公転、自転周期、重力、環境の多様性変化性など）。

・星の利用可能エネルギー。人間の歴史は、常にエネルギーが主導したが、他の星では、エネルギーの変化がなくこれと異なるかもしれない。

2. 主体の生物的前提、文化・文明の前提

外界に規定された下記の内容。地球と比べ、まだ分けにくい。

- ・生命は個体集団か？
- ・宇宙人の生物的属性。
- ・生命の食料をどこから得ているか？
- ・生命の運動、事実の変更、運用に要するエネルギー量？
- ・同一性と差異性への対処はどうしているか？エネルギー意識の有無。
- ・生命と外界間の態度として、対象化と一体化の態度の有無？それぞれの内容？

- ・分業、物々交換の成立の成否。
- ・価値観、世界観による媒介の有無と内容。
- ・生命と外界間の技術、制度、科学、芸術による文化・文明の媒介の有無と内容。

- ・何をオブジェクトとしているか？
- ・オブジェクトの認識と変更単位=粒度と、オブジェクト、複数オブジェクト間の関係=論理の意識の有無。
- ・最小の事実近似モデルは「存在-関係-存在」か？
- ・生命の生き方の有無。「生命-関係-対象」という生きる近似モデルの「関係」が、生命の行動で、その内容は「誰が、何に対して、何のために、どのように、何をするか」か？

4) 地球人と他の星の生命の関係

地球人が、人の種の存続、個体の生を実現価値としている。他の種の存続、生は価値ではない。何らかのコミュニケーションができてもできなくても、食料不足の地球人がその宇宙人を殺して食べていいか？という問題がある。立場は逆かも知れない。彼らは地球人を、敵/食料/ペット/友人/自分を超えた存在のいずれと扱うだろうか？犬や猫、ミミズ、ハエなど周りの動物は皆、宇宙人である。木や花も、宇宙の生命体である。周りの動物で、地球人を、時に敵/食料/と見る動物はいる。ペット/友人/と見ている動物はいない、自分を超えた存在と見ている動物はいるような気がする。

5) まとめ：あり得る宇宙人の論理の区分

論理は、エネルギーを前提とし、世界観、価値観と相互作用してできる。これらは、星の多様性と変化性に依存してできた。

知的生命は生まれたが、物々交換が成立しなかった星はある。人口は増えないが生産量はどんどん増えていく星だと、ものが要る人は自由に持っていく。物々交換は生まれぬ。物々交換が、所有という一方向一体化と等価原理を生んだという仮説では、等価原理がないと、帰属意識も宗教も罪と罰も科学も生まれぬ。

レムの小説「ソラリス」の「海」のような人の深層心理を読む知的生命は想定しない。地球には哺乳動物の集団による狩りの中の高度の抽象力空間的判断力を持つ生命もいる。抽象力空間的判断力を発展させたが言語を持たない知的生命もとりあえず想定しない。

対象化を行う知的宇宙人はいる。ほとんどだろうと思う。対象化の前提のもとで、**論理と世界観と生き方の区分**があるかどうかは今検討しない。ない知的生命もいるかもしれない。一体化という概念のある宇宙人は少ないだろう。対象化がなく一体化だけある宇宙人は想定しない。**対象化、一体化と、星の多様性と変化性の関係**の検討も将来行われるようになるだろう。感じ方を含め和辻哲郎の「風土」の宇宙版が書かれよう。

以上から次のような区分をする。

1. **対象化を行う宇宙人**。対象化の意識レベルによる宇宙人分類がある。
2. **対象化に加えて一体化（という概念）のある宇宙人**。さらに 21. 所有意識のみある宇宙人、22. 帰属意識のみある宇宙人、23. 両方ある宇宙人、231. 完全な双方向一体化がある宇宙人。

対象化と一体化の矛盾は自分と他オブジェクトがあるという前提での基本矛盾であるため、自然の矛盾にはなく人以外の他生命の矛盾にもなく人類と宇宙人の一部だけにある。

こういう区分のない地球人型宇宙人がいる。これから宇宙人の分類が作られる。

あり得る星の論理の前提をいくつか書いてみた。さらに、対象化、一体化と、星の多様性と変化性とこれによる生命の属性によって詳しい論理の区分ができるだろう。

表 7.1 X/Y/Z 星人の世界観、論理の前提例 [IEICE2016 スライド改]

	今の地球	X 星	Y 星	Z 星
利用エネルギー	太陽エネルギーとそれを基にした化石エネルギー、初歩的原子力	自然エネルギー	マントル運動エネルギー	原子力
食料	太陽エネルギーを基にした他生命	他生命	人工食料	人工食料
集団/個	個+集団	集団	全体で一生命	個が独立
価値	種の存続、個の生、他との関係(自由)	自由	種の存続	種の存続、個の生、他との関係(自由、愛)
お金	有り	無し	無し	無し
文化・文明	科学、芸術、技術、制度	科学、技術	科学、技術	科学、芸術、技術、制度
対象化	有り	有り	有り	有り
一体化	所有、帰属という一方向一体化	帰属	－	双方向一体化

8. ポスト資本主義の準備

今度は第一部の検討を現実具体的に化する。第一部までは、今後数百年有効な内容だと思う。今2019年である。本章の内容は数年で古くなる。

応用として、理想の哲学と生き方から遠い今の小学校教育、人工知能の改革や、土木・建築を基幹産業にする提案など、ポスト資本主義までの荒っぽい提案を述べる。過渡期には「国」がなくなる。「国」の政治は今までどおりあり画期的に改善する。荒っぽいのは1. 価値と事実の本質とその対策、2. この本質的対策と両立する「当面うまく生きていけないといけない」対策の両立による、3. 余りにひどいものに限りなるべくゼロから考えたらこうなったというのが言い訳である。

政治や経済に全く疎い。それをいいことにしてポスト資本主義の準備、過渡期の提言を述べる。これからあと数十年か百年下手をすると千年はポスト資本主義への緩やかな過渡期である。1. 価値と事実の本質の実現方法、2. この本質と両立する「当面うまく生きていけないといけない」対策を含む。

一見、現実とかけ離れた初歩的内容が多く、反発する人が多いだろう。おそらく本書は、支配層にも非支配層にも嫌われる。根源的網羅思考を淡々と適用するようになったが、前提を少し変えると違う結論が出る。

8.1 ポスト資本主義の二ーズとシーズ

1) はじめに

多くの人がポスト資本主義の必要性を述べているが、その内容は確定していない。ポスト資本主義のための努力も行われていない。

資本主義は、250年前当時の左派の目的を、実質、実現してしまった。本来なら非支配層は、資本主義を超える価値の実現を目指すべきなのにしようとしな。支配層も現実や価値、未来への展望をとらえていない。資本主義が形式的に全員参加社会を作った。ポスト資本主義は全員で作らないといけない。

第一部に述べた、お金だけが価値でないポスト資本主義制度と、全体を目指す生き方、対象化と一体化を統一した生き方世界を作る。

人が新しい生き方を作ることと、ポスト資本主義という制度を作ることという入れ子の二つは同時に解決するしかない課題である。少なくとも、新しい生き方を作ろうとしない「旧守」人にポスト資本主義は作れない。

今の自分の対象との一体化の生き方を作ることと、自分の外に制度を作ことは同時にしかできない。

一体化そのものについてマルクス「経済学・哲学手稿」が教えてくれた（第一部）。同様に、この一体化の生き方と制度を作ることの関係も、「経済学・哲学手稿」の、以下の再帰的で難解な二つの文が教えてくれる。

「人間が彼の対象のうちに自己を失わないのはただ、この対象が彼にとって、人間的な対象あるいは対象的な人間となるときだけである。

このことが可能であるのはただ、対象が人間にとって社会的な対象となり、彼自身が自分にとって社会的な存在となり、同様に社会がこの対象において彼のための存在となる場合だけである」[EPM p.153]

この意味の説明を試みる。

1. 一文目に対象的、二文目に社会的という言葉が出てくる。

一文目は、自己と対象の関係を考察する。一文目の、自己が主語の命題、「人間が彼の対象のうちに自己を失わない」は、自己が働きかける対象の中に、自己があることを言う。続いてマルクスは、その条件が、対象が主語の命題、「この対象が彼にとって人間的な対象あるいは対象的な人間となる」ことを言う。条件は、対象がその人間自身のためになっていることである。

まとめる。対象化の中に自己があり同時に対象の中に自己がある。

命題と条件が、単に、主語の人間と対象を入れ替えた一体化表現になっている。ここでは、双方向の対象化を、一体化と単純化して理解する。意識のある対象どうしの場合、双方向の対象化が、双方に共有されているお互いを高めあうプラスの価値観によって行われると、一体化が実現する。片方だけ意識のある場合、意識のないほうの価値を増しそれが意識のある側に反作用することを想定できるなら、擬人的に一体化が実現する。アニミズムのような一体化した対象のとらえ方については、「経済学・哲学手稿」の他の文で述べている。なお、マルクス自身は、一体化の把握と実践をその後展開できなかった（第一部）。

マルクスは、一文目の条件である二文目で、自己と対象の関係を、社会との関係を加えて考察している。その条件は、人間、対象、社会の三つがお互いに一体になっていることである。一文目の自己と対象の一体化に、社会を加え三者相互の一体化、同時実現を述べ、全体の内容が充実する。（二つ目の「彼自身が自分にとって社会的な存在となり」に「対象」の語がない。なくてよい。）社会とは、自己と他の自己の関係の単純和ではない、多くの「自己と他の自己の関係」の総体で、自己と他の自己の関係群をまとめる共同観念を本質とする制度である。

マルクスは、一体型矛盾を知らなかった（入れ子の特徴とする一体型矛盾を定式化されたのは、百数十年後の2011年である [TS2011]。第一部）。

それに入れ子概念を理解していたかどうか分からない。だがこの二つの文章は、二段階で条件を語る形をとりながら、実は、最終的に(制度的)人間の本質を述べその内容の論理的網羅を完成させた画期的把握になっている。

一連の文章の一文目の「命題」で仮の**本質**が述べられ、後はその内容を一文目の後半の「条件」、二文目の「条件」と徐々に、**網羅的に展開していく過程**が文章になっている。**何かを把握するとは、本質をつかみその要素を論理的に網羅することである**。ここでマルクスは、意識せずそれを述べている。

ただし、ここで語られている内容は制度的人間だけで、科学、技術、芸術は述べられていない。科学、技術についても、本質と内容の網羅の態度はここに述べたものと同じと推測されるが、芸術については分からない。

2019.11.11-14

自分が、対象、社会の行為を代わって行うことはできないので、この実現のためには、人間は、対象、社会をそうに変革し続け、全体を意識した対象化と一体化を行い続けるしかない。（本来、詳細は第一部に述べるべき内容かもしれない） 2019.11

2. 社会についてのマルクスのとらえ方は、「経済学・哲学手稿」に示される。

「私的所有の積極的止揚は、人間的生活を我がものとする獲得として、いっさいの疎外の積極的止揚であり、したがって人間が宗教、家族、国家、等々から彼の人間的な、すなわち社会的なあり方へ帰ることである」 [EMP 第3草稿, p.147]

「労働の材料も主体としての人間も、運動の成果であるとともに出発点でもある。こうして運動全体の社会的性格が、その一般的性格なのであって、社会自身が人間を人間として生産するちょうどそのように、社会は人間によって生産されている」 [EMP 第3草稿, pp.147-148]

「活動と享樂は、その内容にとってと同様に、存在様式からいってもまた社会的であり、社会的活動と社会的享樂である。

自然の人間の本質は社会的人間にとってはじめて存在している。

なぜなら、ここにはじめて自然は人間にとって、人間との絆として、他の人間にとってのおのれの現存在およびおのれにとっての他の人間の現存在として、同様にまた人間的現実の生活のエレメントとして、現存しているからであり、

ここにはじめて自然は人間自身の人間的あり方の基礎として現存しているからである。

ここにはじめて人間にとって、彼の自然的あり方が彼の人間的あり方となっており、自然が彼にとって人間になっている。

こうして社会は、人間と自然の完璧な本質一体性であり、自然の眞の復活であり、貫徹されたる、自然のヒューマニズムである。」[EMP 第3 草稿, pp.148-149]

以上は、マルクスを援用した、「対象化と一体化の統一」という生き方を作ることと、「制度を作ること」は、同時に必要であることの説明だった。

対象化と一体化の統一の理解は簡単であるがどう実践するかには戸惑いがある。また、必要な自分や自国の対象化と一体化は、やや難しい。この二つが制度を作ること、同時に生き方を作るための努力に必要なのかもしれない。

資本主義は優れた経済制度だった。250 年前に比べてあるいは数十年前に比べて、生活も「自由、平等、友愛」も画期的に進展した。

格差拡大はなくななければならないが、格差の主「原因」は「資本家階級」と「労働者階級」の対立ではない。

マルクスのモデルと異なり、資本主義のもとで賃金は上がり、日本では、幼児教育無償化や、収入が少なくても誰でも大学まで行けるようにする画期的対策が自民党安倍政権で実施された。2019 年 5 月成立した大学などの高等教育の無償化制度は「住民税を払わない低所得世帯は無料、年収 380 万円未満程度の世帯まで段階的に授業料と生活費を援助」である。これで日本は格差がまだある段階で最低限、生活は確保されたと思う。(大学以前に、大学で学ぶ力を身に着けることが全員にできているかという初等中等教育の大問題はある)

掛け金を払っていれば、退職後死ぬまでを年金で過ごせる制度もできた。もちろん改善されるべきことは多い。資本主義と社会主義という差はなくなっている。「民主主義」国と「独裁」国の差も大きな差ではない。根源的網羅思考の普及でこの差はなくなる。

資本主義が形式的に全員参加社会を作った。しかし支配層も非支配層も、現実や価値、未来への展望をとらえきれていない。だからポスト資本主義は全員で作らないといけない。

2) ニーズ

今の資本主義下で対象化がもたらした課題は大きくなってきている。

机を「机」と思わせるのも常識、世界観ではある。課題は、**全ての人の**新しい生き方、**全ての人のための**ポスト資本主義を作るため、**全ての人が**常識、世界観を変え、変革を実行することである。

生き方の他に、生き方にも関係する三つの課題がある。個人や組織の復讐をなくし、自己と自国を相対化し、お金に代わる（または含む）新しい価値を作らねばならない。資本主義の矛盾とされる「生産(がもたらす一切)の機能と生産構造の矛盾」の解は、「お金を価値とする資本主義の生産の機能と生産構造の矛盾」の解ではなく、お金だけが価値でないポスト資本主義に進むことである。つまり前提である価値の弁証法的否定に進むのが解である。

この課題の解決には、対象化と一体化の統一だけでなく、対象化は自己、国などの自分の属する組織を含んだ対象化でなければならず、一体化は不十分な一方のものから双方向に変えていくことが共通に必要なだった。

ここではこれらのためのポスト資本主義への過渡期のラフな提言を述べる。

3) シーズ

今あるシーズと、できつつあるシーズがある。

今あるシーズの一つは、資本主義下での対象化の進展がもたらした可能性である。このシーズを生かし切ると、地球規模の被害をもたらす小惑星の衝突や太陽嵐等に対処できるかもしれない。

このために全世界で対処する「グローバル化」は必要である。一方、ものとエネルギーはなるべくローカルに作るのが良い。

できつつあるシーズのもう一つは新しいエネルギーである。農業革命は、太陽エネルギー利用の革命、産業革命は、太陽エネルギーが姿を変えた化石エネルギー利用の革命、ポスト資本主義は、新しいエネルギーを作り利用する革命でもある。安全な原子力エネルギーが普及するのに20年程度かかると推定する。最少エネルギー制約が壊れるかもしれない前に、お金に代わるまたは含む新しい価値、新しい生き方とポスト資本主義の姿を作らねばならない[CGK2016][FIT2017]。

できつつあるシーズの三つ目はAIである。エネルギーと異なり、まずいとともに「ビッグデータをディープラーニングで解析するのがAI」という狭い考え方と技術が急速に普及しつつある。新しい生き方とポスト資本主義の姿を作るには、エネルギーと違いもう間に合わない。しかし、今からでも正しい態度と実限を追求しなければならない。

ただ、誤解されそうだが、救護必要者、テロリスト、犯罪者の特定、銃器や灯油運搬など危険物の監視と対策にはディープラーニング利用の「AI」利用に賛成する。

4) 検討内容と準備

1. 求めるのは新しい価値の制度

ポスト資本主義は、物々交換から生まれた「所有」やお金が経済の唯一の原動力ではない制度である。

提案する新しい生き方は、対象化と一体化の統一、自由と愛の統一、批判と謙虚さの統一を根源的網羅的に努力し実現する生き方である。

悪しき所有に代わる新しい価値をどう作るのか？対象化と一体化が統一されれば原動力になり得るのか？特別な条件下で災害時、無償のボランティアが復興に役立っている。しかし「一体的努力」が「お金」に勝る原動力になり得るか？

よく分からないので、ここでは、それ以前に、あるいはこれと同時に解決されるべき課題を述べる。前提は本稿第一部の事実と価値の全体を求める思考と感性である。

2. できるだけシンプルな制度

根源的網羅思考はシンプルな思考を目指す。できる制度もシンプルにする。制度は、機能を増すために複雑化してきた。これは必要な複雑化である。しかし、問題解決のために複雑化することは避ける。なるべくシンプルに、ローカルに、小さな範囲、少ない単純な基準で、運用と問題解決が行われるのが良い。

2.1. 今、不必要に複雑に「問題解決」をしているものの修正

たまたま目に付いた小さな問題に限る。

・行政からマスメディアや野党への情報リークは、(価値の) 小さな情報でも、人の表面的な興味を引きやすいものを、マスメディアが大きく扱う今、害だけが目につく。リークさせる人、する人の責任もあいまいになり、マスメディアや野党が劣化していく恐れがあり、現に劣化が続いている。「内部告発」そのものについては、本来は、当の組織内部で民主的な運用が保障され、リーク情報、「たれ込み」が必要でない組織にすることの方が優先的に取り組むべき課題である。

・司法取引に反対する。司法取引では、当の問題とは全く違う価値の問題を、安直に「正義」に反する手段として持ち込み、不要な人間関係の不信をまねき、冤罪を生む恐れがある。「正義」を司る法の担当行政がこれを進めることは法への本質的不信も招く。2018年の日産問題が例である。

・全ての人に基本的人権がある。当面は、憲法を改正し天皇の形式的な政治条項を全て削除するのがよい。天皇皇后を含む皇族方の自由な言論を拡大する。将来は天皇制を文化的「天皇制」にし、全ての人の基本的人権を保障し立憲君主制を廃止する。文化的「天皇制」は、皇室とその歴史への敬意の制度、世界文化遺産を「現在」に拡張した今に生きる制度である。平成天皇が外国に日本兵の墓参に行かれた時には、その国の兵の墓にも参られ、終戦記念日には過去の反省を述べられた「民」に寄り添い歴史に向き合った誠実さと官僚とのやり取りの努力に敬意を払う。この個別の感想は文化的天皇制の制度と関係ない。

22. なるべくローカルに処理を完結する

飛行機、船、自動車などの乗り物、病院、学校などの公的施設は、エネルギーと情報が外部から遮断されても、最低限の機能は、電気なしでも維持されるようにする。

「国」はなくし同時にその「国」の内で経済が成り立つようにする。難民問題についても、その「国」で暮らしていけるように、必要なら他の国も支援するのが問題解決の第一である。今は、それなしに、受け入れてしまったからの対処と難民を受け入れるかどうかで、世界各国の問題が起きている。

日本の人不足を外国人労働者で解決することに反対する。平成30年末の入管法改正に反対する。「外国人」は基本的に「自国」で労働し「自国」を発展させるのが良い。

8.2 世界観、常識と支配層

1) 今まで

常識、世界観、価値観は、今まで、主に、支配層[TS] が作ってきた。支配層は、実体が明示されない曖昧で変化し続ける複合体である。

普通、「民主主義国」では、政権（と「民主主義国」の場合、野党もマスメディアとともに政権与党を補完し或いは邪魔をし支配層の一翼を担う役割を担う）、行政機関、経済界、（日本以外では軍、諜報界）、教育界、マスメディアからなる要素が作る。

一党独裁国の不自由、不平等の問題は、「民主主義国」の作られた「常識」「空気」、形の上で「民主的」に作られた決定、欧米露等の「民主主義国」諜報界の非合法行為や陰謀の三つの問題と役割は等価で、どちらも変更が必要である。「民主主義国」のいい点は、作られた「常識」「空気」、場合によっては妨害があるとはいえ、形の上で「自由」はあることである。独裁国のいい

点は「民主主義国」のように世論に左右されて政権が頻りに交代し、また野党やマスメディアの邪魔で、政策実現が進まないことのない点である。

周りの無限の事実から入力情報を選別し、それに対する態度を決める方法を作り、そのセットを固定観念として提示するのが支配層である。

日本では、初等中等教育界、マスメディアの主流（とそれに影響する行政機関）と、一部、経済界、政権が支配層の中心である。日本は、欧米露等の「民主主義国」と比べ、諜報界がないだけよい。

全ての人は自覚しないで作られた常識に動かされている。それに、今の支配層の常識では世界がうまくいかなって来た。

1. 田中宇考：^{さかい}相対化とマスメディアの「政府批判」

田中宇の説によると、今までは、^{さかい}支配層が合理的に（エネルギー最少で）世界を動かしてきた。[TS 「資本主義の歴史を再考する」

<http://tanakanews.com/100504capitalism.php>] 資本主義が始まってまだ250年しか経たない。対立と戦争の250年間の政治経済の歴史の「合理性」を田中宇^{さかい} [TS]が述べている。「歴史を繰り返させる人々」

<http://tanakanews.com/070327GOP.htm> 「ひどくなる世界観の二重構造」

<http://tanakanews.com/110518disconnect.php>

「軍産複合体を歴史から解析する」<http://tanakanews.com/180807intelli.php>

「世界から米軍を撤退するトランプ」<http://tanakanews.com/181228trump.htm>

田中宇^{さかい}の無料情報 [TS 中国が好む多極・多重型覇権

<http://tanakanews.com/191107multipol.htm>] は、最近の情勢のいいまとめになっている。高原はマスメディアと違い、これにほぼ賛成である。

詳しくは読んでいただくしかないが、次のように考える。

田中宇の国際政治についての仮説は、常識と異なる。始めて Wiki などの彼の紹介を読む人は異常な仮説と思うてしまう。

しかし、1) 国際政治について、**各国を、相対化、対象化**して論じることが必須で、民主主義国のマスメディアは先頭に立ってそうすべきなのにそうしない。これでは「独裁」国と大して変わらない。日本の国際関係についての報道内容は、日本やアメリカのマスメディアが「正しい」ことを前提にし過ぎていて多くは客観的に「正しく」ないことが明確になった。

田中の、国を対象化、相対化して思考する態度は、他にない特徴である。

2) 認識とは、仮説を立てる積極的行為によって様々な事象の両立、「事実の矛盾」を理解することである。彼の様々な事象が両立する仮説を作り検証し続ける適切な抽象化と仮説設定は、根源的網羅思考の典型である。

他の仮説も欲しいし、本稿の価値観は彼と異なる。しかし、過去と今の価値の基準では、膨大な資料を読んで作られ毎週送られてくる彼の仮説で、世のマスメディアより格段に事実を正しく把握できる。

国ごとに支配層の意見が違いかつその内部対立も大きくそのため様々な闘いが起きていることは、各支配層間とその内部対立を超える新しい本稿の思考、統合価値（を持つ新しい支配層）を作る必要のある根拠の一つである。

各国の諜報界、軍や主流マスメディアは「国」の支配層で、自国の正しさを相対化、分析できず、しない。日本のマスメディアは、第二次大戦中の「大本営発表」報道を反省したのではなかったのか？

学ぶべき二つの教訓があった。一つ目の、政府に追従し批判しなかった教訓は、形では入っているらしい。しかし今はNHKを含むマスメディアは小さな「正義」による有害な批判が多い。韓国の朴槿恵元大統領の友人の娘の大学入学等による弾劾、退任、投獄も、代わった韓国の文在寅政権、マスメディアと世論の小さな「正義」によっている。

もうひとつの教訓；「各国ごとに意見の違う問題は「国」を相対化しないとより正しい真実は得られない」教訓は入っていない。価値判断ができないもっと重大な欠点かもしれない。田中宇から学ぶべき最大の視点である。

2. 支配層と主流マスメディア

日本では、憲法で、総理大臣が行政を統括することになっているので、建前では政権の影響力が行政、官僚機構より大きいと思いがちである。日常的にマスメディア、産業界、学会などあらゆる領域との接点を持つ行政制度、官僚機構の力が大きい。

何がマスメディアに大きな影響を与えるかについても、田中宇(さかい)[TS]の意見が良い。今、日欧米は、「民主制」であるが、マスメディアの主流を含めた支配層が、実質、社会を動かしている。

今、世界の民主主義国の支配層は、全体として正しくないことの多いことが、2016年以降多くの人に分かった。地球と技術・科学の変化の激しさが支配層の能力を超えたためもある。

2017,18年は、日米の「民主主義国」について、政権がマスメディアの報道内容に影響を与える比重は小さいことが政治の素人にも明らかになった。何がどうマスメディアに影響を与えるかは明らかにされていない。一般論だ

が、実務を全て担っている行政官僚からの、マスメディアや議員への情報リークの果たす作用や彼らの産業界、労働界、教育界、学会などへの日常接点を通じた影響力が大きい。内部で民主主義的に処理できない状態では情報リークは悪ではない。しかし、最近のリークは、リーク側と追及側の偽善ばかりである。それをマスメディアは広めてしまう。

3. リベラル、左派、右派、特に日本のリベラル、左派

根源的綱羅思考は、内容的には事実と価値の全体を求め続ける思考である。政治においては、全歴史と全世界を把握したうえで今を語らねばならない。少なくとも100年単位の歴史と、関連する各国との関係の上で今の国内問題がある。その上で、100年単位で良くなっているという認識があり

(これは事実の把握である)その上で解決すべき問題；生き方と新しい制度を作ることに対処しなければならない。

昔のすぐれたリベラル、右派、左派の全てに全体感覚があった。

「保守派」に佐藤健志という人がいる。「分析術の秘密に迫る..」という2019年5月7日期限限定の宣伝、8月31日期限限定の宣伝(経営科学出版)が良かった。保守勢力内でのリベラル、河野洋平さん(故加藤紘一さんも)には本質的な真実と全体像を求める指向があった。河野洋平さんの「拉致問題」への態度が秀逸である。

安倍政権はそれを批判し、安倍総理、マスメディアと評論家は北朝鮮の問題中「拉致問題」を最大の問題と言い続ける。

日本のリベラル、左派に従来少しはあった「革新」がなくなった。

リベラル、左派の50年間を振り返る。

リベラルや左派が、表面だけ理想主義の偽善になったのは、大きくは、第一に、資本主義の現実が200年前の目的を、実質、実現してしまったことによると考える。無意識のうちに満足していて、自ら新しい生き方を作ろうとしない。少なくとも、新しい生き方を作ろうとしない人に新しい政治は作れない。

日本の右派は、教育無償化などリベラル政策も取り入れてここまで来た。

リベラルや左派が、表面だけ理想主義の偽善になった理由の第二は、ポスト資本主義像が見えず全体への指向がなく同時に価値、「正義」の大小の意識がないので、目の前の小さな「正義」を相手の人格、政策の全否定の理由に使う「何でも反対」になったことによると考える。

全体を求める根源的綱羅に正反対なのが、マスメディアを含むリベラル、左派になった。しかも作られた常識に規定されている自覚がない。誰かが意図してそう仕向けリベラル、左派は乗せられているだけなのかもしれない。

これが50年間続いた。内部の品性と能力の劣化が続き、今のように、自分に都合の良く「大衆」に受ける小さな善だけを言う客観的偽善になった。

例1：2016,17年の総選挙前、森友・加計問題に対するマスメディアと野党の批判の根拠の一つが「文書管理は民主主義の基礎」の小さな原理だった。「小さな」原理ではあるが原理なので、これから小さな正論をいくらでも述べるができる。当時、NHKを含めた全ての放送、8割の新聞が大衆受けをねらった「小さな」原理を述べ続け、現政権非難の論調の報道を続けた。(政権と必ずしも一致しない) 支配層、野党が森友、加計問題など小さな問題を起こし悪用しようとした。当然、どちらも評価を落とす。

2019年の「桜を見る会」の問題も、野党とリベラル新聞が政権非難に使っている。もっと国会で議論すべきことがある。

例2：リベラル、左派は、福島原発事故の反原発感情に迎合し、原発反対、反技術・反科学になった。欧米リベラルの難民問題対処も同じ表面的な偽善が多い。

米欧日の少なくとも戦後のマスメディア、日本のリベラルも左派を含む全政党も、アメリカ特有の軍、諜報界の影響の強いリベラルの風潮に無意識に染まっている[TS]。日本のマスメディア、左派、リベラル人にその自覚はない。トランプ大統領は好意的に描かれない。

ただこのアメリカでは「風潮」を巡る条件は今急速に変わりつつある。共和党はほぼトランプ一色になり、民主党「左派」は日本のリベラルや左派と大きく違ってきた[TS]。日欧のリベラルや左派だけ駄目になったのかもしれない。

それ以前に、今はその常識を変えることが重要であるにも関わらず、多くの人が支配層（教育、マスメディア）によって作られた常識の中の感情、行動のもつれが人生だと思っている。

例：<http://maganetoru.blog.fc2.com/blog-entry-1075.html>
(1078,1102も)

これが書かれた2017年当時も今も、日本のリベラルマスメディアのトランプ大統領、安倍総理を見る論調は変わらない。このブログのこれ以外の作品評論は冷静であるが、「常識の中の感情、行動のもつれが人生」だと思っっているように見える。

4. 支配層とポピュリズム

支配層 対 正確な世論という軸がある。今まで世論は必ずしも正しくなかった。世論は、殆どすべてマスメディアから得られる世界や国内の情報と作られた「常識」によっていて100%正しくはないからである。

ポピュリズムは「正しい」世論反映を前提にすると意味があり、「作られた正しくない」世論迎合になると排すべきである。欧米のリベラルは、各国の右派をポピュリズムと呼び非難しているが、今は全政党全マスメディアがポピュリズムに陥っている。

今は支配層より「まし」な場合もある。田中宇は、ポピュリストと、エリート支配層=エスタブリッシュメント対比を

<http://tanakanews.com/190705dollar.php> で行っている[TS]。

さらにポピュリスト、右派、リベラル、左派の外に、サイレントマジョリティーや「二割の努力する人と残りの従う人」などのより大きな問題がある。検討できていない。

2) ゼロから根源的網羅思考で常識を作り直す必要

1. 目的より手段、解より方法、結論より論理、状態より過程が、本質的に、より重要である。

2. 過去から未来に向けたより普遍的価値、原理、それによる新しい常識を作らないといけない。その原理は、本稿で求めてきた論理と世界観だという仮説を持つ。

その原理によると、田中宇の把握の位置も支配層の価値観の不十分さも分かる。これが新しい生き方を作りいじめや少子化、復讐、戦争をなくす。

3. **新しい価値、常識が求められるまでは(そしてその後も)事実と価値の全体と本質、全体のための根源的網羅思考が必須**である。日本で2019年、年金問題があった。

・「年金だけでは死ぬまでに夫婦で2000万円足りない」例では、夫婦の片方が正社員という一つの場合の事実を典型的に示している。

この例以外にどういった場合があるのかを網羅し、全体の事実をどう見てどうするか、より大きな価値を求める議論が必要である。(相手を論難できる例だけを取り上げて議論する人、政党ばかりであった)

・家族で足りるかか問題で、一家族の平均貯金額は2900万円(この額は生命保険などを含む)なので平均値では足りている。(議論されなかった)

・徐々に国民年金掛け金の支払い率は、年々増えてはいるが、今の実質の支払い率が4割の問題も大きい。(議論されなかった)

いじめる人、銃乱射事件を起こす人、普通の一人一人に、

1. より大きな全体、より大きな価値、より正しい真実を求め続ける全体志向、

2. 自分を対象化、相対化することを求めたい。

飛躍したことを言うようだが、日本の憲法を皆で議論した上で作ることが新しい常識に繋がる。「右派」「左派」の主張を統合した未来像になる。努力する過程が歴史を作り新しい未来を作るという考え方が入るとよい。しかし「左派」とリベラルは憲法改定に否定的である。

3) 負の原理：判断を間違わせ、相手を騙し騙される経験原理

根原的網羅思考に反し、誤判断を起こす、あるいは相手を騙す経験則は、

1. 事実の粒度の間違い：特に、例の一般化又は例を証明に使うこと、部分だけを取り出して、それが全体を言っていると一般化する。

2. 価値の粒度の間違い：特に、感情に入り込み易い小さな価値の問題を、大きな価値と思いつまむことあるいは思わせること、自集団の価値が普遍的と思わせることなど。

3. 論理、推論、行動のすり替え：特に、レッテル貼り、「国民国家」と「愛国心」の利用、昔からある宗教内部の対立、戦後作られた資本主義国家と社会主義国家の対立。

おそらく、1. 2. 3. は、我々の労働以外の日常の判断の大半を占めている。労働以外の場の判断は、間違いだらけである。これを常用する政治家やマスメディアには安々と騙される。繰り返し放送されると、いつのまにか同じ意見になっている。福島原発事故の映像をテレビで見ると安々と原発反対になってしまう。政治勢力がそれに乗る。マスメディアの流す情報が、法律上でなく、実質、何によって規定されているかが問題である。

マスメディアは、昔、ヒットラーが宣伝した手法を非難するが、自分の報道内容を規定するものへの意識がないか、ないふりをし、自分を相対化しない。

1. 2. 3. の三つの経験則は、残念ながら今の左派政党、リベラル政党、マスメディアに多く見られる。おそらく、彼らが、昔、価値としていたものが大方実現し、これに代わる大きな価値、未来像を持っていないため、小さな問題を大きくとらえがちなことがその背景にある。

それに、個々の小さな問題だけでなく、一人一人、全ての人の世界観、価値観、感じ方が、教育、マスメディアで作られている。感性、感情が大きく関わる。

1. 例を挙げて説明すると、それは何の論証にもならないにも関わらず、人は、その命題に容易に騙される。一部の政党が頻繁に悪用している。

(例外として、例を一つ上げれば証明になる特殊な問題等はある)

一般的に、例は、当てはまる例が必ずあると同時に、当てはまらない例も必ずある。例は、実証、証明にはならないにもかかわらず、具体的な事例は、分かり易く感情に訴える。抽象論は、分かりにくく感情に訴えない。

部分だけを取り出して、それが全体を言っていると一般化する。

これらは極めて多い。殆どだと言ってもいいくらいである。

2. は価値判断の問題である。それ自体は正しく「大衆受け」し易く容易に「感激」を生む問題を、全体の本質のように言う集団や人の偽善に人は容易に騙される。

あるいは、言う側が都合のいい点だけを数え上げる（そういう政党が多い）と容易に、聞く側は全部の点が網羅されていると思わされてしまう。

信じがたいことに、支配層、マスメディアがこれに力加担することが多い。「事件」は限りなく多い。その中から何を報道するかを選ぶのは、重要さ、緊急さを判断する価値判断であるはずである。次のような悪例があった。

- ・二度続いて小さな問題で現職の（小池知事の前）の東京都知事が退任させられた。全マスメディアが（この時は自民党公明党を含む全政党も）世論を煽り退任が実現してしまった。

- ・森友、加計問題は、「文書管理が民主主義の基礎」という小さな原理による小さな正義で、殆どの野党と殆どのマスメディア、支配層が世論を煽った例である。

自集団の価値が普遍的と思わせることも多い。

3. 論理、行動のすり替えは、多くの型があるが網羅できていない。

- ・相手の言に悪意を含んだレッテルを貼る。

- ・相手が正当な理由で発した言を、悪意でそう言ったと言い張る。これは政党などが堂々と使いマスメディアが同調する。

- ・やり過ぎて失敗し元と正反対の目的を達成する。昔から内部のスパイが挑発して全体を故意にやり過ぎ失敗させることはあった。今も多い[TS]。

- ・行動すり替えに単純な政治力学、政治心理学戦略がある。外部に敵対物を作り対立しながら自分の組織の発展のために帰属意識を高め内部を団結させるというものである。

今の「国」は資本主義が作った「国民国家」で、国を管理するために他国を排除する「愛国心」も作られた。日本の右派、リベラル（ごく一部を除く）左派の全てが「愛国」であり、かつこれが作られた固定観念であることを自覚していない。

昔からある宗教内部の対立、覇権争い、戦後、作られた資本主義国家と社会主義国家の対立、9.11 事件以降のアメリカと「イスラム」の作られた対立

などである。これは、明らかな「作られた」共同幻想であるが、1,2,3と同様、普及している。国の場合これを利用したいのは軍部、諜報部門、外務部門である。日本などを除く諜報部門の問題は、自らが自国で行う非公表の行為、外国で行う非公表の行為（これに「平和的」な知識人や世論への働きかけと、非平和的な政権転覆のクーデター支援の二つがある）、騙しやすい精神構造の原理主義宗教などのテロを支援し戦争を起こさせる行為[TS]の四つがある。彼らはマスメディア、産業界、教育界などに多くの影響力を持っている。政権の長のこれらに対する統括程度は様々である。

8.3 政治のインフラストラクチャー

全体と本質を求める指向を持ち、新しい価値と生き方、ポスト資本主義の検討が課題である。価値の系列；種の存続、個体の生、生の属性、がこの順に課題の重要性を決める。

1) 第一の重要課題、種の存続：災害から命、食料、エネルギーを守る

食料、エネルギー、環境、物理的インフラストラクチャーを確保し地球と人類を破壊から救うことが今の第一の重要課題である[CGK2016] [FIT2017]。個体の生を災害（や交通事故）から守ることは第二の課題以下に比べて特別な措置を必要とする。

1. 課題

五百年に一度ほどの確率（五百年後ではない。5年後かもしれない）で、壊滅的な、巨大隕石衝突、太陽嵐、巨大カルデラ噴火などが起こる。

それ自体、大量死をもたらす大災害であり、地球規模で長期にわたり再生エネルギー（場合によっては電気の全て）が停止する事態が想定される。

（第一部2.4節）これら災害を起こす現象は、やっと問題の実体その発生確率が分かり始めた。人類、国単位の消滅などをもたらすかもしれない事態が、小さくない確率で起こり得る。

全世界の最大の課題は、この壊滅的災害に対し人と設備を守ることと発生時のエネルギー確保である。

これが、あと数百年で化石エネルギーが枯渇することも分かった時期、自然エネルギーの利用停止をもたらすので再生エネルギーにも頼れないこと、パリ協定の順守の必要性が分かった時期と重なる。多様性も望ましいので、二次的に風力発電もよい、太陽光発電も家の屋根設置は良いが主たるエネルギー源にはできない。

最大課題である根拠を、第一部2.4節で述べた重要度緊急度で評価する。500年で30億人の自然災害による死（これは病死による予想死者総数を大幅に下回る控えめな数字である）を想定すると、全地球の今後1年間の喪失が予想される重要度緊急度は、a) とb) の積（a)一人の生については1、b) は1～）は、600万～である。

原発事故のこの重要度緊急度はほぼ0であり、ますます0に近づけて行ける。

日本に限った話だが、東北の三陸沿岸、東京、京阪神、東南海沿岸など、今後の三十年間に80%の確率で数十万の死者、国土の壊滅的被害が予測されている。今までこの地域は、ほぼ数十年百年毎に大地震を繰り返してきた。

それに対する政治の無策は信じがたい。

遠い将来の太陽消滅への対処も必要である。

一方WHOによると、世界で、2016年時点で年に140万人、毎日3800人が交通事故で死んでいて500年で7億人ペース、かつ年数万人ずつ死者数は増えている。重要度緊急度は140万～。大きな数である。交通事故死は世界の死因の10位である。健康な人が毎日数千人死んでいく事は災害大量死に次ぐ解決必要事態である。

ベトナム戦争では百数十万人、イラク戦争で（控えめな数字とされるが）数十万が殺された。テロによる死者もある。これは依然大きな問題である。しかし、それより多い交通事故死は報じられない。病死の死者、自死も多いがこれらの重要度緊急度は単純でなく検討課題である。

2. 対策1：命とエネルギー

21. 検討課題

これに関連して次の探求、開発の国際協力が必要である。

・宇宙と生命の発生と構造、・古生代や新生代など、特に氷河期と間氷期の今後の交代の有無を含む運動原理（これが緊急に必要な）の解明、・大規模災害が起きるメカニズム、その軽減と解決の土木・建築方法、・新しい安全な原子力発電の原理と発電方式。

22. エネルギーと食料対策

地球環境を守るためのパリ協定の順守、実施は必須であろう。完全な実現は難しく徹底的な対策が必要になる。以下は先の目標とすぐ行ふべき課題が混在している。

・情報と違い、ものとエネルギーはローカルに生産、消費できるのが良い。情報や設計についての「グローバル化」はあっても良いが、原料は今の「国」の範囲の地産地消の方向で需要供給を目指す。

人工食料の製造方法検討も必要である。日常的に普及をはじめておき、いざという時には量産体制に入れるようにしておく必要がある。

家庭などのガスは、ネットワーク配送でなく LPG ボンベ利用に代えていくのが良い。

・エネルギーについての根本的解決策は、分散され、(電磁遮蔽された)安全な原子力(おそらく核融合)発電のできるだけローカルな実現だろう。人工心肺、人工透析などのため、一部は、発電でなく機械エネルギー発生、利用を行うことも考える。

・安全な小型核融合発電炉完成までは、当面比較的に安全な原発とされる今の原発の五分の一程度の出力の**小型モジュール炉(SMR)**

<http://www.westinghousenuclear.com/new-plants/small-modular-reactor> もよいし、ウェスチングハウスの「AP1000」

<http://www.westinghousenuclear.com/new-plants/ap1000-pwr> もよい。既存原発の安全性、操作性の改良、核燃料リサイクルの検討を続ける。

政府、行政の原発の意義の明確な説明が必要である。今は不思議なことに十分に行われてない。

・船、自動車、家には、将来、超小型核融合炉を内蔵する。理想的には装置毎に原子力エネルギー発生を行う。

・マントル運動利用発電ができれば、地球内では対応できる[CGK2016]。実現にはおそらく時間がかかる。(なおマントル運動が将来停止すると、地球の磁気が消え宇宙線からの防御ができなくなる)

・将来の太陽消滅への対処のためにも原子力発電は必須である。但し将来人類が対象化と一体化、自由と愛の統一ができないなら存続に値する種にならないかもしれない。

・発電の中で、原発の占める比重が大きくなると、消費の変動を調整する手段が問題になる。余ったエネルギーを、大気と海洋の汚染除去、二酸化炭素除去(二酸化炭素を固形化して地下に埋めるというバカな実験が始まっている。やめてほしい)、ゴミからの資源再生などに使い負荷調整を行う。

23. 「反核、反原発」他

人に対する核兵器は廃絶するのがよい。しかし 2019 年 8 月 9 日の長崎市長の記念日声明のように核兵器は「残虐に」人を殺すから反対という理由は良くない。死因が何であろうが、当人と残された人には関係ない。死者を評価するのは数である。一度の作戦の死者数には、東京やドレスデンの空襲の各十万、ドイツ軍による三か月のレニングラード攻囲作戦の百万近い餓死者数もある。年に 140 万人がなくなり続けている交通事故もある。

反原発論者は、核兵器反対を原発反対に悪用する[YSMT2] [YSMT2]。技術の発展順序は、必ず、原子爆弾→ 原発の順序である。

戦争を廃絶するのがよい。

1. 人類のために、あらゆる時間空間のあらゆる状況でも稼働できる原子力エネルギーは必須である。

2. 様々な検討で、地球に落ちてくる小惑星の軌道変更や爆破に、核爆弾使用は第二案として検討されている。

小惑星を核爆弾で破壊する「アルマゲドン」という映画などもあった。

3. 他にも、原子力エンジンなど核エネルギー発生手段の小型化や軽量化、多様な「爆発」と発電の間の実現方法検討、原子力の利用方法、安全性、信頼性の向上は、地球として必要であり国際管理を行う必要がある。

核エネルギーが災害を防ぐ手段となる場合もあり得る。例だが、原子力エネルギーを津波防止に利用する場合、津波発生後数分～数時間以内に、その都度指定した線上でのある角度内の「爆発」が必要になる。

原発の安全性にも完全ではないので永久に努力を続ける必要がある。核ごみ処理方法は科学、技術の努力によって必ず見つかる。

左翼やリベラルの、原発に対する反科学、反技術主義に反対する。これは現代の「機械打ちこわし」運動である。

今の「反原発」の論理は論理になっていず、感情に訴えるものだけである。

私の通っている二つの病院のうちの一つの院長が2019 年年頭の文章に「**原発事故が起きると出される放射能は制御できない。だから原発に反対**」という趣旨を書いた。これは「刃物が手足を切断してしまうと手足は元どおりにならない。だから刃物に反対」と大して変わらない非論理であり、反技術主義、反科学主義によっている。

1. 原発は他の技術と同様にますます完全に制御できるようになること、

2. 太陽消滅を含めたこれから地球に起こる事態に対処できるエネルギーであり、宇宙や海底を含むあらゆる空間時間で可能なエネルギーであること、

3. パリ協定順守、のそれぞれだけで反原発への完全な反論である。

世の反原発論が論理になっていない中で、見田宗助さんは優れた反原発論を述べた。

http://digital.asahi.com/articles/DA3S11760782.html?_requesturl=articles%2FDA3S11760782.html] (ただしこの論は反原発が主題ではない) 本稿の特に第一部は、この論理的魅力的で聴くべき未来への展望への対案にもなっている。

24. 火力発電、再生エネルギーなど

・自律したローカルなエネルギーの前提で、世界エネルギーネットワークは、バックアップとして望ましい。ローカルであることとネットワークも構成することの切り替え、両立は難しいのかもしれない。

・化石燃料火力発電はCO²を出さない新型を含めて行わない。

原発が止まったために再稼働した旧型火力発電は直ちに停止する。(これだけでも原発の必要性の理由になる)化石燃料利用の火力発電は耐用年数(マイナス数年)の来たものから順次廃止する。

これは「直ちに中止」と「捨てるのはもったいないので、あるものはできるだけ有効活用」という矛盾の解である。化石燃料採取も止めるのが良い。パリ協定順守のために必須である。化石燃料採掘の他への影響も気になる。

・同様に、新設に一基五千億と言われる既存原発についても耐用年数の来るまで(または使える限り)使う。原発廃棄と利用では、数十年で国際収支は100兆から200兆円利用のほうが有利になり、何より地球の破壊を防ぐ。

・太陽光発電は、屋上、外壁に限り行う。更地への設置と水上への設置をやめる。更地、水上に設置すると、緑地、池、海が死んでしまう。

今も四国に相当する緑地が毎年減り続けている。土手の上などを含む更地と水面での太陽光発電禁止は急務である。今、耕作できない土地は土壤改良を行う。

・ダム湖が連なっている場所に揚水発電所新增設、既設ダムと河川の浚渫を行う。

25. ポスト資本主義と新エネルギー実現の必要時期

エネルギー制約、工数、コスト第一主義から脱する課題と、新しい価値を作るポスト資本主義の課題は同じである。[CGK2016] [FIT2017]

ポスト資本主義が実現できるなら行いつつ資本主義が全世界に広まるのに20年程度、安全な原子力エネルギーが普及するのに20年程度かかると推定する。それまでに新しい生き方とポスト資本主義の姿を作らねばならない。エネルギーの課題を解決する時期と、生き方とポスト資本主義を作る時期がなぜ重なるのかは謎である。

3. 対策2：リサイクル

・廃棄物がゼロにならない場合、生産物の「量」は増大せず、人の「価値」は増大し続けるようにする。廃棄物をゼロにできれば、生産物の「量」は増大可能である。

・海底、宇宙だけでなく地表でも、排泄物、金属を含めた廃棄物の完全分別と完全リサイクルをなるべく家や船単位で行う。そうできないものは市町村単位で行う。

・新たな金属の採掘を最小限にし、将来は採掘を中止、リサイクル利用のみとする。中長期の将来、どの金属も新規採掘ができなくなる時が来る。その時に備えないといけないのは明らかである。金属以外の地球からの資源採取と、廃棄物を次第に少なくしていきゼロに近づける。例えば、包装用プラスチック利用は直ちに中止し、装置材料としてのプラスチック利用も再利用に限定し新規利用は10年くらいをめどに中止する。

今、ペットボトルの分離回収と買い物袋の持参だけは、徐々に広まっているが、製品の容器、包装のプラスチック化は急速に進んでいる。例えば、私がもらう半錠の薬包装は、2017年には紙だったが今プラスチック製に代わっている。

4. 対策3：バックアップ、修理、改造、これらの情報共有

新設計だけでなくバックアップ、修理、改造の重要性が増している。

過渡期的手段である非常用電源の設置場所の問題点は阪神大震災で分かっていた。しかしこの問題はその後にも発生し続け、大問題を起こし続けた。

2018年西日本豪雨で消防署の非常用電源が水没により機能しなかった。いじめによる死亡、水による災害など危機管理の不十分さも多い。

危機管理の経験や深化、渋谷駅周辺の大改造方法などの一般化共有化が望まれる。今は、誰がそれを行うのかさえ明らかでない。

5. 対策4：物理的インフラストラクチャー、水、電気、道路

・今ある水のネットワークは、できるだけローカルに実現されるのが良い。できればビル、家単位で上水、下水処理ができるのがよい。

・やむを得ない水道、電気のネットワークについては、浅い地下に、安全性を確保し世界標準化した配管網を作り、水、電気、光ファイバー網（ガスのネットワークは作らない）などを格納する。

・橋、鉄道、道路、トンネルなどは、自律的に修理しつつ部分ごとに増改造可能な構造を内蔵し、当面、千年程度にわたって価値を増し続ける構造を実現する。

安全な、交通手段と、橋、鉄道、道路、トンネルなどの検討を一体で進める。

6. 対策5：物理的インフラストラクチャー、土木建築の基幹産業化

・数十年から千年おきに大地震、大津波が起きることが予測されている地域の住居、橋、道路などは、耐震化、建物の高層化を行う。できれば自律的に、部分ごとに増改造可能な構造を内蔵するものに変えていく。

高知県など、30年間に高い確率で数分の内に高さ10メートルを超える津波が予想されている地域は、当然、国、自治体挙げて耐震化、建物の高層化を進めていると思っていたら、そうではないようである。

・木造の一戸建て住宅についても高層住宅についても修理しながら増改築し続け、今の数十年程度の耐用年数を千年程度に代え、部分ごとに増改造可能な構造を内蔵し、長期にわたって「価値」を増し続けることの可能な構造にする。

高層住宅などの一部を「国」または公共「所有」とし多目的に活用する。

統合型リゾートIRの実施は止め、技術進歩に合わせ徐々に容積率の増大を図り、地下、土地、建物、上空を一体化した価値増大を図る。

なぜ、要らないだけでなく有害なことをやり、必要なことをしないのか。ともに地価高騰という副作用はある。しかし土地に価格が付く制度がある限りは、今のように下がり続けるのは良くない。

外国による日本の土地所有が進んでいる。必要な所に限るが土地を「国」や自治体を買うことも進めるとよい。

・やや小さい問題に中長期的な海面上昇対策がある。数十年後に数メートル海面が上昇するなら、その時の対策を見据えた都市づくり、例えば、都市全体の高地への移転や、巨大船集合による都市化も、今から検討しなければならない。

・関東大震災、阪神淡路大震災、東日本大震災（同程度の津波は明治にもあった）、最近の北海道や熊本地震、今後30年までに予想されている首都直下型地震、東南海地震などわずか100年ほどの間に起こり、今すぐにでも起こりうる災害がある。

不必要だけでなく害のある統合型リゾートIR実現を止め大地震等の対策として建築の高層化耐震化、インフラの耐震化、国土の強靱化に割くべきだった。与党の失政である。

政治、行政、マスメディアの注意の少なさは信じがたい。膨大な費用がかかるが、それを怠ると回復にその何倍の費用が掛かり、国土が廃墟になってしまい回復不可能な被害が出る恐れがある。行くとけた違いのメリットが出る。

そのため財界、国、地方の政治、行政、マスメディアは**土木、建築を基幹産業にすることを推進するべきだった。**

2020 年オリンピック 2025 年大阪万博を推進する財界、国、地方の政治、行政、マスメディア、支配層の間違い、無能さの例、根拠の一つでもある。(国交省の業務について各党が未来像と問題解決像を出すのが良い)「技術進歩に合わせた容積率の増大、地下、土地、建物、上空を一体化した価値増大」と防災の実現と合わせ、IR 実現を止めてとりあえず高知県、東京都等各地に適用する。

知らず知らず日本を主にした話になっている。全世界に対する対策が必要である。

・今後、AI の支援の下で自律発展し続ける構造を作るように姿を変えた土木・建築が基幹産業になり、価値は増え続けるようにする。このためには緊縮財政をやめる必要がある。

これらの要件は、将来数万人を乗せた宇宙船が別の惑星に着くまで世代交代しながら数千年数万年数十万年飛行し続ける時代に繋がっていく。将来の数百億人千億人を乗せた宇宙船地球号も比喻でなく同じ要件を持つ。

2) 第二の重要課題、個の生：全世界の政治経済課題

マスメディア、支配層を構成する政治家、軍部、諜報界の一人一人に、1. より大きな全体、より大きな価値、より正しい真実を求め続ける全体志向、2. 自分を対象化、相対化することを求めたい。

1. 今、資本主義を超える努力はどこにもない。まず当面の第二の重要課題は[TS]に言う米欧資本主義内の覇権主義と多極主義の争いを終えることである。覇権主義と多極主義の争いは、資本主義内部の経済政治の闘いである。そもそもマスメディアなどの対象になっていない。

この争いはポスト資本主義の実現を妨げる最大の問題である。この解決の可能性が芽生えてきているのが今である。

しかし各国の(外務部門、)軍事部門、諜報界など、紛争の恐れがある状態の継続が覇権を維持でき、自分の存在意義になっている人たちは又は全体を展望できない人々の妨害が、米欧の覇権主義を支えている。

2019 年は、プーチン大統領、習近平主席、覇権放棄のトランプ大統領 [<http://tanakanews.com/190527spygate.htm>]、米露中に対する外交が優れている安倍晋三総理大臣、という四人が奇蹟的に揃っている。この四人の在任中に、中近東(第一部 5.1 節 事実の矛盾の例)と北朝鮮における国際政治の、「戦後」以来七十数年、あるいは資本主義成立以来 250 年間続いた政治上世界最大の課題が終わる可能性がある。これで資本主義が内部の覇権主義に勝つ。

安倍政権の経済政策は、社会保障見直し、教育無償化などを除き、特にIR推進など賛成しにくい点があるが、国内問題よりこの世界の課題の方が重要である。

2. マスメディア、支配層の間違っている例を、土木・建築の例で前に述べた。各国等の価値、利害は対立しているのに、それを超える一段上の価値を目指すべきは自明である。外に目をそらせ自組織をまとめる手法の安直さは、今、明らかになっている。

しかしマスメディア、支配層は相変わらずこれを悪用する。これがマスメディア、支配層の間違いの大きな二例目である。

例は、証明にはならないが、2019年時点で日米露の政権が、マスメディア、世論に打ち勝つのはたいへんである。

21. 「国」をなくすことにより、国間の秘密の必要はなくなり戦争（の可能性）も諜報界もなくなる。

一般的に、国ごとに利害が違ふことによって問題が起る。国間の異なった価値観の矛盾の解を出すのは困難なので、その解決の鍵は「国」をなくすこと、それにより諜報界もなくなることは自明である。

しかしマスメディアと全政党の国家主義、第一部4.4節で述べた「自国のために、外部に敵対物を作り団結させる」共同幻想が、邪魔になっている。この共同幻想はお金の問題点を上回る大きさで進歩の足かせになっている。今の「国」は資本主義が作った「国民国家」で「愛国心」も作られた。

22. 「国」をなくすとは、今の国を県と同等の制度位置にし、単に「国境」、偏狭な「他国排除の愛国心」をなくすことである。

例えば日本の(一部)野党やロシアの世論は政権と違い「北方領土」解決の邪魔をしている。「国」の対象化、相対化が必要である。

同時に、ものとエネルギーはできるかぎりローカルに完結するのが良い。今の「国」の範囲内では外部の助けを借りず安全な生活を確保しなければならない。外国に出稼ぎにせずとも「国内」で生活できなければならない。なるべくローカルに物事を処理するという原理から、各「国」は自「国」内で災害処置ができるのが良い。従来の「国」間の人の永住的移動は従来通りの制約を課す。

経済も法も「国」内で完結させる。「国」籍を問わず「AI」利用による救護必要者、テロリスト、犯罪者の特定、銃器や灯油運搬など危険物の監視と対策を行う。

23. 「国」をなくした場合、貨幣発行、徴税を誰が行うか、要するにお金が生きている間の過渡期のお金の管理を誰がどう行うかが問題である。

当面従来どおり「国」が貨幣発行、徴税を行い、貨幣は金、SDR、リブラと連動し客観化し、アメリカのような実体経済の数倍の裏経済をなくす。実体と連携しない暗号通貨、仮想通貨は廃止する。さらに貿易自由化、国連による「国」間問題解決（領土など）（その論理は根源的網羅思考）に武力で抵抗する「国」には国連を中心に「国」間の利害が対立しない条件を作る。

「国」間等の紛争がなくなるまでの数十年は、自衛隊のPKO等による国際協力の強化は必要である。長期の永続する課題として、日本の場合いず(づ)も型護衛艦か補給艦を一地方に一隻程度配備し防災に資するのが良い。

3) 第三の重要課題、個の属性(自由と愛): 世界、国内の政治経済課題

第三の課題は、これ以外の国間の矛盾の解決(と、対象化と一体化、自由と愛の統一)である。

1. 基準、まとめ

11. 価値の基準

お金は、人の生だけが価値である場合には、よい基準だった。当面、下の三つが要件である。まだ答えがない。

- ・愛と自由という人の属性、価値に、お金という基準は不十分である。しかし、50年なのか100年なのか分からないが、新しい基準が確立するまで、今の「価格」やお金は、一つの基準としては残す必要がある。次もこれ以前の価値の問題である。

- ・今の合理的に製品を作る狭い価値を、対象化と一体化、自由と愛、謙虚さと批判の統一が生む主観と客観の一致の価値を含むように広げた基準を作りたい。

- ・今の賃労働以外の「労働」である子育て、親の介護なども労働と扱う。

12. 「国」の新しい経済指標の検討

将来の価値基準以前に、今の価値基準はバラバラである。

お金が価値の基準である間は、国の財政収支、国際収支、GDP(国内総生産)、GNI(国民総所得)、資産総額、人口、人の能力、「国」の土地を統合的に見て、国の総力、価値を正しく測る基準を作る必要がある。

日本の国の財政収支は大幅な赤字が続いている。以下を考えれば赤字なのは自明と言って良い。話題のMMTと関係する。

1) 財政収支は、政府の歳入歳出の差に過ぎずGDP五百兆円の入出力には対応しない。2) 資本主義でも、病気治療、親を養う費用は給料に含まれるのは建前である。

戦後二十年寿命が延びた時代に、建前上、老後を保証しなければならず、現に社会保障費が百兆円の歳出の三分の一を占める。実態がかくも急速に変化しては、如何なる制度であれ建前が実現したはずがない。

必要なのは「国民」の価値と、環境負荷少など他の対象の価値の統合の表現の基準である。これがない。

- ・「国民」の価値はGDP、GNIで部分的に表現できるが不十分である。

- ・環境負荷は財政収支では表せない。環境に有害な化石燃料の購入は国際収支で一部は表せる。しかし、国際収支は、ある「国」がプラスならマイナスの「国」がある相対的指標であり、不十分である。

取り敢えず、「国民」の価値はGDPまたはGNIを部分的指標とする。「対象の価値」の指標がない間は、国際収支から該当項目を抜き出しとりあえずこの指標とする。財政収支改善、財政再建を目標にしない。

13. 資本主義下での対策案と ポスト資本主義までの国の財政収支と個人の家計

土地建物強硬化、高価値化のための土木建築などへの大幅の出費増、**例えば年二十兆くらいまで、当面の間毎年2兆円ずつ増が必要で、そのためには緊縮財政からの脱却を要する。**

この出費を怠ると日本は壊滅的被害を受ける恐れが大きい。財政どころではなくなる。MMT理論は緊縮財政からの脱却の根拠になると思えるが、MMTによらないとすれば次のような姑息な対策を取る必要がでてくる。

第一は、赤字を国債発行で埋めている30兆円を、別の手段、例えば前に述べた土地建物などの価格上昇による税収増、高所得企業と高所得個人からの税収増で埋める。

第二は、当面の暫定案として、従来の歳入、歳出に加え、エネルギー源の輸入とエネルギー販売を、国の財政に直結させる。これは各電力会社の実質国有化になる。

これらは、姑息な案であり、第二は部分的対策に過ぎない。

ポスト資本主義成立までの過渡期は、国の経済と個人の生活が、お金によって運用されなければならない。前に述べた**土木・建築の基幹産業化と、教育と労働、生活の一体化によるGDP、GNIの増大**を図る。

以上は、要件、機能に過ぎない。この実現には様々な検討が必要である。

田中宇の言う「ドル崩壊」などの恐れ[TS]や格差拡大は、古い「マルクス主義」理論の「資本家の無秩序な生産」や実体経済によるものではない。新しい原動力と新しい価値による経済を目指す。

「対象化」に関わる「経済」は、従来の「お金」を当面残し、「一体化」に関わる「経済」を、新しい価値を原動力とする模索をする。本質的価値であれ当面の価値であれ、価値が増え続ける社会にしないと少子化は起こる。

取りあえず第一に例えば子供を産み育てる家庭に一律月 10 万支給する。

第二に、当面は「正常な」資本主義にする。1) 不当、不法に「富」を得ることは禁止する。株の操作、先物取引を禁ずる。不当、不法に得た「富」は没収する。今、把握されていない「富」についても同様。実体と乖離した仮想通貨の廃止、高額のかじ、ギャンブルの廃止も行う。これら自体資本主義がもたらしたものではある。国の金備蓄、国による土地の買い取りを少しずつ進める。

2) 高率の税を取る。高所得者の年金掛け金を増やす。併せて、お金以外の経済の原動力の検討を行い、将来「国」の貨幣発行と徴税を見直す。

14. まとめ

日本は、統合型リゾート IR をやめ、価値を増大する土木・建築の基幹産業化、学びと労働・生活の一体化による経済活性化、原発推進、憲法改定、国の相対化、インフラと食料のローカル化推進が要点である。過渡期には、「国」の貨幣発行と徴税を続けながら、(EU のような方法、金、SDR などに連動したリブラなどの併用を経由した) 新しい像の検討を行う。

2. 世界共通の課題

本書の根源的網羅思考が、態度、思考、議論、実現の前提である。多様な個の確立の課題がある。

新しい生き方を作ることと新しい(ポスト資本主義という)制度を作ることという入れ子の二つは同時に解決するしかない課題である。少なくとも新しい生き方を作ろうとしない人にポスト資本主義は作れない。

・今後、**労働と各人の教育とが一体になった全産業**と、AI の支援の下で自律発展し続ける構造を作るように姿を変えた土木・建築が基幹産業になり、価値は増え続けるようにする。このためには緊縮財政をやめる必要がある。

これらの要件は、将来数万人を乗せた宇宙船が別の惑星に着くまで世代交代しながら数千年数万年数十万年飛行し続ける時代に繋がっていく。将来の数百億人千億人を乗せた宇宙船が地球号も比喻でなく同じ要件を持つ。

・宇宙開発、惑星への宇宙旅行、移住は、数か「国」ごとにまたは国連で行う。

・ポスト資本主義の姿、地球人の生き方を全員で考える。

・例えば、日本、韓国、北朝鮮、アメリカ、中国、香港、台湾、モンゴル、オーストラリア、ニュージーランドなどの地域連邦制の検討をする。韓国の朴槿恵元大統領は、2013年4月に東北アジア平和協力構想を発表した。アメリカ、北朝鮮、中国、日本を含む優れた構想だった。他にも優れた構想を持つ偉大な政治家だった。現 文大統領や世論に残念ながら潰されてしまった。これより早く鳩山由紀夫元首相も2009年9月「Voice」(2009.09)に「東アジア共同体」構想を発表している。(ともに当時の「支配層」から嫌われそうな内容である。二人とも出身は工科である)

・小さな課題だが五輪については憲章を厳格に守る。国を超えた参加を増やす。

3. 世界の制度

31. 時間はかかるが、民主主義国では複数政党制から、一党独裁制の国では一党独裁制から、ともに直接民主制に移行するのがよい。

民主主義国と一党独裁制の「国」をどちらもなくすということである。根源的網羅思考は、独裁国、民主主義国を超えた原理である。

直接民主制に移行の時、「国」が消える時、対象化(自由)と一体化(愛)の統一が実現するのは、どれが一番早いであろうか。

32. 資本主義の「正常な」発展には、不当な先物取引、株価操作の規制等の厳格な実施等による実体経済の発展が必要である。欧米のリベラルマスメディア、政治家、評論家に以上の課題の把握が皆無である。

4. 国内政治制度

41. 今の立法、行政、司法の三権分立を見直す。

「立法、行政」と「(検察と)司法」の二つの分立はありうる。立法、行政は不可分である。第一に、行政こそ、その運用の中で問題が明確になり、どう立法すべきかが分かる。

第二に、今の日本に限定された話かもしれないが、憲法の言う「立法府の選んだ内閣総理大臣が行政を統括する」ことが実現できるはずがない。

それが実現できるのは硬直した一方向独裁組織だけだろう。

今の「内閣総理大臣が行政を統括する」内容は、内閣総理大臣が大臣を任命し大臣が行政各省庁の長になることだけである。これは当然、行政組織の運用に大きな影響はあるがそれだけである。本省の課長は、担当分野の日本の総責任者で、都道府県知事や会社トップに命令する権限がある。立法府は年間百兆円の予算を決めるが、行政府の官僚は年間五百兆円のGDPに影響する責任を持つ。

大雑把だが一対五くらいマスコミ、産業、教育界、学会の各界他社会への影響力が違う。この影響の構造は目に見えにくい。事情はアメリカなどでも同様である。[TS]

42. 政権のありかた

個性が花開くまでは、独裁政治は必要だった。今の「民主主義」は間接民主主義であるが、今の議員、マスメディア、間接民主主義の現状では独裁制を非難できない。

理想的に個が確立して行き、直接民主主義に近づけていくのが良い。まず、立法、行政を一元化して統合し、その上で次のようにする。

とりあえず、今の議員は今までどおりの選挙により選ぶ。必ず、一定の議席数を取った政党との連立政権とする。但し当分の間、外交、財務、「国防」を除く。

立法はプロジェクト制メンバーによることを基本にする。個々の立法は行政各部門と各議員、関連する分野の「国民」各層の三者からなるプロジェクトで議論を行う。

固定した取り組みの必要なインフラストラクチャーの構築方針についても、メンバーの時間交代を長くすることで対処する。

要するに、今の政権を選挙で選び、その政権の政策だけが実現されるという現状を変える。こうすると問題になるのは本来不整合な政策が複数実現する恐れがありそれを統括するための制度は何か必要だろう。

マスメディアや官僚、政治家に、製造や農漁業労働経験者が皆無で、実体世界の論理の実務経験と感覚がない人ばかりである。仮説だが、これが支配層の価値判断が正しくない根拠の一つである。

この対策にもなる。野党の能力向上にも役立つ。

何より民主主義に近づく。例：今の日本の国会本会議、各委員会での、各党と内閣の議論は、内閣も各党も、それぞれの内部で決められたため変えられないつまらない内容を、相手（と「国民」）に対して言い合っているだけで、議論になっていない。

43. 地方行政

気象予報の精度は格段に上がり発表もほぼ適切に行われている。しかし2018年7月高層住宅が皆無の倉敷市真備町で住民への避難指示が破堤後に行われる問題があった。これにより二階に避難できない障害者と平屋建ての逃げ遅れによる死者が五十名を超えた。地方自治体で行われる避難指示など自然災害の防災の管理は問題が大きい。

私の住んでいる岡山市には高層住宅も多いが、全市民七十万人全員の避難指示が早くから出ていた。そのため避難はしなかったが当日は眠れず朝までニュースを見ていた。

次の、イとウは市の問題である。

ア、一戸建てだけの地域と高層住宅が混在する地域では、避難指示の出し方は異なるはずである。高層住宅があるところでは低層の住民は高層に避難すればよく、平屋建ての住人は近くの二階建てに避難するようにしておけばよいレベルが殆どである。

イ、真備町の場合、文字通り致命的に避難指示が遅れた。

ウ、真備町の場合、五十人を超える死者が出た。すべて、二階に避難できなかった障害者と平屋建ての支援の必要な人である。現に、消防と地域が手分けし一軒毎に避難させて回り死者がでなかったところがあった。避難の**必要な人に必要な指示と対処ができていないことが問題**である。

マスメディアは、この最大の問題を取り上げず、避難指示が発令されていても、人が避難しないということだけを問題にしている。

放送を10件ほど見た限り、全国レベルでも、NHKも民放も同じだった。

2019年4月に発表された倉敷市真備町の災害総括で、倉敷市の危機管理担当者の話の一部が報道された。

「避難指示は去に沿って出したが、住民の避難勧が行われなかったことが問題」という発言と対策の一部が報道された。全マスメディアと同じである。このままでは一洪水で数百人の死者が出続ける。

エ、50年前から雨の降り方が変わってきた。当時すでに鶴田ダムなどの過放流問題があった。数千万トンの貯水容量があるダムについては、国管理、公団管理、自治体管理、電力会社管理を問わず、今行われている低水時の事前放流に似た高水時の「事前放流」の見直しが必要である。

この「事前放流」の開始時刻、放流量、増やし方は、予測される雨量の時間経過、予想される流入量の時間経過、ダム湖の形によって変わる。

（昔、低水の事前放流プログラムを作って放流開始時期のシミュレーションをしていたことがある）したがってその都度柔軟に変える必要がある。

県や電力会社のダムに雨量から流入量を予測するモデルがもしないなら作る必要がある。高水時の「事前放流」を含めたダム管理規則もダム設計時の想定降雨量の設定なども国交大臣主導で見直しが必要である。殆ど埋まっているダムもある。ダムの浚渫も河川の浚渫も行う必要がある。

山麓の住宅地での土石流で毎年多くの死者が出る根本対策も必要である。

また、高知県では、東南海地震対策として百人程度が避難できる「防災タワー」をあちこちで作っている。もっと根本的な建物自体の高層化が緊急に必要である。

マスメディアと自治体の危機管理の変革が急がれる緊急課題である。

4) まとめ

全ての人の、事実と価値の全体を求める思考と感性が前提となる。

世界的に戦後は、1. 資本主義の利益中心主義と非合法的金儲け、2. 事実認識ができず未来像を作れず、「民主主義国」の作られた「常識」、形の上で民主的に作られた決定、自国や覇権を不法に守る支配層、特に(英米、中露北朝鮮を含む)全ての国の諜報界、3. 大きな価値を提示できないリベラル・左派の小さな価値の偽善と傲慢さ、の三つが世界を変える障害になっている。

8.4 情報のインフラストラクチャー1：マスメディア

一般的にマスメディアのニュースに限らず「事実をそのまま伝える」ことは不可能である。必ず伝える側の常識、世界観、価値観が反映される。

様々な価値による判断があるので、異なった報道があるのが正常な状態である。しかし日本と欧米のマスメディアのニュースは異様に画一的である。それに具体的な報道内容の生成過程、取舍選択過程は、明らかにされない。

実質的なフェイクニュース、伝えるべきなのに伝えないニュースも多い。

1. 難しいが独立性自主性を求める。

マスメディアには、日本では、NHK、民放などの放送、新聞、週刊誌、それから取舍選択して掲載するネット上のニュースサイトがある。

報道内容に、支配層、エスタブリッシュメントによってバイアスがかけられる。その強さ、報道の主体の自主性は明らかにされない。

日本とアメリカの2017,18年は、1. このバイアスに二種の領域があること、2. マスメディアの報道内容に主としてバイアスをかける支配層、エスタブリッシュメントが、個々の政権でなく、もっと大きなものがあることを明らかにした年だった。

11. 二種の領域とは、国内と国際問題の二つである。国際問題では、日欧米でのマスメディアがほぼ同じ論調に統一され、中露などと異なる内容である。日欧米と中露の意見を対象化し総合判断しないとしないがマスメディアはそうしない。ウクライナクーデター、シリア問題などロシア側の報道はほぼ皆無である[TS]。

12. バイアスを掛けるのが個々の政権でないことは、アメリカではトランプ大統領に対する米のマスメディア報道、日本では、民主党政権誕生と消滅、安倍政権の森友、加計問題などで明らかになった[TS]。

多くの人が、今の支配層によって作られた常識、世界観の内容に疑問を持ち始めた。「民主」国は、確立した個の判断によって政権が選ばれ政治が行われるという状態ではない。官僚を我々は選べない。政権は選べる。今の政権を選ぶ最大の要因は（多様な）マスメディアによって作られる世論（だからマスメディアは一枚岩ではない「支配層」に属する）、二番目の要因が「国民」の判断力である。マスメディア情報が迷っている人の意見を左右する。

2. 客観的な価値判断を求める。「事件」は限りなく多い。その中から何を報道するかを選ぶのは、重要さ、緊急さを判断する価値判断であるはずである。価値の大きなものを小さなものより優先するという意識が乏しい。

そもそも価値の判断ができないのではないのかという気すらする。

次のような例がある。これが問題という意識がマスメディアにない。

21. 小池知事の前の都知事二人が相欠いでやめさせられた。軽微な事件だったにも関わらずマスメディアとこの二事件の場合は全政党も同期して悪循環で世論を煽り、二知事を退陣させた。

22. 2016年2017年の総選挙前、安倍政権の森友、加計問題も、価値の小さな問題であるのに、NHKを含めた全ての放送、8割の新聞が安倍政権非難に回った。（NHK夜9時のニュースの女性アナウンサーが「（安倍政権の）潮目が変わったのではないのか」と何度も口にした）しかしこの直後の選挙で、自民党は大勝した。

この二事件は、マスメディアが、価値は小さいが大衆受けしやすい「事件」が起ると、先頭に立って一斉に大衆の世論を煽る態度になることをはっきりさせた例だった。

当時総選挙が近く殆どのマスメディアは安倍政権退陣を目指したように見えた。しかし、「成功」しなかった。次の三つの「事実」は何度も繰り返し報道された。

- ・野党の予算委員会などでの長く中身のない政権非難と政権の防戦、
- ・ニュースでの十秒の顔をアップした野党幹事長、国対委員長らの政権非難の一言、
- ・安倍総理が、加計問題で質問に応え「加計学園理事長とは長年の友人であるからこそ、獣医学部新設について事前に依頼をしたことはない」趣旨を述べた。

安倍総理の発言は、自分は個人的にこういう価値観、倫理を持っており実際にそう行動したという表明である。

これは倫理的に正しく実際も大きくは間違いないと思う。最大の問題は、この際の、野党大勢の「エーッ」というわざとらしい声である。何度も同じ質問が繰り返され、その度に声の大きさとわざとらしさは増していった。

第一に、これは、総理の持っている正しい価値観、倫理を、野党は持っていないと表明し、「総理は実際にその価値観に基づいた行動を行っていない」と述べたのである。これらの非難は、言う本人の醜さや組織の劣化をもたらした。一般に、人を非難する時の顔は醜く非難の態度は人や組織の劣化を進める。第二に、与党に問題があるが、野党はもっとひどいという「事実」とその意識が聴取者に伝わり続けた。この例はリベラルマスメディアとリベラル、左派をダメにしてしまった典型事例だった。

23. ニュース本文だけでなく、権威ある「専門家」の意見と、普通の人のインタビュー内容も、報道側の意図を伝え、世論形成をおそらく大きく左右する。

原発再稼働に当たっての、NHKの、当の町の人々のインタビューは今まで例外なく二人に行われ、発言内容は次のとおりである。まず中年の男性が出てきて「再稼働には賛成、この町の経済に原発は欠かせないからだ」と言い、次いで若い女性が「子供のために原発は不安だ」と言う。確固たる意見を持たない人に再稼働の理由が地元のためだという印象と漠然とした不安感を与え続ける。

女性の意見は初期には「不安であり再稼働反対」だった。最近では

(2018年までだが)「不安だ」までで止まるようになった。

これはおそらくNHK解説委員を含めたNHK全体の「常識」によるものという疑いを持つ。2017年後半だったか2018年に入ってたか深夜に原発に関連する解説委員による討論会があり観たことがあった。

全員が原発再稼働に否定的だった(これは少しおかしいのではないか)。

マスメディアには報道内容発表についてISO9000によるトレーサビリティの記録を行うことを求める。

公表した内容が誰のどのような情報に基づいて得られたものか、必要部門が(一定期間後などの条件付きで)追跡できるようにする。マスメディアから優先的に実施してほしい。

24. 2019年の香港の政治犯の中国への引き渡し法反対デモの様相が大々的に報道された。

「犯罪者が別の国に逃げてきたら元の国に引き渡す」という正当な一般論とどう違うのかは気にしながら見たが、NHKはこれを報道しないので分からなかった。

中国の「自由」に問題はあるだろう。一般論だが、中国の「自由」の問題に匹敵するのが「民主主義」国の作られた「常識」「空気」、形の上で「民主的」に作られた決定、欧米露等の「民主主義国」諜報界の非合法行為や陰謀の問題である。「民主主義」の諜報界とその影響下のマスメディアは中国を非難できない。

25. 2018年19年の自然災害について、避難指示が出ているのに避難しなかったという「総括」の報道ばかりである。これは前にも述べた。マスメディアと自治体の危機管理の変革が必要だ。

3. 全体像を求める。これとは違う問題だと言われるかもしれないが、今、日本では「事件」も「凶悪事件」も、年々減っている。凶悪事件はたまに起こる。それは大々的に報道される。

これでは、凶悪事件が増え続けている印象を人に与えてしまう。

今の報道姿勢は全ての人に悪影響を与え続ける。凶悪事件は報道する必要がある。難しいことだろうが、現実の全体像を伝える努力を求めたい。

第一の全体像は、現実の日常は、実は思いやりに満ちており発展し続けている。より価値の大きなものを価値の小さなものより優先するのが初歩的前提である。変わらず、思いやりと愛が発展し続けていることが、より価値の大きな事実である。

同時に、これだけでは全体像にならない。次の二つがあって全体になる。

第二の全体像は、日々の人の努力が今を作ってきた、常に変革が必要であること。

第三の全体像は、今の日本だけでなく、世界の日常の問題もより大きいこと。例えば今の日本のいじめを報ずるとき、過去はどうだったか、他国ではどうなのかは、現実の全体像の重要な一部である。

また例えば、マスメディアは、外国で小型飛行機が墜落して数人が亡くなったら報道する。世界で毎日、健康な人が数千人死んでいく日常は、自動車生産国として伝えるべきなのに伝えない。

4. マスメディアの世論調査の項目に国際政治単独の項がない。日本は、米中露と南北朝鮮が隣国であり国際政治の比率が高いはずである。

5. 上の1,2,3,4は関係があり同時に取り組んで実現される大きな課題である。

マスメディアにも政党にも、高度な判断、総合的判断以前の責任がある。

自分を対象化、客観化し、自分はどのような価値に基づいた報道を目指しているのか、どのように価値を見直し続ける努力をしているのか述べ報道するべきである。

8.5 情報のインフラストラクチャー2：人工知能

AI がインフラストラクチャーになる前に、AI のあり方を作らなければならない。

人工知能、AI については、五十一年前、卒論のため、学習理論を勉強したことがある。それ以前にも、何度か、楽観論と悲観論が繰り返されていた。その後の数十年も、数回、人工知能の悲観論楽観論が、交互に繰り返された。その後、人工知能から遠ざかっている。情報を整理し、AI の実情を見ておきたい。

1) 人工知能、AI の現状と欠点：その 1 Society5.0

1. 今、日本には公式に 2016 年から 2020 年までの科学技術基本計画がある。これに言う Society5.0、超スマート社会とは、次のようなものである。

「必要なもの・サービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、

年齢、性別、地域、言語といった様々な違いを乗り越え活き活きと快適に暮らすことのできる社会」。

[STP2016]
形式的、抽象的ではあるが、この表現の限りでは、うまく表されてはいない。「必要なもの・サービスを、必要な人に必要な時に必要なだけ提供」する問題を一般化すれば、**ただ事実を与えそれから何をすべきかを判断**する問題である。

これは人にも AI にも難題である。フレーム問題は、本来、人にとっても難問である。人は経験で「常識」を身につけ克服している。

この前提には、人の全てが機械によって「監視」されることが必要になる。Society5.0 は当然ながら「監視社会」でないと述べている。

これに同意する。救護必要者、テロリスト、犯罪者の特定、銃器や灯油運搬など危険物の監視と対策の AI 利用に賛成する。

問題は、1. 「必要なもの・サービス」が何か、つまり「価値」は何か、
2. それを実現する主体と手段は何かということである。

Society5.0 では、いくつかの例が挙げられ「膨大なビッグデータを人間の能力を超えた AI が解析し、その結果がロボットなどを通して人間にフィードバックされることで、これまでには出来なかった新たな価値が産業や社会にもたらされる」とされる。

[http://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html なお、まとめる省庁が分散していることも気になる]

Society5.0 の「膨大なビッグデータを人間の能力を超えた AI が解析」し 見つける小さな価値はあってもよい。

しかしこれで、**人が、新しい価値と自分自身の能力を追求し、AI がそれを支援する**という立場がゆらいではならない。

ビッグデータには、価値観によらない人の顔、動作や文字などと、人の今の世界観、価値観によって人が作ったものの二種がある。後者により、人が描いたような絵は描け作曲はできる。しかし、これだけでは、Society5.0 が言葉では、「人は新しい価値を求め AI と共存する」と言う「楽観論」とは異なり、必ず AI が人の仕事を奪っていく悲観的社会になってしまう。

2. 事実、AI は、人の単純労働だけでなく知的労働の大半も、どんどん奪っていく、という悲観論の予測が広まっている。

この前提に、AI 化、ロボット化のほうが、コストがかからない、というお金優先の資本主義の価値観がある。

3. 2018 年は、これと同時に、労働力不足の対策として、外国人活用の検討、そのための入管法改正も行われた。

全く相反する政策が奇妙に並立し進んでいる。

必ず、「人は、人にしかできない新しい価値を追求し、AI がそれを支援し共存」していく態度がないといけない。

対象化と一体化、自由と愛の統一は、必ず、多くの新しい価値、多くの新しい分野を拓く。その上で、価値と現実の差の「問題」を、AI と人の協同で解決するという意識が必要である。「AI が価値を作っていく」という方向が主導することには賛成できない。今は、**どういう価値を、どういう前提と方法で、どう AI と協同で実現するか**という意識がない。

2) 人工知能、AI の現状と欠点：その 2 価値を生む AI とニューラルネット

生きることは、無意識に生きていることと、意識的に生きることからなり、ほとんどの判断は無意識に行われ、問題の解も殆ど潜在意識下で得られる。[ES シカフス]

技術は、今まで、人が対象化し意識的に定式化したものを、技術手段にして社会に働きかければ、それは必ず技術手段化できた。

人工知能、AI の進歩によって、以上の態度を変える必要がでてきた。今のAI と人の関わりは、次の三種がある。

AI を2種に分ける。1. 顔認識のような新しい価値を生まない場合は、今後ともディープラーニングによっていい。2. 新しい価値を生む場合は、本来の解析的手法をAI によって改良することが手段の主流になるのがよい。

知覚のいくつかがセンサーとして機械化、代替されている。個々のセンサー、アクチュエーターの統合、複数の知覚の統合が行われ始めている。

1. について、下記の状況をそのままにして、定式化抜きの、ニューラルネットワークモデルの中でのディープラーニングが進んでいる。

ニューラルネットワークは、最近、ディープラーニングによって、(台風の進路や売れ筋の) 予測や (顔や病気の原因の) パターン認識に、有効に活用されている。

これは、人の経験や過去の膨大なデータから、(場合によっては、人が勘によってあるいは無意識に潜在意識化で行ってきたことを) どうしてそういう結果が出るかという内部の論理を知らないまま、(近似的にある確率での) 結果を出せる。

抽象化や具体化による定式化は、必要ない。今までにない事態である。

コンピュータにとっては、碁や将棋などや魔方陣などのゲームは、抽象化と、ある形への具体化が既に済み、完璧に「単純化」されたところから始まる。

解の「無数の」探索組み合わせを絞っていくことは、難しいとはいえ、日常の問題のような、価値、目的、その実現手段についての抽象化や具体化が必要ない。

したがって、コンピュータにとっては、「楽」な問題である。

2018年9月15日、NHK 総合テレビ、NHK スペシャル「人工知能、天使か悪魔か？」があった。今のAI が「未来を変える」としていくつかの紹介があった。

例1：今の多くの監視事例から、特定のパターンに合う事例をAI が見つける。特定の人を膨大な今のあちこちの顔や歩き方の監視例から見つける。

例2：今のパターンの事象と合うものを、蓄積された過去のパターン事例から、AI が見つけて予測に使う。数理モデルによる計算ではない。

例3：今の台風の規模、周辺の気圧配置、気温、風、水温分布などと似ている過去の台風の規模、周辺の気圧配置、気温、風、水温分布などの事例を探し、予測に使う。

例4：アメリカ、リンカーン市の、二年前からの犯罪が起きる地区、時間を予測する。

例5：今の特定の事例と、パターンと相性が会う事例を、蓄積された事例から、AIが見つける。例：臓器移植の相性、結婚相手の相性をチェックする。

しろうとから見ると、これらは、膨大な蓄積データ、高速な処理速度に支えられた処理手段のいくつかの要素の一つに、ディープラーニングのようなAI手法があるだけなので、厳密にはAIとは言わないと思うが、世の中は、そうではないらしい。これでは、AIの技術者や紹介者に、AIの判断の内容を要求しても、無理である。

例1の顔の特定は、今後ともディープラーニングだけによっていい事例である。新しい法則の抽出または新しい価値とは一応関係ないからである。

これらは、過去の膨大な事例から導き出した経験則で、「今の大きな価値、目的」を前提にした、予測か「小さな価値、手段」を実現した話である。

2は、内部のメカニズムを分析して技術化して行く従来の技術である。

例2から例5まではそうではない。真に「新しい」「法則」情報、価値をディープラーニングによらず、他の本来のAIで求める努力を主流にすべきである。

例1の顔の特定でさえ、ディープラーニングによらない規則で人は似ていることを理解している。

これらは「ディープラーニングを利用しているが、新しい価値や予測をAIが見つけたのではない」ということを、放送では言うべきである。

今の問題（理想、価値と現実の差）との人の格闘で得られ、厳密な帰納である仮説設定が必要であることを理解すべきである。その全ての努力をAIが支援する。

直すのは難しいが、今こうなっている一連の流れを直すのが課題である。

技術者やマスメディアの責任が大きいが世間にはこれらが通用する。

第一は、定式化が進む場合で、解が求まると、定式化は同時進行過程である。解が求まる定式化だけが進んでいる。定式化された部分は自動化機械化が進む。

第二は、定式化は不十分で、人は勘で解いている場合がある。

同じことかもしれないが、おそらく、重要な（検証が容易な科学の命題も含め）命題は、潜在意識と意識の間状態で見つかることが多い。その状態の探索は対象化できていない。だから、機械にも教えられない。

粒度の長期、短期、価値の抽象度に応じた、問題（矛盾）定式化を行うことが不得手である。ディープラーニングの中身も、個別領域毎の「法則」との統合を進めるのが良い。また重要な（検証が容易な科学の命題を除く）命題は、初めて見つけた人にだけその真髄が分かる。それは言葉では他の人やAIには伝わらない。

3) 人工知能、AI の現状に足りないものの考察

1. 進で失われた力を空間力、感覚を AI で取り戻す、定式化し AI 化する。

11. 地球上の生命は、数十億年の進化を経て、単純な「知覚、反応」を持つ生命から、進化により、生命の外部の文化・文明に支援された認識と行動をする生命になった。その過程で失ったものがある。

2 章の初めで思考が生まれる歴史の中で、言語が生まれる過程を考えた。

哺乳動物の集団による狩りの中には、生命誕生当初の一方向知覚一方向対象変更から進んで、すでに高度の抽象力「空間的判断」力があった。

単一目的に特化されているものの、複数個体間の高度な双方向コミュニケーションと、極めて高度の抽象力により、行動の目的の全員の一致、全体の中の自分の位置の把握、高度な超感覚、「空間的判断」による各個体の行動像が空間的に一瞬に実現される。これはどれも高度で優れた能力である。

この動物の高度な「推論的判断」は、今の人の時間的推論過程でなく空間的な一瞬の判断によるのだらうと思う。

この段階に欠けている知的能力の一般化がどうしても必要だったので、人類は、「空間的判断」力を失う代償を払い、この過程の一般化をし単一目的から全体把握の上の複雑高度な目的、実行力の獲得の方に進んでしまった。

それが言語だった。

論理とそれを担う言語が発生した。同時に対象化が産まれる。

またこれまでの動物の価値は、生だけだったが、言語、哲学が生のものである；自由と愛の統一という画期的段階を作ることができるようになった。

一方、失ったものも大きい。

仮説だが 1. 失ったものは訓練によって比較的容易に取り戻すことができる。それを AI によって行うこと、2. その過程を定式化し AI に実装するのがよい。

偶然であるが、後で初等中等教育のところで述べる「空間感覚」や「仮説設定」というサブタイトルの小学生用のテキストの目指すものと合う。

12. 価値は、1. 身体性と、2. 感情、感性、3. 論理に相互規定される。

おそらく、1. 身体性と、2. 感情、感性の規定も、論理と同様の、あるいは、それ以上の抽象化、具体化が、価値に影響している。3. 論理の実現も、抽象化、具体化という縦の論理、粒度が、密接に関係する。

価値と事実、その差異が、人によって生まれていくという意識が、AI 技術者やマスメディアの中にない。

感性、感情は、常に知性、論理に勝つ。感性、感情、知性に影響を与えるものは、世界観である。今の世界観をどう変えるかは大きな問題であった。感性、感情の課題は、本稿で扱わないが、その意義は、論理、知性以上に大きい。

AI に明らかに足りないのは、生身の知覚、生身の感情、生身の外界に触れ合う働きかけである。当然だが、今、機械は、これらを体感できない。

五感の一つ一つが、人類の全歴史を総括し抽象化した全人間的知覚である。例えば、触ることは、力学的感覚、化学的知覚、温度感覚などの総合的感覚である。

単一感覚に近い聴覚でも、音の情報を耳から聞くだけでなく、全身の音圧でも、周りの雰囲気でも聞いている。体感の個々の要素を定式化、数量化して、それを機械に教えることはできる。

そうすれば、その要素は、論理と同様、いくらでも人に近づけ得る。これを複合化して、機械の知覚、外界への働きかけを実現することも実現が進んでいる。

それでも、人の知覚、生身の感情、生身の外界への働きかけを、機械が体感できないことに変わりがない。機械の模擬知覚、模擬操作と、人の知覚、操作の差は何か？

この差を大きいと思うか小さいと思うか？「何かおかしい」という人の論理的と感覚的の把握を総合した感覚を、機械は、今は対象化も体感もできない。

また、人が深さないといけなないのは何かを知ること、新しい概念、新しい法則を発見すること、一体化を理解させることも、今のところ機械にはできていない。

これは、自明であると思っていた。今も変わらず、人は、人の作ったものより、上位にあり、常に人の作ったものを超えていけないといけなない。

2. 新しい価値を作り、価値と現実の差を埋める意識

生きることは、「**価値、目的を実現するために、現実を変えること**」という仮説を持っている。思考は、価値、目的を実現するため行う。

しかし今は、AI 技術者に、**人類の求めている価値は何か、それに対して現実はどうなっているか**という意識がない。

価値体系の全体像、それに対する現実の全体像、あるべき価値とそれに対する現実を埋めていく姿勢がない。ニーズ指向がない。これで今の AI は今の価値の延長上で人の仕事の AI 化を行うだけになっている。

人類の求めているものは、求める**価値(観)の体系**になっている。

それは「種の存続—個の生—個の属性」である。個の属性（対象化、一体化）には複雑な階層構造がある。また「価値—目的—事実（の属性）」という系列がある。この属性の階層構造を、人工知能に教えるべきであろう。

第一部第2章2.1項で、これらが同じものから徐々に分かれていく歴史の仮説を述べている。これらの差の歴史は、抽象化と具体化の歴史である。

人の不得手なことが、そのまま AI の弱点である。人が考えると、ほとんど、複数の事柄が両立する粒度を見つけることに等しい。しかし、人に、この意識がない。

複数の矛盾が同時に成り立つということは、各矛盾の全ての時間、空間、属性の粒度が両立するということである。

したがって、人も AI も、粒度に応じた事実の認識、目的(価値)と手段の仮説設定、手段の課題の解決、仮説検証が不得手である。認識についても、抽象化が不得手である。例えば哲学（世界観、方法）の認識が不得手である。

3. 抽象化、具体化による粒度の特定、定式化

価値について、機械には、価値や、価値と現実の差の確定に前提となる**抽象化、具体化による粒度の特定、定式化が不十分**である。

2018年の10月の一、二週間、福田ちはるさんと、中川徹先生を交えたメールのやりとりをさせていただく中で、初歩的なことを見逃していたことに気づいた。福田ちはるさんが、子供に「抽象化」を教えるのが難しいと言われていたのと、私が「抽象化」の重要性に気づいたのが同時だった。

論理に、いわば、横の推論というべき従来の推論と、いわば、縦の抽象化具体化の二つがあることに気づいた。価値、目的を管理するのは、主に、抽象化、具体化という縦の論理、粒度である。誰でも知っている当たり前の話だったかもしれない。

中川徹先生の「六箱方式」[NKGW2019]は「抽象化具体化」と推論の同等の重要性を、初めて明示的に述べた理論だったことに改めて気づいた。

抽象化、具体化という縦の論理と、推論という横に進む論理の歴史が、歴史である。知覚、感性、感情の変化の歴史ではない。抽象化、具体化という縦の論理、粒度によって作られた、古い「価値—目的—事実（の属性）」が、推論という横に進む論理により変更され、新しい「価値—目的—事実」ができていく。この繰り返し過程が歴史である。

碁や将棋などや、ゲームは、コンピュータにとっては、抽象化、具体化が済んだ問題である。今のコンピュータには粒度の意識がなく、横の、推論の論理しかないように見える。コンピュータに、少なくとも最初は価値、粒度を提示しないといけない。

しかし、価値、粒度を対象化できず意識できていない人が多く、十分に、価値の体系、価値の原理、原則、粒度の原則は提示されていない。

つまり、論理、方法には、従来の（演繹、帰納、）仮説設定という推論と、抽象化と具体化という、全く扱い方を変えないといけない二種があるのに、前者だけが論理、方法だと（AI）技術者は誤解していたのではないのか？

知性も（感性も）全面的に、人生の発展段階に応じて発展させることは、今、実現に遠い。常識と異なると思うが、人の能力の発展が経済発展の最大のキーでもある。

知性を、関連する感性、世界観の全体の中で位置づけておくことが必要である。

人または集団が、独自の知性の判断力を持ち、判断力向上を行うことは、それ自体大事なことである。それは、二つの理由がある。

- ・今の教育が、人の能力を全開させるものになり、人とオブジェクトの価値を増大し続ける内容に変われば、人はAIを使いながら努力し続けることができ、経済も正常に発展し続ける。

AIの支援によって持続的に発展し続ける土木・建築と並んで、**人の能力の開花を目指す教育が、経済の根本的成長の力になる。労働や生活が、教育、学習と一体化し、お互いお互いを向上させるようになる。**

- ・必ず生じうる機器ダウン時の対策のためにも必須である。

4) 今後のAIの可能性：身体性と感情、感性の実感

欠点を解消できれば人工知能に次のような可能性がある。人工知能とそれによるVRで人に「実感」をさせる。例えば、人は、数千年前の物々交換時にはあった感動を今は実感できない [THPJ2012]。

VRによる人の「実感」の利用方法として、人類の初めての物々交換体験のシミュレーションなどが考えられる。

人の知覚を機械は体感できない。体感の個々の要素を定式化してそれを機械に教えることはできる。

人の論理的感覚的把握を総合した感覚が対象化できない。これも、論理的感覚的把握を総合した感覚の対象化を一つ一つやっていくしかなかろう。

共同の世界観、価値、人の労働と生活における生き方、共同の目的、解く問題の決定は、複数人と人工知能が共同で行い続け、集団内で合意するのが良い。

5) 今後のAIの可能性：粒度特定による定式化と価値実現

・網羅データベース、ニューラルネットワーク

個人の思考、集団の議論支援を、網羅データベースと人工知能で行う。

根源的網羅思考の実現は個人の手に負えないかもしれない。とりあえず欲しいのは、ある粒度での網羅のデータベースである。その中からの選択は人または集団に任せる。

集団での合意が必要なテーマは多い。ほとんど全てかもしれない。根源的網羅思考による議論が必要である。その際、個人は、手元のPCやスマートフォンで網羅された中から選んだ粒度間の論理を展開する。

AIの実現手段であるニューラルネットワークで、入れ子、階層構造などを実現する。超格子やFractal構造の入れ子や階層構造のニューラルネットワークを作る。

・粒度特定による定式化と価値実現

人工知能に今の問題に必要な認識、変更の粒度を特定させる。

複数の矛盾モデルの集合体からなる問題の、複数の矛盾が同時に成り立つ粒度決定を定式化する。複数の矛盾が同時に成り立つということは、各矛盾モデルの全ての時間、空間、属性の粒度が両立するということである。

あるいは、定式化と解が求まるのとは、同時進行過程であることを定式化する。

話題の粒度の歴史を網羅、総括し、問題を明確にし、提起する。

1. あるべき価値体系の全体像、それに対する現実の全体像、今の人工知能の全体像を明らかにし、それらを求めていく。時間、空間、属性粒度を自由に管理し問題(矛盾)を定式化させ、扱う領域を拡大させる。

2. あるものの全ての領域の全体の中の位置を認識させる。あるものと他との関係も認識させる。目的価値と手段の仮説設定、手段の課題解決、仮説検証を行わせる。

3. 抽象化を行い普遍的な法則、ラングランス問題の解などを発見させる。

4. 人の今の努力が世界と歴史の全体に繋がる生き方を提示させる。

5. 新しい価値を実現する制度を作ることを提示させる。新しい方法、モデル化の網羅的検討をさせ、問題(矛盾)定式化をよりよくさせる。

これらが**今、人が必死に取り組んでいること、取り組むべきこと**である。

それを支援すべきである。価値の原理・原則の定式化をする。これらは、人にとっても課題である。課題の相対化、対象化が必要である。ポスト資本主義を作り新しい価値を作っていく努力がAIにも不可欠である。

今は、AIが人に代わる話だけになっている。AIは、根源的網羅思考による定式化により高度化して行ける。人の思考力はAIに勝り続けて進歩して行ける。

AIについての政治、行政の一元化も必要である。今は総務省、文科省、経産省とバラバラである。

8.6 教育のインフラストラクチャー

1) 全体

支配層が現実や価値、未来への展望をとらえきれていない。それで今のマスメディアと初等中等教育になっている。

今の教育が、今の「国民」、政治、経済、マスメディアを作る。人の作った何事にも完成したものはない。根本を決める哲学でさえ、作り続けられる仮説、虚構、フィクションである。教育は、常識、世界観、価値観の虚構、フィクションを作る大きな要因である。常識、世界観、価値観の枠組みは、主に学校、親の教育、マスメディアが作り、日々に起こる事柄については、主にマスメディアが提供する。

哲学、論理と感性を増す生き方、認識でき発表でき世界を変える生き方を身に付けさせることが必要である。

そもそもこれができないと、大学無償化が実現できたとしても、今と同様、大学で学ば力のない人が生まれてしまう。

今の教育が、人の能力を全開させるものになり、人とオブジェクトの価値を増大し続ける内容に変われば、人はAIを使いながら努力し続けることが可能になる。

企業の場合、全員が正規従業員になり、経済も正常に発展し続けるようになる。今は、最低、夫婦の片方が、正規従業員でないと老後破産する。(年金の統合も必要である) 企業が正社員を増やすためには、企業にとっては、退職金、企業年金などの負担に見合う社員であることが必要で、社員にも努力をし続ける力が必要である。

今の教育の実質無償化の取り組みで、大きな課題が解決される方向ができたと思う、2018 年 19 年の日本の政権の功績である。(ただし今の初等教育の問題はある)

感性や論理の力を増す教育が、経済の個々の産業の根本的成長の力になる。個別には土木・建築が基幹産業になることが望ましい。**労働や生活が、教育、学習になり、お互いのお互いを向上させるようになり、社会の価値が増していく。**これは初めても、十年、二十年かかる。うまくいかなければ、相変わらずいじめや犯罪の原因を生んでしまい少子化も解決しない。

2) 初等中等教育

日本の今の特に初等中等教育は、抜本的改革を必要としている。

宇宙、生命の新しい発見は初等中等教育の内容を大きく変えている。これに対応した新しい論理学、世界観、生き方の教育も必要である。

現に、IQ [<http://tanakanews.com/190528iq.php>] や「平均学力」で、シンガポール、中国都市部、韓国、台湾に後れを取りつつある。

今の日本の教育は、他の先進アジア諸国に比べても、遅れてきている。この傾向は益々進んで行く。「他国」に「負ける」ことが問題ではない。

初等中等教育がアジア先進国に対して遅れ始めているのに、英語やプログラム教育だけが話題で、肝心なことが何もなされていないことが問題である。

教育の目的評価基準は、1. 全体の知力、感性の向上、2. 個人の能力を伸ばさせるだけ伸ばすという二つがある。この両立が必要である。

国政と地方の与党、野党とも、問題を認識していないこと、解決しないこと、対案が出ないことの責任がある。

野党は教員の数を増やせと言うだけである。教育に限らず全ての問題に、内容の改善が第一で条件の改善は二義的である。

小中高の学校教育の内容は、(ほぼ 100%、行政と政府、彼らを選ぶ教育学者、「学識経験者」が主導的に作っている。物事を現在の姿にした当人が、現在を根本的に変える案を出せるはずがない。根本的変革は起こせない。

以下、初等中等教育の問題だけ述べる。今の初等中等教育の問題は他の問題より大きい。初等中等教育の**目的**は、世界の事実がどうなっているか(世界観)、認識や事実変更をするために世界に対処していく力(論理と感性)をつけ、生き方を身に付けることである。

今は、中央教育審議会、科学者、教育学者、文部科学省の官僚が、初等中等教育の学習指導要領と教科書を決めている。これを変えないと教育は変わらない。

教育の内容が第一で、その前提で、第二に、生徒と親などの問題、第三に、教える先生の問題もある。

(第一：教育内容)

小学校（と一部中学）の内容をいくつか述べるにとどめる。今は、必要な内容が不足し、かつ要らない内容が多い。今の内容を八割方入れ替える。

1. 感性、感情は、本稿では論じなかったが、論理以上に重要である。人は感情と論理で生きている。そして感情は、常に論理に勝つ。感性、感情をとおしてでないと、如何なる論理も物事も身に付かない。

特に、初期に、感動とその表現の方法を教え、それがコミュニケーションの始まりであることを教える。内容のかなりの部分は、詩、小説や絵、映画、音楽、演劇、コント、アニメなどの芸術を見聞きすること、作ること、その感想を書く、述べることに割き、先生と生徒が共に学ぶ。これらは、抽象化と具体化を繰り返してできた。

2. 体育、図工、音楽の内容は省略する。音楽の、民謡、歌謡曲などの日本音楽や、世界の民族音楽、ポピュラー音楽の比重を高める。

3. 小学生のための「哲学（世界はどういうものか＝世界観、世界をどのように見ていくか変えていくか＝方法）」を教科書にまとめ、先生と生徒が、共に学ぶ。中川徹先生の<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jlectures/jRubinaCIDBook/jRubinaCIDBook-index.html>に載っている「子どものための創造的想像力の開発（CID）コース（小学校1-3年生向け）（Natalia V. Rubina（ロシア）、英訳 Irina Dolina）」に和訳がある。小学生のための「哲学（世界はどういうものか＝世界観、世界をどのように見ていくか＝方法）」の入門になっている。読んでいて感銘を受ける。ただ属性の階層、抽象化、具体化を教えることは、行われているが不十分である。訳が終わったら新しく日本の教科書がほしい。

4. 論理1：抽象化、具体化の方法を、先生と生徒が、共に学ぶ。

今、教えられていないのが、抽象化、具体化の方法である。抽象化具体化を教えるのは難しい。その具体例を繰り返すしかない気がする。

俳句や短歌が良いかもしれない。横方向の論理、仮説設定、演繹、帰納と並んで、縦方向の論理、抽象化、具体化がある。抽象化、具体化には無数のやり方がある。

これをどう教えるか、大人も子供も抽象化具体化をどう学ぶかは難しい。

宿題やテストのような個々の問題を解くことの「意味」が今は生徒にとってはおもしろくないものになっている。

それに**問題の意味**が分からない子が多いという。これは、文や語の抽象化具体化の程度＝粒度が分からないか、文間の関係、全体の構造が分からないか、その全部である。

語の粒度、文の粒度、文章の全体構造は同時に分かる。

2016 年、孫が小学校 6 年だった時、正月休みを中心に一時期だけ、勉強を教えに通っていた。その中で、算数に次のような「問題」が多くあった。

算数の問題の一部：「家から駅まで 1.2 キロメートル、駅と郵便局は 0.4 キロメートル、郵便局と家は 1.4 キロメートル離れている。この三つの全部を足した距離を「1」としたら、家から駅まではいくらか？」これには、有次元の数を無次元に変える、しかもその数の総和を 1 にするという正規化の二段階からなる高度の抽象化操作が必要である。これをどう教えていいのか分からなかった。この抽象化操作が分からないとこの問題は解けない。

比喩は、抽象化と具体化の往復を含む高度な概念である。おとぎ話や聖書は、比喩の物語である。おとぎ話の元の形を読むことは抽象化に資する。

中学でマイナスを含んだ数の掛け算が出てくる。それ以前に 0 やマイナスの数の本質を教える必要がある。掛け算足し算ができるのはどういう場合か分からせているか？

5. 論理 2：仮説設定を、先生と生徒が共に学ぶ。演繹や帰納ではない。

小学校低学年から「宮本算数教室」、「天才脳ドリル」などの**仮説設定**、空間感覚（こういう名前の付いた分冊ができています。）で全体の把握力を身に付けることは有益だ。子供はどんどん伸びる。

「宮本算数教室」、「天才脳ドリル」の小学校上級のドリル（出来は良くない）は、二年前、小学生の孫は、難しいなりにやればでき、できれば達成感があった。自分には難しくほとんどできなかった。これらを小中学校に取り入れるべきである。

抽象化、具体化についても、教育に取り入れるのが良い。

「学力」向上にも資する。日本は、韓国に比べて全体把握が弱いという「学力調査」の結果も 2, 3 年前にあった。重大である。どういう対策がとられたのだろうか？

6. 国語、数学（算数）、公民は現状を改良して、ほぼそのままとする。

但し今は国民年金掛け金を払う人が実質 4 割である。中学卒業までに社会保障制度がきちんと教えられていないのではないのか。そうであれば公民教育の大欠陥である。人の努力が制度を作ってきた。

これから皆で努力して作ることを教える。

7. 理科と社会（公民は別）を統合し、自然と人の文化の個々の物ごとの始まり、その感動、その後の運動と構造、それらを買く論理を、先生と生徒が共に学ぶ。個々の物ごとの始まりとは、宇宙、地球、時間、空間、生命、植物、動物、言葉、道具、火の利用、物々交換、お金、論理、国、戦争、政治、宗教などの始まりである。

人類世界の文化・文明の歴史の記述の基本は、本来、道具、言葉、火の利用、農業革命、物々交換開始の叙述に続き、最も初歩的な「四大文明」における「生産のための技術体系と運用、経済制度、政治、宗教制度、行政機構の複合体」の形がどのようなものを述べ、その形と運用が、どう「論理的に」進んでいくべきであり、「実際に」どう進んで行ったかを述べればよいのではないか？

過去の歴史に「もし」はないが、歴史学に「もし」はある。

「論理的に別の方向に行くべきなのに間違った方向に行っていた、もし正しい方向に行ったらどうなっていたか。正しい方向に行くにはどうすれば良かったか？」という問いを出す点はどこかを述べ、今に活かす教訓を出すことが必要で可能である。歴史学とその叙述は、このような論理歴史学であるのが良い。

日本史、世界史なら1. 宇宙の誕生、地球の誕生、多様な日本の自然を概観した上で、縄文時代弥生時代の生活の状態を述べ農業と物々交換による人々の生活を述べ、

2. それ以降の歴史は、文化・文明の誕生時代の、文化・文明の内容を述べ、

3. 以後、それをどう向上させていったか？という流れの論理を理解させる。エッセンスのみに絞り、今の一割程度に減らす。

今の小中学の歴史教科書の実際は、人物が起こした事件の羅列があるだけである。今のような内容の歴史は、無駄であるだけでなく有害である。

・三年前の小学校5年の理科教科書の例だが、宇宙の始まり、その後の太陽、惑星の始まりも書いてない。生命がどうして生まれたか書いてない。

植物、爬虫類、哺乳類の関係が書いてない。まだ研究途上であり「定説」を教える難しさはあろう。エッセンスのみに絞り、今の一割程度に減らす。

・減らした分のいくらかの時間で、宇宙、地球、時間、空間、生命、植物、動物、言葉、道具、火の利用、物々交換、お金、論理、国、戦争、政治、宗教などの始まりと歴史を教える。何がまだ分かっていないかほとんど何も分かっていないことを教える。

・何より、地球の歴史、他生命との関わり、人の努力で今があり、これからもそうであることを教える。

教育の全体を変えないといけない。その上で英語もプログラミングもよい。だめな教育は、だめな「国民」、支配層、マスメディアを作る。

特に、日本の初等中等教育は、教科書を含め、取りあえず十年、二十年かけて当面の改正を行い、長期的には数十年かけて、ゼロから根本的見直しを必要とする。小5、小6の日本史、理科などの一部廃止はすぐにもできる。

(第二：生徒の問題)

第二は、生徒の生き方の問題である。正しい生き方がないと生徒のいじめや学級崩壊が起こる。これらは、起こす側の防御手段として起こっている。

(第三：親、自治体などの問題)

上のような変更が行われようが、残念ながら、今のままであろうが、次の努力は必要である。

人は無限の可能性がある。それを伸ばす後押しをするのは周りの人の責任である。子がどう学んでいるか、必要なことが子にちゃんと伝わっているかどうかは、教師だけでなく日々親などが気に掛けることが不可欠で、問題があればサポートが必要だ。

勉強については、宿題とテストについて本人が分からないところを個々にサポートすることが大事である。一日30分ですむ。これができていないと、生徒にとっては宿題とテストの意味がない。小学校4-6年が特に重要である気がした。ちゃんと自分で解いているか、どう解いているかは、大人が10分見れば分かり、指導に数十分かかるが、先生は、その細かなチェックを、毎日、数十人分行うことはできない。

全ての子に対して、子が自分で生き方を身に付けるまで、個々の子に対応した生き方を誰か（多くの場合、親）が教えることが必要である。

今はそれが無い場合が多い。これができれば、前に述べた「少数が多数をリードして世界が回っているという普遍的な原理」を壊すことができるのではないか。不可能に近い課題かもしれない。同時に行うべき教育内容の改善も不可能に近い。

今のテスト、宿題のあり方の検討が必要である。国の問題が大きい自治体でやれることも多い。麹町中学の変革例などを報道で知った。

野党がこの問題を取り上げないのには不思議と言うしかない。教師の労働条件の問題ではない。教育内容の問題が第一である。全体に、条件の改善は本質的でなく、内容の改善を要するのは多くの問題と同様である。

2015年と2016年の二年間、「国政モニタ」制度で、毎月二件（2016年は三件）ずつ、（戸籍上の名で）意見を送り続けたことがあった。

小学生の授業の内容についての意見が半分くらいだったと思う。(小学校高学年の先生を学科選任にする問題だけ解決した)

当時、孫が小学生だった。孫が小学6年の正月休みの二週間、ほぼ毎日、勉強を教え、教科書、学習指導要綱にも目を通した。抽象化と、生き方、何が価値かを教える難しさがあった。今の大人の問題も同じである。

後書き

第一部に続きこの第二部では、1. 第一部の課題とその解決に向けて今思いつくことを書いた。

2. 人類の統合理論、宇宙論理学は第一部のまとめ芋になっている。今後の人類の大きな課題でもある。3. どの程度書くかどうか悩んだ末に、常識外れと反発を受けるポスト資本主義への過渡期の提案を書いた。緊縮財政をやめ土木、建築の基幹産業化、初等教育の大改革など必要な最低限である。少し前提を変えれば異なった像ができる。

文献

[RDI] デカルト, 「精神指導の規則」 野田訳, 岩波文庫, 規則第 3-8. 11.

1950 (同じ訳者による新訳あり), 原著 1701. 未完成のノート。次の

AMAZON 書評内の高原利生の書評参照

http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4003361342/ref=cm_cr_dp_hist_five?ie=UTF8&filterBy=addFiveStar&showViewpoints=0

[EPM] K. マルクス, 「経済学・哲学手稿」 藤野訳, 国民文庫, pp.98- 157, 1963, 原稿 1844. (岩波文庫版も参考にした)

[DV] ダヴィドフ, 「疎外と自由」 (ロシア語原著名「労働と自由」 1962、ドイツ語訳 1964、藤野訳, 1967. 青木書店.

[TRSW] 寺沢恒信: 「弁証法的論理学試論」 大月書店, p.157, 1957.

[YSMT1] 吉本隆明, 「論註と喩」 言叢社, 1978.

[YSMT2] 吉本隆明, 「『反核』異論」 深夜叢書社, 1982.

[YSMT3] 吉本隆明, 「反原発異論」 論創社, 2015. 対象化のマルクス主義と一体化のキリスト教の双方に優れた見識を持った思想家に、田辺元、吉本隆明がいる。一体化、対象化とともにエネルギーも重要である。吉本隆明は原子力についてもすぐれた見識を持っていた。

- [STP2016] “科学技術基本計画”, 閣議決定, p.11. 2016.
<http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf>
- [YNH2011] ユビル・ノア・ハラリ「サピエンス全史, 文明の構造と人類の幸福」(河出書房新社 2016. 原著 2011, 英訳 2014)
- [DIA] 中山正和, 「演繹・帰納・仮説設定」産能大, 1979.
- [TS] 田中宇の国際ニュース解説 <http://tanakanews.com/>
- [LB] L. Ball, 「階層化 TRIZ アルゴリズム」, 高原, 中川訳, (ドラフト版, 創造開発イニシアチブ 2007.) クレプス研究所, 2014.
- [ES] Ed Sickafus, “Subconscious Problem Solving Using Hazy Heuristics”, International Journal of Systematic Innovation, Vol. 3(1) . ICSI2015, 2014. 7. 2014. 高原, 古謝, 中川共訳, 2015年7月1日.
<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2015Papers/Sickafus-ICSI2014/Sickafus-ICSI2014-Subconcoious-150721.html>
- [TKHR T] 高原友生, 「悲しき帝国陸軍」中央公論新社, 2000.
- [YN1994] 安井信子, 「〈個〉を超えて—現代アメリカ文学を読む—」和泉書院, 1994. 感動的な個の展開の論理である。本書はこの本の対案であり続きでもある。
- [HKD] 福田ちはる, <http://ipmainly.com/category/triz>
<https://ipmainly.com/triz-edu/>
- [MT] 石崎徹, 「石崎徹の小説」<http://maganetoru.blog.fc2.com/> 2019年9月と10月、本稿四版についてまずい議論をした。
- [NKGW2001] 中川徹, “TRIZ のエッセンス—50 語による表現”.
<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/Essence50W010518.html>
- [NKGW2005] 中川徹, “創造的問題解決の新しいパラダイム—類比思考に頼らない USIT の 6 箱方式—” 日本創造学会第 27 回研究大会 2005.
<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2016Papers/Naka-JCSJournal2015-USIT/Naka-JCSJournal2015-USIT-160608.html>
- [NKGW2016] 中川 徹, “社会の貧困の問題に TRIZ/CrePS でアプローチする: 人々の議論の根底に、人類文化の主要矛盾「自由 vs. 愛」を見出した”, 第 12 回日本 TRIZ シンポジウム. Sept. 2016.
- [NKGW2017] 中川 徹, “人類文化の主要矛盾「自由 vs 愛」を考察する(2) 個人における「自由 vs 愛」の矛盾・葛藤と「倫理」”,

第12回日本 TRIZ シンポジウム, Sept. 2017.などの発表論文をまとめ直したものの。

[NKGW2019] 中川徹, “6 箱方式”, 『デザイン科学事典』, 日本デザイン学会編, 編集委員長 松岡由幸, 丸善出版, 2019.10, pp. 274-277.

[http://www.ogjc.osaka-](http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Naka-DesignEncyclo-2019/Naka-Encyclo-SixBox-191120.html)

[gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Naka-DesignEncyclo-2019/Naka-Encyclo-SixBox-191120.html](http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Naka-DesignEncyclo-2019/Naka-Encyclo-SixBox-191120.html)

[OUYOU1990] 高原, 龍, “理想技術論と情報ネットワークシステム”, 応用科学学会誌, Vol.4. No.1, pp.19~25. 1990.

下記の引用資料は、中川徹教授のウェブサイト参照。

<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/indexGen-Paper.html#paper0> の

(C)「学会等発表・研究ノート・技術ノート」高原利生論文集1,2,3,4. 論文解題もここに載せていただいている。

[TJ2003Jun] Takahara, “Application Area of Thinking Tool or Problem-Solving Tool”, The TRIZ Journal, Jun.2003.

[FIT2004] 高原, “オブジェクト再考”, FIT2004, K-053, Sept. 2004.

[FIT2005/2] 高原, “オブジェクト再考3－視点と粒度－”, FIT2005, K-085, Sept. 2005.

[TS2010] 高原, “理想的 TRIZ TRIZ という生き方その2”, 第6回日本 TRIZ シンポジウム, Sept. 2010.

[TS2011] 高原, “一体型矛盾解消のための準備的考察－生き方の論理を求めて－”, 第七回 TRIZ シンポジウム, Sept. 2011.

[IEICE2012] 高原, “物々交換誕生の論理 — 矛盾モデル拡張による弁証法論理再構築のための —”, 2012 信学総大, A-13-1, Mar. 2012.

[THPJ2012] 高原, “技術と制度における運動と矛盾についてのノート”, TRIZ ホームページ, 2013.

[FIT2013] 高原, “世界構造の中の方法と粒度についてのノート”, FIT2013. D-001, Sept. 2013.

[THPJ2015/1] 高原, “粒度、矛盾、網羅による弁証法論理ノート: ノート 2015-1”, TRIZ ホームページ, 2015.

[FIT2016] TAKAHARA Toshio, “Radical Enumerative Thinking and Contradiction of Unity for World View, the Way of Life and the Future of Human Being”, FIT2016, Sept. 2016.

- [IEICE2016] 高原, “地球の弁証法論理”, 2016 信学総大, A-12-1. Mar. 2016.
- [CGK2016] TAKAHARA Toshio, “A Note on Energy and Post-Capitalism”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2016.
- [FIT2017] TAKAHARA Toshio, “World View, Attitude and Logic of Life to Survive in the Universe”, FIT2017, O-018, 2017.
- [IPSJ2017] 高原, “大きな問題の解決方法”, 情報処理学会 79 全大, 7F-02, 2017.
- [CGK2017] TAKAHARA Toshio, “Radical Enumerative Thinking and Contradiction as the Way of Life”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, R17-25-07, 2017.
- [IEICE2018] 高原, “矛盾モデルと根源的網羅思考による人類史の論理と価値実現”, 2018 信学総大, A-12, 2018.
- [FIT2018] TAKAHARA Toshio, “Logical Possibility of Ideal Way of Life; Barter as a Background of Homo Sapiens”, FIT2018, N-018, 2018.
- [FIT2019] 高原, “弁証法論理学の生成構造”, FIT2019, O-028, 2019.
- [CGK2019] 高原, “網羅についてのノート—事実と価値の本質と全体のための—”, 電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2019.

概要 第一部 論理学、世界観、生き方へ 永久に未完成の哲学ノート

読まれる方に：まず（第一部の）前書きとこの概要で、何を目的にしているかを把握した上で、本文に目を通し、改めて概要を再読されるのがよい。概要は、常識と異なるので、おそらく論理によってのみ読み続けることができる全体の骨子だからである。

本稿はノートである。感情、感性は重要だが、本稿は論理だけ扱う。書いている内容は仮説である。論理学、世界観、これによる生き方を述べる。

1. はじめに：事実とその網羅的把握

おそらく、無か何かから、存在と関係（運動）が分離したことが、空間と時間の分離と始まりをもたらした。宇宙が誕生し、事実が時間的歴史的に変化していく。知的生命、知的生命の観念が生まれる。事実の変化が知的動物の観念の中に思考を生む。

存在の形式が空間である。関係、運動の形式が時間である。関係、作用、変化、運動、過程は、同じものである。関係、作用は、やや空間より見た

表現、変化、運動、過程は、やや時間よりに見た表現である。**例えば、自動車の運動は、自動車と大地の関係である。自動車と大地は存在である。**

「ある」ものを**事実**にとらえる。事実を、**客観的世界と知的生命の観念に、ある存在、関係(運動)**の全体にとらえる。

つまり、事実のある場所が、客観的事実と知的生命の観念の中の像の二つで、事実の要素が、存在、関係(運動)の二つで網羅されているものととらえる。以下、知的生命を人に限って検討する。

補足する。1) 要素である**存在**も「固定的にとらえられる実在のものと固定的観念」で網羅する。観念の固定的状態にある存在のとらえ方は常識と異なる。これに代わるいい用語がない。**ある木の部品の集まった状態が椅子Aであることが持続する時間は数十年かもしれない。観念のある状態Bが持続する時間は数マイクロ秒かもしれない。このAもBも、ある関係によって別の状態に変化するまでの持続の間、存在と扱い、関係、運動(Aの場合は労働、Bの場合は思考)と対等に扱う。**

2) **存在と関係(運動)** が分離した後の世界を扱う。

存在と関係(運動)については、

- ・存在であり運動である場合、**例：光が粒子であり波動である、**
- ・存在と関係(運動) が独立して関係する場合、

例：(後に出てくる) 矛盾モデル、素粒子とその間の運動、

- ・存在と運動(関係) が相互転換する場合、**例： $E=mc^2$ / ある存在と関係(運動) が別のある存在と関係(運動) と相互転換する場合、例：50 リットル容量の汲み上げ装置を1回使用する運動(関係) でも、この汲み上げ装置に10 リットル汲んで5回使用しても、機能は同等、がある。**

3) 客観的事実は問題が少ない。人が認識できるかどうかは別である。

例：縄文時代のある集落の制度の内容、宇宙人がいるかいないか。

主観的内容は人によって異なる。現に人の観念に「ある」ものには、各個人の脳内の過去、現在、未来についての事実の像、価値観を含む。観念の中の事実の変化、変更の無数の考えられる可能性も事実である。

主観的内容の事実の例：ある人の脳内に昔浮かんでいた幻想。変更の可能な未来像。

従来からの把握を網羅した事実概念ができた。最も単純かつ必要十分な事実把握である。これだけは、新実在論に近い。

- ・目の前の**現実**は、宇宙誕生以来の歴史の論理的網羅的総括である。
- ・論理的網羅は今までの人の努力の歴史を総括する態度、方法である。**何かを把握するとは、本質理解とその要素の論理的網羅である。**

現在、多様であいまいな意味で使われている用語、概念を、意味を限定して使っていることがある。

限定と言っても「今までの意味の網羅になっている」ようにする一般化である。こうすれば、読む人は、自分の使っている用語の意味をそのままにして読むことができるかもしれない。

用語、概念の網羅的一般化は、仮説であり発見に近い。用語、概念の意味、事実の法則的認識、根源的変更も、論理的根源的網羅的に行うのが本稿の態度、考え方の基本である。

知覚した事実から、ある抽象度（粒度）により観念内で扱う情報を抽出し**オブジェクト**として扱う。事実の歴史的变化からオブジェクト間の論理ができ、人は事実を把握し論理により変更する。

そして、歴史を総括しゼロベースで網羅的に全体を考え直した結果、本稿ができた。以下、従来の哲学を網羅した哲学（論理学、世界観）、生き方を作る過程を記す。

2. 生き方

人の、事実との向き合い方、態度には、事実のとらえ方である**世界観**と、事実に対する認識、働きかけの**方法(論理学)**の二つが中心にある。

この世界観（と価値観）、論理学(方法)を**哲学**ととらえる。

知覚と哲学が、潜在意識、態度、感情を作り、さらにこれらが**生き方**を作る。人は、知覚と生き方によって、事実を認識し現実に関わりかける。

人は、事実を変更してきた歴史、事実に関わり合う世界観、価値観と論理、生き方を変更してきた歴史を持っている。

これからは今までと異なり、人はより意識的により良い価値を歴史から引き出しより良く事実を変更することができる。

感情や芸術ではなく哲学がこれからの歴史をより良く作っていく。しかし、人の作った何事にも完成したものはない。

完成したと思う思考は、死んだ思考の絞りかすである。哲学も、虚構、フィクションかもしれない仮説である。無意識に哲学によって作られる常識も科学も仮説であり、より「正しい」常識、哲学、科学を目指して変更を続けていく必要がある。

普及している思考体系、常識などの共同観念、制度は、技術と同様に、認識、外界への働きかけの有効な手段になっている。

これは、今までのいつの時代も、支配層が中心となり労力をかけ実現してきた。人は、作られた共同観念、常識を疑わず生きる。社会は、200 年前に比べると格段に進歩したが、この数十年は殆ど停滞している。

一方、科学・技術の進歩により解けるのに解決していない課題も大きくなった。

もし全ての人が、これからどう行動するかをゼロから考え直すとしたら、人類の活動そのものが止まってしまう。この変更を始めるにはどうすればいいか？

1) 古くなった既存の思考体系や常識などの共同観念の、根本的な変更必要性和その内容を理解し、2) 同時に、それによる行動が、今、有益で、今から始められると理解する必要がある。変革の根本的必要性と内容は世界と古い思考の問題の内容とその解消方法である。この理解は絶望的に困難である。

本稿は、古い既存の思考の論理、方法や世界観、常識などの共同観念と世界の変革の内容を、歴史の総括によりゼロから作り直す。本稿は変革と新しい生き方から遠い自分への要求書、全ての人に対する提案である。

自分が他のあらゆるものに「生かされている」という認識は必須である。自分と現在をありのまま認め、人の主観的な幸せと客観的に世界の価値に寄与することが両立する生き方を作りたい。これが**第一の問題、目的**である。この両立は自明の要件と考える。もし、1) 個々の人が外の世界と関係無く存在し、2) 人が何もしなくても、良い価値に向かっている客観的事実とその認識があるなら、自分の幸せだけを求めてもいい。しかし この 1) の条件はなく人と世界は共に支え合って生きている。

2) は、全ての人と世界の良き共有価値があることが前提になる。

今は、利益を増すことだけが共有価値になっていて、問題を起こしているので、今はこの条件もない。従って第一の目的は達成できない。

そこで、人類の歴史を貫いている基本法則、基本原理、新しい**世界観、価値観**の把握がいる。これを作る**論理学**も要る。これによる**具体的生き方**を作ることを目指す。

これが**第二の問題**で、(第一の目的、問題にとっては)**手段、方法**である。

この基本法則、基本原理は、今までの人の全ての歴史と知見から得られ、今後百年、千年の、全ての人や生命にとって共通の基本法則、基本原理、生き方であるのがよい。

全てはお互いに関係しあっているから、論理的、理想的には、全部を求めない限り、その一部も求められない。これは空間から述べた理想実現の仕方である。

理想を、極めて高い水準を超える状態ととらえると、努力を持続しても、なかなか理想は得られない。(少し努力して得られる状態を理想とは言わない) 理想を、努力する過程だと考えると、持続する努力が不可欠であるという「欠点」はあるものの、理想は常に得られしかも「理想の状態」にも常に近づく。これは時間から述べた、あるべき理想への近づき方である。

カントのように人は先験的に理性や悟性を持っていてその上で判断しているととらえない。西田幾多郎のように純粋経験を前提にしない。

人は、知覚と、後天的に作られる世界観、価値観) に決められる潜在意識、感情、態度と、論理により、外界を認識し外界に働きかける。

人が今、生きることを次の相互作用の系列の繰り返して近似する。

今、生きること=事実 $\Leftrightarrow$ (知覚 $\Leftrightarrow$ (世界観 $\rightarrow$ 価値観) $\Leftrightarrow$ (潜在意識、態度、感情) $\Leftrightarrow$ (論理(学)、認識、行動の決定象) $\Leftrightarrow$ 文化・文明の支援による認識と行動)

生き方=事実 $\Leftrightarrow$ ((世界観 $\rightarrow$ 価値観) $\Leftrightarrow$ (潜在意識、態度、感情) $\Leftrightarrow$ 論理(学))

潜在意識そのものは、直接意識できないが、意識し続けると自然に潜在意識に入る。態度、感情についても同様である。

哲学= (世界観 $\rightarrow$ 価値観) $\Leftrightarrow$ 論理(学)

大雑把に世界観、論理は同じようなものである。哲学を、空間を全体的に、時間を長期的に見たら世界観であり、今、着目する空間を今、変更する短期で見たら論理である。

今は労働疎外、いじめ、復讐、戦争などの諍い、エネルギー問題、環境破壊が大きい。これらに対しては条件を変えるだけでなく、内容を根本的に解決する必要がある。技術、科学の進歩により、これらを操作し解決できる力、範囲が、強く広がった。そのため、人類の発展の法則、原理を正しく知れば、生き方をつかむ必要性、可能性も大きくなっている。

人は哲学を意識しない。教育やマスメディアによる哲学と生き方が多くの人を支配している。人は常に意識的に、哲学、生き方の変革を続けていく必要がある。

3. 哲学1：矛盾(=運動)モデル、根源的網羅思考からなる論理学

1) 目的と定式化

目的は、完全で単純な(存在と運動の)論理学を作ることである。

作るのは、数理論理などの**形式論理と文法の間**の完全でシンプルな論理学である。これは、扱う対象の特定の後、その対象間の関係である論理の展開を経て望む結果をもたらす。

論理学を作るということは、「全ての対象についての体系的に網羅された論理」という役割、機能を持つ構造を作ることである。この論理学をゼロベースで作る。

- ・**対象の要件**：事実から、扱う対象を漏れないように正確に特定できる。
- ・**論理の要件**：事実の認識、変更の論理を漏れなく正確に単純に扱える。

2) 解の検討

対象と論理をシステムと運動に言い換える。

1. 矛盾（運動）モデルをシステムとして使う。システムは、オブジェクトから作る**矛盾（運動）モデル**である。**運動のモデルをシステムと扱う**。

11. **光が粒子であり波動である**ように存在であり運動である場合、 **$E = mc^2$** の場合のように、存在と運動が直接相互転換する場合の運動、矛盾モデルは、今表現できない。

12. 存在と運動が別々にある場合、矛盾（運動）モデルは、オブジェクト間の関係を表す「オブジェクト1－関係－オブジェクト2」で表される。

これは世界の近似単位であり、矛盾モデルの合成で世界の（11 以外の）事象を近似的に表せる。

2. 解をシステムと運動の二つに分けて作るのだった。システムが済んだ。

運動の一つはこの**矛盾特定のための適切な抽象化、具体化である粒度決定**、二つめは粒度決定の後行う**認識、事実変更のための推論**、さらに周辺にある論理である。矛盾モデルを命題で表しその変更を行うのが推論である。

つまり論理に大きく、縦に進む対象特定のための抽象化と解の具体化である粒度決定、変更と、横に進む推論がある。

推論は、演繹、帰納、粒度と論理的網羅が正しい限り正しい仮説設定で網羅される。この推論と粒度決定およびこれらを遂行するための全てを、**根源的網羅思考**ということにする。

本来の**思考、議論**は、事実、自分の過去の観念、他人の観念を活かして新しい像を作ることである。抽象度(粒度)と網羅の見直しを続け、**仮説設定を行う根源的網羅思考**がこれを実現する。これで、**思考、議論**ができあがる。根源的網羅思考には、謙虚さが必要である。一般論だが、考えるということは自分の考えを対象化相対化し変えることなので考える人は謙虚になり易い。

根源的綱羅思考は、機能的内容的には、事実と価値のより大きな全体と本質を、求め続け実現し続け得る思考である。

矛盾モデルと根源的綱羅思考をあわせて**弁証法論理学**ができあがる。

4. 哲学2：人類の基本原理の作る世界観と、生き方

人は皆、持っている無限の可能性を開花させることができず生き死んでいく。次の課題は、その可能性を開花させ世界を変えるための世界観、価値観、これらによる生き方の検討である。前提として、「**種の存続－個体の生－生き方、生の属性**」というこの順に次第に小さくなる価値、目標の系列を仮定している。

新しい生き方が実現していなくても、個体の生は、生き方、「生の属性」より重要である。1) 生は、生の属性の前提であり、2) 生きているとその人に関わる努力の一步が人類に小さくとも必要な何かをする可能性があり、その一步が大きな全体の革新のための一步かもしれないからである。

その一步がいつの誰によるかは全ての人が生きてみないと分からない。地球や宇宙から見れば全ての人は生きなければならない。本稿は2016年相模原事件の犯人を含む全ての人へのメッセージである。

求めようとしている価値は、種の存続－個体の生という仮に自明とする価値に続く、「**得られる可能性があれば「種の存続」を取りあえず究極の目標にしても良いような**」生き方「生の属性」の内容である。

これを次の準備と仮説で検討する。

準備：目的は、全てのものの全ての価値をお互いに高めて行く客観と、その主観的な実感である幸福の両立ではなからうか？しかし、実際には、多くの人、人生の相談者も評論家も、個人の「幸せ」だけを述べ求めて終わる。

そうになってしまうのは、この主観的な幸せと客観的な全価値の増加との両立という表現が一般的抽象的過ぎ具体的内容が伴わないからではないか。一つ一つの行動、態度を規定する具体性が必要である。これがないと、今のよう「幸せ」を求めるだけになってしまう。そうすると、「幸せ」には、なれない。全体でなく一部であるからでもあるが、なぜかは分からない。

分からない時は、歴史全体を総括した上での**現実のゼロベースでの再構築**を行い、**現実の細部をありのまま認めゼロベースのこれからの変化の重視**をする態度になってみる。人類は今まで、**対象化**を行い、より高い機能とそれを実現する構造を求めてきた。

言い換えると**機能と構造（内容と形式）の矛盾を解き続けその解の運用を続けた**ということである。物事を変更するのは機能と構造の矛盾である。これに対し概念を変更する方法は何か？

対象化という概念を高度にする方法は何か？

仮説1：何かの本質（正）とその真の反対の本質（反）の矛盾の弁証法的止揚（合）が行えると根本的に今の何かが一段高まる。全体がAと単なる非AではないBで網羅されているとき、その全体に関しAの真の反対はBであるということにする。歴史の教訓の一つは、正と反が、秩序と非秩序、合理主義と非合理主義のような単なるAと非Aでは有益な議論ができなかったことである。

仮説2：人の今扱う対象であるオブジェクトへの態度、認識、行動は、**対象化**とその真の反対である**一体化**の二つで網羅されている。

対象化は、対象を自分と切り離れた対象として扱う態度、行動である。一体化は、自分と対象を一体として双方の価値を高める態度、行動である。

仮説3 仮の結論：人類に必要なのは、この対象化と一体化の統合という一体型矛盾の解のための努力である。

以上が論理的検討の全てである。

歴史の検証：人類の歴史を見てみよう。歴史の中で対象化と一体化の初期形態を探し、その後の対象化と一体化の変化を見るためである。優先度の高い種の存続、個の生という価値が実現されてきた歴史がある。

1) 地球に生命が登場してから農業革命まで

地球が生まれ、多様な環境の星になった。生命が登場し、動物が生まれ、知覚と反応という特性に加え意図的な運動が始まる。長い時間が経ち人による狩猟、採取の中で言語、道具が生まれ、**対象化**の原型が始まった。対象化が主観と客観の原型を生む。主観と客観は、今は重要であるが、生まれた当初は、主観は初歩的で客観と主観は矛盾ではなかった。

第一の目的の幸せという主観と世界の価値に寄与する客観はまだ抽象的静的関係だった。これは農耕開始後も続く。

2) 物々交換の開始とその後

約一万年前、太陽エネルギーを利用する農業革命が始まる。農耕地開拓、農耕という対象化が、その後の人類を決定的に変える。保管可能生産物が増え保管が進む。保管食料を奪いに来る相手との闘いで死者が出るようになる。この問題の解決が集団リーダーの悩みだった。

この闘いの中で、次第に「**所有**」やそれに基づく「**奪う**」という概念が数千年かかって生まれる。

約六千年前、**物々交換**という偶然の解決策が得られ広まっていく。物々交換は「**所有**」というあるものを自分(達)に一体化する**一方向一体化**概念と同時に生まれた。「**所有**」が最初の一体化観念だった。

物々交換の発達が経済を発展させたため人口が増え、それから約二千年後増えた多くの個をまとめるために集団や神や自然への「**帰属**」が作られる。帰属は、自分(達)をあるものに一体化するもう一つの一方向一体化である。地球では帰属を作ったのも物々交換だった。

物々交換によって生まれた等価原理が、科学、制度を進歩させていく。「**所有**」も普及して法的概念になり制度化される。既にあった技術、芸術、科学に加えて制度がここで出来上がる。

1. 生産を行う技術と労働の体系と運用、
2. 生産、交換の管理のための経済制度、
3. そのための初歩的な政治・宗教制度、
4. 行政機構の四者の複合体が四千年前の中国、中近東の文化・文明の原型である。1 が技術、2, 3, 4 が制度である。

表 四つの文化と対象化、一体化

	働きかけ	認識
対象化の手段	技術	科学
一体化の手段	制度	芸術

これで対象化に全ての人が参加する初歩が出そろった。以後の人の歴史は、技術と制度における**機能と構造の矛盾**を解き続けてきた対象化の歴史である。

ただ等価原理は「罪と罰」や復讐も生んでしまった。

3) 結論：対象化と一体化の一体型矛盾の完成が必要な今

化石燃料利用による産業革命、資本主義は、対象化を急速に発展させ、人の自由の増大とお金とその価値だった。対象化は、500 年に一度の人類の大災害を認識させそれを防ぐ力も人類に得させた。

だが対象化は、対象の価値を高めなかった。人が地球を破壊しつつあり、「国」間、民族間や人の復讐による諍いも続いている。

産業革命以後の対象化の急速な発展が、一体化の不足を顕在化させ、対象化と一体化の統一による解決という定式化をやっと今もたらした。対象化が起こした問題を解決することと、所有と帰属という一

方向一体化でなく**双方向一体化によって対象の価値を高める**必要性が、今、同時に明らかになっている。

今後の生き方を規定する基本法則、原理は**対象化と一体化の矛盾、自由と愛の矛盾**[NKGW2016]である。二つはほぼ同じものである。この矛盾は一体型矛盾でお互いに相手を変化させる永続的運動を作る。

対象化は、対象を自分と切り離れた対象として（さらに自分も相対化し対象として）操作する態度、行動である。一体化、愛は、自分と対象を一体とし双方の価値を高める態度と行動である。

誠実さはこれらの前提である。

理想の目的である抽象的な主観と客観の統一の具体的実現方法が、個々のオブジェクトへの具体的な向き合い方である対象化と一体化、自由と愛の一体型矛盾である。課題が解決されるにつれ、二項自体もより完全になっていく。

やっと、第一の目的：抽象的な客観と主観の一体型矛盾つまり価値を高めて行く客観と主観的な実感である「幸福」の二つの両立が、第二の目的、手段：対象化と一体化、自由と愛の統一によりできるようになった。

実現まで（と実現後も）より大きな価値と真理の全体を根源的網羅的に求め続ける態度が必要である。

自分が他のものに「生かされている」一方向の認識から進み、**対象化と一体化の統一、自由と愛の統一の実現のための努力が必要**だとわかった。

そのために、あるいはその実現の中で、事実と価値の全体と本質を、網羅的に求める努力が必須である。

実現例を二つ述べる。

例 1：労働を、良いものを効率的に作り利益を増す「合理的」目的に、材料や使う人など対象の価値を増す目的を加えた労働に代える。

この労働には、ものやサービスを作り運用する労働だけでなく、技術、制度を作り運用する労働、子育てなど今、賃労働として扱われていない労働も含む。

労働(と生活)の、ものの対象を相手にする場合、キーは今より大きな全体に向かうための網羅の態度と対象との一体化という内容、価値である。今の労働運動、働き方改革は、条件改善だけの運動という欠点がある。

対象化と一体化、自由と愛の矛盾の統一という価値の実現、全体に向かうための網羅の態度の労働運動を労働にし、同様に生活運動を生活にしよう。

例2：思考を、自分の前の意見と新しい意見とを弁証法的に統合するものにする。

議論を、相手の言(の整合性)を理解した上で、相手の意見と自分の意見とを弁証法的に統合するものにする。これらは全くできていないに等しい。

思考や議論に共通に、この統合のキーは、今より大きな全体に向かうための網羅の態度である。議論の場合、キーに、相手への敬意と、自己の対象化、客観視、相対化の態度が付け加わる。これが本来の議論、思考の内容である。

しかし、今はこの思考も議論もなく、民主主義は名前だけである。全ての人の思考と議論が豊かな内容に変わる必要がある。

この二つの例の、対象化と一体化、自由と愛の矛盾の解の実現と、その過程における 1. より大きな全体、より大きな価値、より正しい真実を求め続ける全体への志向、2. 自己の対象化、相対化は、過労死もいじめもない生き方とポスト資本主義を作り、同時に豊かな生き方そのものである。

お金を価値とする資本主義の矛盾の解は、お金だけが価値でないポスト資本主義に進むことである。

機能と構造の矛盾の先に、地球の条件下で対象化と一体化の矛盾が出てきた。対象化の人類から新しい段階に進み得るようになった。

この論理学、世界観、生き方を、**地球の全ての人の哲学、生き方、常識**にしたい。もし、**人類が対象化と一体化、自由と愛の統一をすることができるならその時に、人という種は、いかなる災害があり太陽がなくなっても存続に値する存在になり、価値の系列の仮定が正しいことが実証される。**さらに他の生命、宇宙の存続、他の宇宙人の価値も検討しなければならぬ。

条件整備は本質の解決にならず、生きる目的や生き方の内容が重要であることはどの問題にも共通である。民主主義国と社会主義国の差は、生き方や制度の条件の差である。内容が重要である。

5. 結論的考察

物々交換開始から(第一の) 目的を達成する手段が分かるまでに数千年かかった。人間は、意識的に努力して文化・文明を介し、認識と世界の変更を行える稀な生命になった。それを可能にしたのは、地球の特殊な環境とそれによって生まれた物々交換であった。本稿は、結果的に「対象化と一体化」=「自由と愛」という概念を見つけ、これと「客観と主観」との二つの関係の関係から見えてきたことを述べている。

今後、今の「常識」とは異なるものが少数の理解と努力から始まり、この理想が実現されるのに千年かかるというのが私の予想である。

提案している生き方は常識を変え常なる努力を必要とする。努力する人は全能力、全人格を発揮し、自分と他人、他オブジェクトを良くし続ける。

気になることは、常識を変え、常なる努力を必要とする生き方を本質的に受け入れない人、本質的構造があるのではないかということである。困ったことにこの解決は難題である。

本稿は、今までの乏しい経験と検討の結果、2019年時点で分かったこと、分かっていないことを書いた。本稿で論じていない感情や芸術を付け加える必要がある。これを除くと、必要な哲学と生き方は、これで全てである。

本稿はユナリ・ノア・ハラリとジャレド・ダイヤモンドにないものを書いた。

本稿は、1) デカルトの「網羅」の詳細とその他の要素との関係を明らかにした。

2) パースが探求した仮説設定について演繹、帰納を含む定式化を行い、推論を網羅した。

3) 初期マルクスとTRIZから、既存「マルクス主義」の世界観や「弁証法」を含みそれらを網羅したものを作った。

彼らの求めたものを根源的網羅的に求めた。

これらは世界観と思考の論理の見直しに必要な最低限の対象だった気がする。

おわりに

第一部 哲学（論理学と世界観）と生き方、第二部 課題、人類の統一理論、宇宙論理学と過渡期への提案は、私にとって同じものである。

第一部は数百年有効、第二部は数年有効という差があるので二分割した。

2019年時点で、分かっていること、分からないことを書いた。